# 美男城

柴田錬三郎

新潮文庫

カバー　中尾　進

# 美男城

柴田錬三郎

新潮文庫

美男城　柴田錬三郎　新潮文庫〔草〕一五〇E　280

0193-115005-3162

¥ 280

〜〜新潮文庫〜〜

柴田錬三郎の作品

剣は知っていた（上）
〃（下）
江戸群盗伝
続江戸群盗伝
美男城
眠狂四郎無頼控（一）〜〃（六）
眠狂四郎独歩行（上）
〃（下）
眠狂四郎殺法帖（上）
〃（下）
孤剣は折れず
赤い影法師
運命峠（前）
〃（後）
剣鬼
眠狂四郎孤剣五十三次

カバー印刷　錦明印刷

新潮文庫

# 美男城

柴田錬三郎著

新潮社

美男城

柴田錬三郎著

新潮文庫

# 美　男　城

柴田錬三郎著

新　潮　社　版

1410

## 目次

# 美男城

# 心驕れる姫

## 一

濃霧が、天地をつつんでいた。

夜半まで、吹き荒れていた風雨が歇んで、うそのような静かな夜あけであった。

どこか、近くの高い樹の梢から、濡れたつばさのしずくを撒いて、一羽の鳥が、空たかく舞いたって行く音がきこえたきり、しずけさは、つづいているのであった。

しかし、濃霧は、絶え間なくうごいているのである。

いつの間にか――。

灌木のしげみが浮きあがったかとおもうと、そこから、丘の斜面にかけて、白い幕があげられるように、ひらけて行った。

秋風が、旗すすきのあいだからわいたように、その美しい穂波をそよがせはじめた。

とみるうちに、もう、かなたに、美濃の連山が、うす墨を刷いたように、乳色の空の下に、ゆるやかな起伏の状をあらわしていた。

丘の斜面を、目ざめたいっぴきのけものが、すすきを割って、ツツツ……と、駆け下って行

く――。

おそろしい迅さだった。

たちまちのうちに、麓の松林に降り立つと、ひょいと、すすきの中から、首をもたげた。

人間だった。しかも、まだ十一、二歳の――。

けものとみえる程、頭髪もみだれていたし、顔もまっ黒で、よごれはてた襤褸をまとっていたのである。

顔のまんなかで、大きくひらいた双眸が、小鹿のそれのように、つぶらに澄んで、よくうごくのであった。腰には、これは、身なりにふさわしくない、飾りのある小刀をさしていた。

首をのばして、明けそめた野を見わたす。

霧の散りはてたそこには、惨たる光景が、あった。

具足をつけた屍が、るいるいとして、風雨に伏したくさむらや、水かさを増した小川に、横たわっていたのである。

松の幹を抱くようにしている者もあれば、すすきを褥に仰臥して、光のないまなこを天に送っている者もある。清洌な流れに半身をひたして、まだ摑んでいる槍を水底でゆらゆらとゆらめかしている者もあれば、仆れた愛馬のくびへ、顔を俯っ伏させている者もある。

昨日の午後まで、ここ関ケ原の原野は、鯨波が噴きあがり、軍馬がいななき、太刀と太刀との打ちあうひびきが満ちていた。

決戦のあとに、轟然たる風雨が来て、血にまみれた野を洗いさった。この一夜をさかいにして、



天下の形勢があらたまることを象徴するかのように――。

左様、天下は、今日から、徳川家康のものになったのである。

もっとも、この少年にとって、そんなことは、どうでもいいことだった。

ただ、その小さな胸をいきいきとはずませているのは、眼前によこたわった武者たちの持っている武具に対する興味であった。

少年は、兎のように、ぴょんとひと跳びして、屍のひとつへ、走った。

すこしも怯じる様子もなく、かたわらに落ちている軍扇をひろいとって、ぱらっとひらいてみる。

金箔地に、銀の日の丸が描いてある。

少年は、大将にでもなったように、胸をはって、軍扇をかざし、

「やあ、やあ――者ども、すすめ！　いざ、すすめ！」

と、さけんだ。

この時――。

数間むこうの小川のほとりを、ゆっくりと歩いて来ていた一人の武士が、その声をきいて、立ちどまった。

まだ廿代もなかばに達していまい。彫のふかい、造りに気品のある、すらりとした長身の青年であった。浅黄の小袖を着流した牢人すがたで、黒い一剣だけおびていた。

青年の視線と少年の視線が、流れをへだてて、ぱったり、ぶっつかった。

うとした。
少年は、なんとなく、にこっ、と微笑をのこしておいて、急に、身をひるがえして、走り出そうとした。

「おい――」

青年が、呼びとめた。

少年は、足をとめて、首だけまわした。

「なんだい?」

「おまえは、このあたりの者か?」

「ああ、そうだよ」

「馬を持っている家を知らぬか?」

「知らねえよ……。馬なんか、みんな、合戦で、とりあげられてしまったよ。まぬけだなあ、いまごろ、馬をさがすなんて……」

きびきびした、大人びた口調で、やりこめた。

青年は、苦笑した。どことなく、暗い翳をひいた顔色だった。

## 二

それから、いくばくかの後、青年と少年は、なんとなく肩をならべて、丘をのぼって行った。

少年は、軍扇のほかに、奇怪な形相の朱色の猿頬をひろって、かついでいた。

金時が、金時が、
緋おどしよろいに
金ぷくりん
赤母衣羽織に
朱槍をかざし
まっ赤な夕陽を
行ったげな
行ったげな



なんの屈託もなく、大声でうたって行く少年を、青年は、微笑して、かえり見た。

「おまえ、なんという名だ?」

「宗太郎」

「家は、百姓か?」

「うんにゃ――。おらア、ひとりだ」

「ひとり?」

青年は、眉宇をひそめた。

「ほら、あそこ――」

宗太郎は、北方の、そこだけまだ朝霧のけむっている竹藪のあたりを指さした。

「あそこの木樵小屋に住んでいるんだ。家来がいっぴきいらア。とてもりこうな猿だぜ」

にこにこと語る宗太郎を、青年は、ふかい憐憫のまなざしで、見まもった。

「父や母は、どうした？」
「知らねえ。おらア、捨児だ。かってに育ったんだ」
けろりとして、そうこたえたものだった。
やがて、丘の頂上に来た。
おりから、東天の雲間を割って、うすむらさきの色をおびた陽光が、幾条もの箭になって、伊吹の山肌を射ていた。
少年は、眩しそうに、目をほそめて、望み見て、
「おーい」
と、声をはりあげた。
——おーい！
と、こだまが、かえって来た。
三度ばかりくりかえしてから、宗太郎は、かたわらに、茫然と佇む青年を仰いだ。
「小父さん、……小父さんは、どうしたんだい？　落人かい？」
宗太郎の目にも、この青年の痩身に滲んでいる寂寥の翳の濃さが、読みとれたのであろう。
青年は、その微笑にも、淋しさを含めて、
「そんなものだな」
「豊臣方だったんだね。バカだな。徳川方についていりゃよかったのに——」
「いや、徳川方についていても、よろいも槍も馬もすてて、隊を去らねばならないことがある」



青年は、苦いものをおし出すように、その言葉を口にした。
「ふーん」
宗太郎は、大人の悩みなどには一向に興味はなかったが、なんとなく、この青年には、親しみを感じた。
少年の神経は、敏感である。本能的に、対手の人柄の善悪をさとる。また、自分が、好きになれるか、なれないか、黒白をつける判断力もためらわずに、さっさと行動に移す。
「小父さん。おいらの小屋へ寄らないか。待ってれば、おいらが、馬をつれて来てやらア」
「どこからつれて来るのだ？」
「まだ、あっちこっちに、徳川方が陣をとっているじゃないか。そうっと、ぬすみ出して来るのさ」
盗む——その行為は、少年にとって、生きる、と同じ意味になっているに相違ない。
「盗みはいかん。金を出して、ゆずってもらいたいのだ」
宗太郎は、阿呆らしいとばかり、小鼻をふくらませた。
とたんに——。
「あ、ああっ！」
と、叫んで、目を瞠った。
丘の裾をめぐる松の疎林の中を、なにか鋭い声を迸らせて、駆け抜けようとする一騎が見下された。

つづいて、林の外側から、旗すすきを蹴ちらして、武者数騎が、猛然と、その一騎をおし包むように、迫って行く。

朝陽は、いま、潮のように、そこまで光の波をひろげて来ていて、明暗ふたつに彩られた樹間の、その争いは、ふしぎな美しい光景として眺められた。

どうしたはずみか、襲われる一騎が、どうっ、と転倒した。

四方から殺到した武者たちが、一斉に、地上へ飛んだ。

「小父さん！　落人だぜ！　かわいそうだぜ！」

宗太郎は、青年の袂を、ぎゅっとにぎりしめて、声をはずませた。

しかし、青年は、秀でた眉を、ぴくりと痙攣させただけで、沈黙をまもり、動こうとしなかった。

猟犬の群が、けものを襲撃するような、目まぐるしい闘いが、そこに展開された。

落馬した武者は、ちょっと死んだように、草へ伏して動かなかったが、攻撃者たちが、どっと迫った瞬間、弾かれたように、躍りあがって、白刃をひらめかしていた。

さっと、うしろへ散った攻撃者たちは、しかし、手捕えるつもりか、一人も刀を抜こうとはしなかった。

どうやら、追いつめられた武者は、剣の使いかたを知らないらしく、滅茶々々に、ふりまわして、わが身をまもろうとするのだが、それがかえって、敵方の陣形に利を与える結果になった。

正面の敵へ斬りかかったところを、うしろから、蹴とばされて、だだっと泳ぐ。やっと、ふみこらえて、太刀を一閃させると、敵は、白い歯をみせてあざけりつつ、飛び退く。躍起になって、



それへむかって行けば、また、背後から、蹴とばされる。

完全に、なぶられているのであった。

「ばかやろっ！　卑怯だぞっ！」

宗太郎は、われを忘れて、絶叫した。

ついに、哀れな武者は、太刀をたたき落された。

両手を、左右から摑まれて、死にもの狂いにもがきつつ、仰のかせた顔に、ちょうど、陽光があたった。

その面差をみとめた青年が、

「おっ！」

と、ひくく唸って、突如、地を蹴った。

宗太郎が、はっとなって、

「小父さん！」

と、呼んだ時には、もうその痩軀は、斜面を、二間も駆け下っていた。

すばらしい迅さだった。宗太郎も、駆足にかけては、どんな大人にも負けぬ自信があったが、青年の疾駆には、ただ、ぽかんと口を半開きにして、見とれるばかりだった。

## 三

つむじ風が、草をわけるに似て、青年は、疎林へ達するや、ぴたっと足をとめた。

息もはずませず、表情も冴えた静けさを保っていた。
荒武者たちは、すでに、青年の存在に気づいて、こちらを、じっと睨んでいた。
捕えられた者だけが、まだ、必死に、黒髪をふりみだしてもがきつづけていた。その白い顔は、意外にも、若い女のものだった。のみならず、すべての人の目を惹きつけずにはおかない際立った美貌であった。
青年は、おちついた足どりで、すたすたと、距離をちぢめると、
「かよわい女性を捕虜にしたとて、栄誉にはなるまい。はなされては、いかがだ？」
と、云った。
「黙れっ！」
一人が、目を剝いて、怒鳴った。
「うぬら、戦場の死屍あさりの土匪ずれの忠告などは受けぬ。消えうせろ！」
「べつに、わたしは、土匪ではない。昨日までは、貴公たちと同じいでたちをしていた者だ」
「貴様っ！　早くも、具足をすてて、徳川方の詮議の目をくらまそうとか！　卑怯者め！」
この叱咤をきいて、青年は、ふっと、不審の色を目もとに刷いた。
「貴公たちは、大阪方か――」
「おう――島津義弘が麾下と知れ。小西、宇喜多、石田らの隊が敗走した後も、われわれは、小池村丘上より、敵中央を突破して、福島、小早川、本多、井伊の諸隊を蹴ちらしてくれたのだぞ！　貴様は、いずれの足軽か？」



「あいにく、大阪方ではない」
「なにっ?!」
武者は、みな、さっと、険しい形相になった。
着流しの風態を、
――さては、徳川方の忍者か！
と、見たのである。
忍者ならば、こうして、平然として近づいて来たのも、うなずける。
青年は、そう見られたと察するや、うすら笑って、
「但し、今日は、徳川方でもない。ただの牢人者にすぎぬ」
と、つけくわえた。
「うぬがっ――島津の猛者と知って、嘲弄して来るとは、いい度胸だ！　名乗れっ！」
それにこたえず、青年は、一歩ふみ出すと、捕われ人へ目をあてて、
「あなたは、金吾中納言殿のお妹君ですな」
と、訊ねかけた。
「さ、さようじゃ」
声たかく、若い婦人は、こたえた。
金吾中納言――小早川秀秋の妹に、美尾姫という絶世の美女があり、気性烈しく、男装して、戦陣に加わっているという噂は、東西両軍の間にくまなくゆきわたっていたのである。

小早川秀秋は、いったん、大阪方について、松尾山に陣を敷き乍ら、いざ合戦の火ぶたがきられるや、石田三成の急請に応ぜず、軍を動かさなかった。そして、東西両軍の戦勢を、しばらく眺めていたのち、突如として、大阪方へむかって、反撃の命令を下したのであった。

関ヶ原の決戦は、小早川秀秋の裏切り行為によって、むざんにも、大阪方の潰滅に帰したのである。

さればこそ、この島津の残党たちは、天を倶に戴かざる憎むべき裏切り者の妹を、捕えて、なぶろうとしているのであった。

青年は、武者たちを、ずうっと見わたして、

「戦いは終った。勝敗は決した。女性ひとりに復讐してみたとても、はじまらぬ。はなしておやりになるがいい」

穏かに、さとした。

「問答無用っ！　生命が惜しくば、去れっ！」

一人が、吼えるように喚いた。

青年は、しかし、なおも、語気をおさえて、

「もう一度、御忠告申上げる。おん身らこそ、徳川方に発見されぬうちに、早々におちのびて行かれるがよい」

「たわけっ！」

一人が、ほかの者たちへ、斬れ、と目くばせした。



と見てとった青年は、

「そうか！　やむを得ぬ！……おあいてする！」

凛乎として、姿勢を正した。

六名の荒武者は、きらっ、きらっ、と剣をきらめかせて、四方へひらいた。

突きのけられた美尾姫は、すでに、両手両足をしばられていたので、よろめいて、くさむらへ、倒れた。

青年は、一樹をうしろ楯にして、じりじりと敵陣の輪のちぢまるにまかせて、容易に、剣の柄へ、手をかけようとしなかった。

ついに――。

青年のからだは、刃圏内に入れられた。

正面の敵が、大きく、大上段に、ふりかぶった。

悪鬼――とも見えるその凄じい形相に対して、青年の顔が、どうしたのか、ふっと、悲しげに、ゆがんだ。

同じ国に、同じ人間と生れて、なんの怨恨もないのに、殺し合わねばならぬ――その悲惨な因縁に、青年の胸中が、一瞬、痛んだのであろうか。

「やああっ！」

呶号とともに、刃風が、宙をうなりすぎた。

次の瞬間――。

攻撃者は、おのが一刀が、松の幹を、がっ、と噛んでいるのを見た。

しかし、それを悔いるまえに、すでに、全身をつらぬく強い衝撃に、ひくい濁り声をのど底からしぼっていた。

目にもとまらぬ迅業で、攻撃者の胴を薙ぎはらった青年は、もう、次の敵に、ぴたっと、切先をつきつけていた。

くさむらから、身を起した美尾姫は、眼前にくりひろげられるたたかいを、信じられぬもののように、茫然として、見まもらねばならなかった。

どこにも剣気らしい気配をひそめていそうもない、きわめて平凡な若い痩牢人が、どうして、この荒武者たちを対手にして、太刀をふるい得るものであろう、といぶかった美尾姫は、このあいだに、別の救い手が早く到着してくれぬものかとばかり念じていたのだ。

一剣に、のこり五名をひきつけて、自若として静止相を持する青年の姿は、まことに、颯爽たるものがあった。

美尾姫の心は、にわかに、音たかく鳴りはじめた。

美尾姫は、これまで、すべての男性を軽蔑していた。これまで、美尾姫の前にあらわれた男性は、いずれも、ふたつの型にわけられた。じぶんの美貌に魅せられて、卑屈になり、へつらいをかくさぬ骨ぬき男か、もしくは、その反対に、おのれの豪勇ぶりをひけらかすことによって、こちらの心を傾けさせようとする滑稽な荒武者か、その両者にわけられたのである。

いま、三間のむこうに見る青年は、そうした男性とは、まったく質を異にしていた。



卑屈でもなく、傲慢でもなく――生死のさかいに立ち乍らも、ただよわせる雰囲気は、いかにも自然であった。

いまにして、美尾姫は、青年が、こちらの素姓を糺した時に正視したまなざしが、異性の美貌というものをいささかも意識していない、澄んだ色を湛えていたのに、気がついた。

美尾姫は、はじめて、

――勝って欲しい！

と、祈った。

「ええいっ！」

宙をつん裂いて、第二の攻撃者の豪剣が、青年の頭上へ落ちた。

美尾姫は、反射的に、目蓋をとじた。それからまた、ぱっと、瞠いた。

青年は、依然として、健在だった。

第二の攻撃者は、がくっと膝を折り、むなしく空けられた前面へ、その刀身をさしのべたなり、この世のなごりを惜しむがごとく、朝空を仰いでいた。

## 四

地軸を鳴らして、一隊の騎馬が、丘の麓を大きく廻って、此方へ疾駆して来るのが望まれたのは、このおりであった。

青年に向って、刃を揃えていた残り四名は、はっと動揺をみせた。

一人が、とび退いて、その旗差物をみとめて、
「本多忠勝の隊だっ！　引けっ！」
と、絶叫するや、身を翻した。
あとの三名も、弾かれたように、横へ跳んで、いっさんに、おのおのの馬へ奔った。
青年は、追わずに、衂れた刀を下げた。
ふいに、美尾姫が、狂気のように、
「逃してはなりませぬ！　一人のこらず斬り伏せてたもれっ！」
と、鋭く叫んだ。
しかし、青年は、ただ、無言で、敵たちが蛙のように馬へとびついたのを見送ったのち、美尾姫へ寄って、そのいましめを切っておいて、軽く一礼して、歩き出そうとした。
「待ちや！」
美尾姫は、あわてて、走り寄った。
「行くことはなりませぬ！　いま、わたくしの護衛の者どもが参ります」
その口早な命令に、青年は、一種の怪訝の面持を返した。
――これが、救い手に対する感謝の言葉か！
その冴えた眸子に、ちらと掠めた微かなさげすみの色に、美尾姫は、つと一方の肩をそびやかした。
「そなたの力添えに対して、酬いなければなりませぬ。このまま行かせたら、わたくしの恥にな



ります」
「報酬をのぞんで、おすくいしたのではありません。こちらは、このまま、行かせて頂いた方が、気楽なのです。このことは、この場で、お忘れになることです。わたしも忘れます」
云いすてて、青年は、すたすたと足をはやめた。
美尾姫は、全身に焦躁をあふらせて、呼びとめたが、青年は、ふりかえりもしなかった。
そこへ――。
「おおっ！　あそこに、姫が――」
「ご無事だ！」
まっしぐらに、馬をとばして来た一隊が、みるみる近づいて来て、歓声をあげた。
すると、美尾姫は、去り行く青年の後姿を指さして、
「あの者を、行かせてはなりませぬ！」
と、きりさくように、声をしぼった。
「おおっ！　彼奴かっ！」
「落人めっ！」
五騎ばかりが、馬首をめぐらして、猛然と追った。
青年は、行手をさえぎられると、苦笑して、旗すすきの中に立ちどまった。
五騎が、馬からとび降りて、一斉に抜刀するや、後方から、美尾姫の声が、烈しく叱った。
「狼藉者は、その者ではありませぬ！　あの山かげへ逃げ込んだのじゃ！　はよう、追跡いた

せ！」

こたえて、横列をとった一隊が、その方角へ、脚速を誇って、たちまち小さくなって行くや、さらに、もう一隊が、ここへ到着した。

その先頭をきった武者は、甲冑から釬、臑当、陣太刀にいたるまで、燃えるような緋ずくめの、けんらんたるあで姿であった。兜の下の面貌も、若々しく、精悍の気にあふれていた。

本多忠勝の寵を一身にあつめる近習頭・遠藤嘉八郎という若者であった。

ひらっと、地上へ降り立つと、美尾姫を、鋭く睨みつけて、

「姫！　無断で、陣屋を離れられるから、こうした危難に遭われるのですぞ！」

と、きめつけた。

美尾姫は、ふんと鼻さきで、嗤った。

彼女は、すでに知っていた。自分の身が、いずれ、徳川家康の妾にされるであろうことを――。

兄の金吾中納言秀秋は、東軍に寝がえって、大捷にみちびいたものの、それだけでは、家康の歓心を得ることは危いと考えて、妹の美尾姫を、家康の右腕たる本多忠勝のところへ送りとどけたのである。すなわち、諸将がのぞんでいる天下の美姫を、家康に与えることによって、わが身の安泰をはかろうとしているのであった。

戦乱の世のならいであった。

美尾姫が、いかに気性烈しい女性とはいえ、戦国武将の家に生れた宿運に、さからう気魄は持たぬ。わが身を与えるべき人が、天下の権をその一手につかんだ家康であってみれば、もとより、



これを拒む理由はなかった。左様、すくなくとも、つい、たった先刻までは――。

むしろ、美尾姫は、本多忠勝の陣屋に入るや、いよいよ将軍の寵姫を約束されたという美貌の誇りをいやましにくわえて、気まま勝手な振舞いの度をはずしたのであった。

そのために、つい、島津の残党に襲撃されるはめにいたったわけだが……。

本多の家臣ごときにきめつけられて、忸怩たる美尾姫ではなかった。

いや――実は、美尾姫は、先刻までの美尾姫ではなかった。

彼女の心の中では、すぐ向うに佇んでいる若い牢人者の存在が、思いもかけず、大きなものとなって占められていた。

この心驕れる姫は、人一倍烈しい情熱のはけ口をもとめて、男装したり、戦陣に列したりしていたのだが、ありようは、全身全霊をもってぶっつかって行く男性をもとめていたのではなかろうか。

それが、そこの若い牢人者であるようだ、と断定するのは、まだ早合点にすぎるであろうか。

遠藤嘉八郎の方は、こっちの忠告など歯牙にもかけぬ美姫の傲慢な態度に、小憎らしさとともに一種の圧迫感をおぼえつつ、そのまなざしのそがれている対手を何気なく見やった。

とたんに――、

「おっ！」

と、おどろきの声を発した。

「御堂ではないか！……御堂主馬之介！」

そう呼ばれて、青年は、一揖をかえした。

「どうしたのだ、おい、主馬之介？……なぜ、おぬし、身を匿した？　どうして、戦功をすてて、陣屋から去った？」

たたみかけて、訊ねられても御堂主馬之介は、こたえようとしなかった。

主馬之介は、本多忠勝の侍大将として、兵百二十名を率いていた。

その働きは、まことに目ざましいものがあった。

関ケ原決戦に先だつ株瀬川のたたかいにおいて、石田三成は、東軍中村一氏の兵をあざむいて、わざと退却とみせて、ひきつけておき、突如、反撃に出て、これをさんざんに打ち破ったが、この時、援軍にくわわった主馬之介の小隊は、まっしぐらに、三成勢の中央へ突入して、烈風のごとく、縦横むじんにかけめぐり、中村一氏が兵をおさめて退くことを可能ならしめたのであった。

主馬之介は、つねに、漆黒の甲冑、母衣をまとっていたので、この英姿は、敵にとっては、まことに不吉なものに眺められた。

関ケ原決戦においては、宇喜多秀家の大軍が構えた天満山へむかって、一団の黒雲となって殺到して行き、鬼神さながらの血闘をくりひろげたのであった。主馬之介の小隊に追い落された敗兵は、百余名も、麓の池寺池に溺れた、という。

昨夜、家康は、天満山の西南藤川の高地において、敵将の首実検を行い、武勲ある諸将士を引見したが、その際、本多忠勝は、諸将の戦功を称揚したのち、わが麾下の御堂主馬之介の働きこそ、このたびの決戦中随一ではなかろうかと存じられます、と告げたのであった。



家康は、すぐに、主馬之介を呼べ、と命じた。

ところが——。

その時、主馬之介は、甲冑も槍も馬も、ことごとく部下へくれて、飄然として陣屋から消えさっていたのである。

なぜであるか？——その理由を知る者は、一人もいなかった。

「おいっ、主馬之介！　いったい、おぬしは、どうしたと申すのだ？　戦功をすてた理由を云え！　理由を——」

嘉八郎は、嚙みつくように、返辞をせまった。

本多の麾下に、緋のいでたちの遠藤嘉八郎と黒のいでたちの御堂主馬之介があることは、すでに、東軍中の名物のひとつにかぞえられていたのである。

嘉八郎としては、よき競争者をうしなうことになるのが、くやしくてならなかった。

## 五

主馬之介は、じっと、嘉八郎を見かえしていたが、ふっと、眸子を、遠く、美濃の連山へ投げた。

「……わたしは、武士が、いやになったのだ。理由は、それだけだ」

ひくく、しかし、はっきりと、そう云いきった。

「なに？　主馬っ！　おぬし、それを、本気で云うのかっ！」

嘉八郎の満面が、朱となった。

主馬之介は、口もとに、微かな笑みを刻むと、

「わたしのことは、今日かぎりに、忘れてくれぬか。たのむ」

と、云った。

「主馬っ！　かくすなっ！　何かある！　何か、ふかい仔細があるに相違ないのだ！」

しかし、主馬之介は、淋しげに、かぶりをふった。

「ほかに理由はない。武士が、いやになっただけのことだ。……忘れてくれ」

そう云いのこして、歩き出した。

「主馬っ！」

嘉八郎が、凄じい気合をこめて、一喝した。

「それが本心ならば……斬るぞっ！」

ふりかえった主馬之介の顔には、依然として、静かな憂愁の翳があった。

「逃げてみせる。……まだ、死にたくはない」

「たわけっ！」

嘉八郎は、たたきつけるように吐き出した。だが、もう止めようとしなかった。主馬之介が、ひとたび決意したことは、断じてひるがえさぬ性格の持主であることを、知りすぎる程知っている嘉八郎であった。

「おねがいじゃ！　止めてたもれ」



美尾姫が、われを忘れて、嘉八郎に歎願した。

嘉八郎は、じろっと見やって、

「姫の、その美しさで、止められぬものを、誰人が、止めるてだてがござろうや！」

と、云いすてた。

疎林をぬけ出て、萩の群れた小径へ出た時、

「小父さあん！」

と、呼んで、宗太郎が、駆け寄って来た。

「小父さんは、落人じゃないじゃないか！」

横へならぶと、まず、なじるように、そう云った。

「きいていたのか」

「きいていたさ」

「落人と同じようなものだ」

「ちがうよっ！」

宗太郎は、奮然として、かぶりをふった。

「小父さんは、勝った方の徳川方のさむらいじゃないか！　あんな立派なさむらいや、お姫さまが、一生けんめい、止めているのに、さっさと逃げてしまうなんて、もったいねえや」

ひとっぱし分別くさげな口をきき乍ら、持った木枝で、萩をたたいて行く。

十歩あまり、無言ですすんでから、主馬之介は、つと、右手をのばして、宗太郎のあたまへ置いた。
「宗太郎――」
「うん。なんだい？」
「おまえは、ひとりぼっちだから、急に、わーっ、と泣き出したくなることがあるだろう？」
「う、うん……。あるよ。そういう時は、思いきって、うゎーん、と泣いてしまってやらア」
「大人にも、泣きたくなることがあるのだ。しかし、わたしは、大人だからな。歯をくいしばって、泪をこぼすまいと、怺えているのだ」
「ふーん」
宗太郎は、まじまじと、主馬之介の横顔を見あげた。
主馬之介の双眸は、潤みを湛えて、遠くを見ていた。自分の行手に横たわっている、暗澹たる宿命を思って、それに堪えようと決意した孤独の表情であった。



# 愛憎の山河

## 一

「おやっ？」
勾配のかなりある杣道をのぼって、笹藪のかたわらに出た時、宗太郎の大きな澄んだ黒瞳が、くるっとまわった。
「おいらの小屋に、だれか、いやがるぞ！」
つぶれかかった茅葺きの屋根が、松の樹間にのぞいていたが、そこから、鋭いけものの啼き声が、つたわって来たのである。
猿が、このあたりの山中に棲むのは、べつに珍しくはない。
なんとなく、宗太郎のうしろを歩いて来た主馬之介は、だからべつに気にもかけずにいたのだが、そう叫ばれて、ふと、おのれの神経をひき緊めた。
成程、その啼き声は、危機せまった烈しい調子をはらんでいた。この少年の唯一の家来が、何者かに襲撃されたに相違ない。
「ちきしょうっ！」

ぴょんとはねあがって、いっさんに駆け出そうとする宗太郎を、

「待て――」

と、とどめておいて、主馬之介は、しずかな足どりで、小屋へ近づいて行った。しかし、閉された戸口に立った時、その気配を消していた。

そっと、節穴へ目をあててみると、板敷に仁王立ちになって、刀を抜きはなっているのは、一瞥しただけで、敗軍の落人と知れた。手負いらしく、肩の喘ぎが荒い。

猿は、梁にいた。

落武者は、それを睨みあげているのであった。

無断の侵入を、猿に咎められて、かっとなったものであろう。

抜き打った初太刀を失敗して、苛立ちつつ、どうやって追い落してくれようかと、思案の態であった。猿の方は、四肢をふんばって、白い歯をひきむき、キキキッ、キキキッ……と、みじんも怯じ気をみせぬ。これは、きかぬ気の小主人をみならって、大した度胸といわねばならない。

突如、主馬之介が、戸を蹴倒して、土間にふみ込んだ。

「ううっ……おっ！」

落武者は、野獣の吼えるにも似た唸り声を発して、猛然と、主馬之介にむかって来た。

結果は、まことにあっけなかった。

主馬之介の五体が、ほとんど動いたともみえぬのに、落武者の手から、太刀は、たたき落されて、土間にころがっていた。



「ころせっ！　斬れっ！」

どっかとあぐらをかいた落武者は、主馬之介へ、あらん限りの憎悪をみなぎらせた視線を投じた。

それを受けとめる主馬之介の眸子は、水のように無色だった。

ただ、心の中では、自分と同年配の、いかにも気性の率直そうな、いずれは名ある家柄の出とおぼしい対手を、いっそ友として語らいたい思いを湧かせていた。

「宗太郎」

主馬之介は、ふりかえって、少年を呼んだ。

入って来た宗太郎の肩には、いつの間にか、勇敢な家来がとまっていた。

「なんだい、小父さん？」

「お前は、傷薬を持っていないか？」

「あるよ」

「この仁の手当をしてあげるがよい」

「どうしてだい？　こんな落人なんか……おいら、ごめんだ」

「窮鳥が、ふところへとび込んで来たら、猟師と雖も、これをたすける――ということわざがあるぞ。……人をたすけたあとの気持は、いいものだ。手当をしてあげるがよい」

「ふうーん」

不服げに鼻をならしつつも、宗太郎は、薬をとりに、板敷へあがろうとした。

すると、落武者が、憤然として、
「敵の忍者ずれに、慈悲は受けぬ！」
と、叫んだ。
「わたしは、ただの牢人者だ。敵でも味方でもない」
「では、それがしを生捕って、徳川方へつき出す存念であろう」
「人を見て疑うことだ」
おだやかな口調で云いすてると、主馬之介は、炉端へ、腰を下した。

## 二

「うわっ、すげえ刀傷だ！」
宗太郎の叫びにも、主馬之介は、ふりかえろうとせず、沈んだまなざしを、火のない炉へ落していた。
落武者は、背中、右腕、左の太股などの深傷を、宗太郎の手当にまかせ乍ら、不審の色をもった視線を、主馬之介の横顔にあてていたが、
「おぬしは、まことに、ただの牢人か？」
と、問うた。
「ちがうよ。徳川方のおさむらいだったんだ。大手柄をたてたくせに、さむらいが、いやになって、みんながとめるのもきかずに、牢人になってしまったんだよ」



宗太郎が、かわって、こたえた。
「おぬし、このわっぱが申すことは、まことか？」
落武者は、さらに、しげしげと、主馬之介を見まもって、訊いた。
主馬之介は、頭をまわしたが、それにこたえず、自分の方から、
「主君は、討死されたのか？」
と、尋ねた。
「いかにも——。卑劣な味方の裏切りに遭うて、一門ことごとく斃れた！」
うめくような悲痛な声音だった。
瞬間——主馬之介のおもてが、さっと蒼ざめた。
「金吾中納言のことか、それは？」
「ちがう！　金吾中納言は、もしも、われら美濃路潜行隊が、一挙して、不破の街道へおどり出ていたならば、決して、戈をさかさまに向けかえては来なかったはずだ」
それをきくと、主馬之介の顔色は、さらに一層血の気をうしなったようであった。
それに気づかずに、落武者は、宙をにらんで、激しい言辞を継いだ。
「……石田三成殿の作戦に、断じてあやまりはなかったのだ。決戦場を関ケ原にえらび、わざと大垣より退却したのは、充二分の成算があったからなのだ。……両軍が、激突するやいなや、われら、美濃路潜行隊は、突風のごとく、徳川勢の背後を衝く手はずであったのだ。……しかるに、くそっ！　伊能盛政め！」

裏切り武将の名が、落武者の口から発しられた刹那、主馬之介のからだが、ぶるるっと、痙攣した。

それからあとにつづけられた落武者の独語は、もう、主馬之介の耳に入ってはいなかった。

――やはり、そうだった！　まちがいはなかった！

もしや、万一、あやまりつたえられたのではなかろうか、という一縷ののぞみも、はかなく、主馬之介の心から、断ちきられたのであった。

たしかに――徳川方では、その前々日まで、石田三成のこの奇襲作戦を知らなかったのである。

石田三成は、智謀の武将として、卓抜であった。

関ケ原において、いかにも、正々堂々たる大野戦を展開してみせるがごとく、徳川方に信じこませることに、まことに巧妙なかけひきをみせたのである。家康自身、これを疑わず、力と力の決戦を期していたのである。

ところが――。

大阪方一万五千の精鋭が、美濃の間道を潜行して来る気配がある、という情報が入って、本陣は、全く色をうしなったのであった。

この潜行隊をむかえ討つために、兵力を二つに割ることは、もはや不可能であった。石田三成は、そこをねらっているからであった。

とすれば、どうやって、潜行隊を、その間道で、くいとめるか？――策は、無きにひとしかった。



天祐――徳川方としては、それをたのみ、そして、それが、奇蹟のごとく実現したのである。

というのは――。

この情報がとどいた夜、突然、間道上に位置する揖斐郡日坂の城主伊能盛政から遣された密使が到着して、

「勝利のあかつき、美濃一国を与える、と約束して下さるならば、潜行中の石田勢一万五千を、潰滅せしめる手段をお教えする」

と、告げたのであった。

本陣は、夢か、と疑った。

伊能盛政は、豊臣秀吉のなみなみならぬ恩顧を蒙った豪族であり、また、石田三成とも、長年の親交があったのである。

かりに、石田三成が、あらゆる武将から背中をむけられても、最後まで味方につくべき信義を保つべき人物であり、また保つものと信じられていた。

その伊能盛政が、裏切ろう、と申出たのである。

本陣は、歓喜した。

そして――この落武者の語るがごとく、潜行の大阪方一万五千の精鋭は、伊能盛政の裏切りによって、潰滅し、石田三成の秘謀は、水泡のように、はかなく消えはてたのである。

御堂主馬之介は、伊能盛政の子だったのである。

# 三

伊能盛政の子ならば、当然、大阪方につくべきであったろうに、主馬之介は、何故に、徳川方に加ったのであろう。

それには、ふかい仔細があった。

一語にしてつくせば、主馬之介は、父を憎悪していた。主馬之介にとって、この世の中で最も憎むべきものは、父だったのである。

主馬之介が、物心ついた時、おそろしいと感じたのは、父に対してであった。

どうしたわけか、主馬之介とその母は、城内に、住むことをゆるされず、外曲輪の一端にある館でくらしていた。それは、敵国の人質などをとじこめておくためにつくられた、いわゆる質子構えのようであった。

ある日、幼い主馬之介は、下僕たちの私語を耳にして、母に問うた。

「母さま。わたしたちは、人質なのですか？」

すると、母は、びっくりして、

「なにを云います。……そなたは、立派に、伊能盛政の嫡子なのです」

と、たしなめた。

「では、どうして、この館に住んでいるのですか？　城内に入れて頂けないのですか？」

その時、母は、こたえては、くれなかった。



急に、母の美しい面に刷かれた深い憂愁の翳を、敏感に見てとって、主馬之介は、口をつぐんだのであった。

胸のうちで、

――父上は、母さまもじぶんも、おきらいなのだ。

と、呟いたことだった。そうと判断するよりほかはなかった。

城内には、べつに、正室が住んでいるのでもなければ、主馬之介の兄弟がいたわけでもなかったからである。

父は、時おり――十日に一度ぐらいの割合で、ぶらりと、館に泊りに来ることがあった。主馬之介は、別室にしりぞけられた。挨拶に出ても、父は、じろりと冷たい一瞥をくれるだけで、言葉などかけてくれなかった。

それだけなら、主馬之介は、堪えることが出来た。

二度に一度は、必ず、奥の間から、父の凄じい呶号が噴きあがり、物を投げつける音や、打ち据える音などが、きこえて来た。時には、怯えかねた母の悲鳴さえも――。

そのたびに、主馬之介は、褥の中で、歯をくいしばり、両のこぶしをにぎりしめた。

ある時は、ついにたまらなくなって、母をたすけようと、がばっとはね起きざま、廊下へとび出した。

追って来て、抱きとめたのは、老いたる郎党の佐次兵衛であった。この老爺だけが、母子に、誠心をもって仕えていた。

「若様っ！　が、がまんなされませい！　若様がお行きなされば、お殿様は、ますますたけりたたれるばかりじゃ。……つ、つらかろうが、がまんなされませい！　母様も、ああして、じっと、怺えておいでなのじゃ！」
むりやりに居間にひきもどされた主馬之介は、佐次兵衛を、父ででもあるかのようににらんで、
「なぜだ？　なぜ、父上は、母上を、あのように虐められるのだ？　云えっ、佐次！」
と、せまった。
わずか、八歳の少年ながら、その決死の態度は、老爺を、たじたじとさせたようであった。
佐次兵衛は、畳へ両手をつかえて、頭を下げると、
「若様が、大人におなり遊ばしたら、やがて、おわかりでござる！」
と、悲痛な声をしぼった。
畳にしたたる泪を見乍らも、主馬之介は、
「いま、ききたいのじゃ！」
と、叫んでいた。
だが――ついに、老爺は、こたえてはくれなかった。
無慚な破局は、主馬之介が十五歳の春に来た。
その日、責め馬をして、山野を思うさま駆けめぐった主馬之介は、宵闇の中を館へもどり着いた。
と――。



玄関から、あわただしく出て来る父に出会った。
父は、一瞬、ぎょっとしたように、主馬之介を見た。異常にこわばった形相であった。
主馬之介は、不吉な予感がして、すぐに、廊下をまっすぐに、母の居間に行った。
主馬之介は、見た。
佐次兵衛にかかえられている、朱にそまった母の姿を――。
おのれっ！
憎悪を爆発させた主馬之介が、身をひるがえして父を追おうとした瞬間、
「信也！」
すでに息絶えたかとみえた母が、意外にも、きびしい口調で、主馬之介の足を、その場に釘づけたのであった。
信也というのが、主馬之介の、父から与えられた名であった。
ふりかえったわが子へ、母は、名状しがたい哀しい眸子を与えて、
「なりませぬ！」
と、かすかに、かぶりをふった。
主馬之介は、その母に、憤りすらおぼえて、鞴のように、胸を波うたせた。
「信也、父上に刃を向けてはなりませぬ。……よろしいですね。母の遺言ですよ」
母は、はっきりと、そう云った。
主馬之介は、おのが居間に入って、長いあいだ嗚咽した。

母は、七日後に、逝った。
生き難かったこの世を去るやすらぎと、あまりにも幸せの薄かった寂しさが、その死顔にただよっていた。
主馬之介は、枕もとで、一昼夜坐りつづけ、そのつかれで、ついうとうととまどろんだ——そのあいだに、母は、この世を去っていたのであった。まるで、わが子のうたた寝を待っていて、そっと、魂をぬけ出させて行ったかのように……。
わが子へのこす限りない愛情は、いつの間にかその手をそっとわが胸の上へひき寄せて、両のてのひらで包み、息をひきとっても、そうしたままでいたのである。

## 四

父は、二度と、館へはあらわれなかった。葬儀にも、姿を見せなかった。
父と子は、たまに、遠くから、その姿をみとめて、目を光らすにとどまった。
母が逝って、一年目の祥月命日に、主馬之介は、馬をとばして、川沿いに東へ下り、織田勘解由左衛門信益の領土であった本巣郡祖父江へ行った。
そこの春日明神社の神官が、母の兄であった。
主馬之介は、生れてはじめて、母の実家をおとずれたのである。
いかなる理由によるものか、主馬之介は、母から、その実家を訪うことを、かたく禁じられていた。これは、父の厳命によるものに相違ない、と考えていたのだが、必ずしも、そうでないことが、その家の玄関に立った時、わかった。



母とどことなく容貌の似かよった神官が出て来たので、主馬之介は、親しみをこめて、一礼して、わが名を告げた。
すると、それに対して、むくいられたのは、これ以上冷やかにはなれまいと思える態度と語気であった。
「伊能盛政の伜だと、申すのだな？」
主馬之介は、
——この人も、父を憎んでいるのだ！
と、直感すると、
「わたしは、貴方様の妹の子です」
と、云った。
「伊能盛政の伜であることに相違はあるまい」
神官は、氷のような直視を刺すと、
「わしに、妹はない。十七年前まではあった。いまはない。したがって、妹の子などは、知らぬ！」
そう云いすてて、踵をまわすと、奥へ入ろうとした。
「お待ち下さいっ！」
主馬之介は、絶叫した。

「母は、父に斬られました！　いかなる理由によって、母は、父より斬られねばならなかったか――お教え下さいっ！　おねがいです！」

血を噴かんばかりの必死の声であった。

にも拘らず、まわされた眼眸の冷たさは易らず、

「知らぬ」

その酷薄な一言が、主馬之介の顔へ投げつけられただけだった。

主馬之介は、それきり、日坂の城へは戻らなかった。

いや、いったんは城の見えるところまでは、戻って来ていたのだが、そこで、馬を停めて、憎むべき者の住むその構えを睨んでいる時、

「信也さま――」

と、声をかけられたのであった。

春の野花を摘んで、両手にかかえた少女が、街道からすこし下った水涸れの磧に佇んでいた。郷士として、この近隣に門閥を誇っている須藤家の一人娘の千草であった。伊能家とは、遠縁にあたって居り、村民たちは、信也様と千草様が、いずれは御夫婦になられて、日坂城をお継ぎになるであろう、とときめていた。

千草は、その時、二つ年下の十四歳であった。

信也であった主馬之介にとって、千草は、母亡きいまは、唯一の女性であった。

千草は、美しい細おもての、どことなく影うすい少女だった。祖母が、禁裏の女官をした美し



い人で、その血をひいて、﨟たけた、という形容を添えるに足りる容子だった。

馬上から、じっと見おろしていた主馬之介は、遽に、烈しく鼓動の迅鳴りをおぼえると、ぱっと地上へとび降りて、一気に磧へ、身をおどらせた。

千草が怯えた表情をつくるのもかまわず、いきなり、その小さな肩をつかんだ。力をこめれば、砕けそうな柔らかい肩であった。

「千草！」

「は、はい――」

千草は、狂気のようにぎらぎらと煌く主馬之介の眼光を受けとめかねて、俯向いてしまった。

「わたしと一緒に、行ってくれぬか？」

「え？……ど、どこへ？」

「わたしにもわからぬ。……あの城には、もう、住みたくないんだ！」

「……………」

「わたしは、出て行くんだ！　自由な世界へ出て行くんだ！　こんな、ちっぽけな狭間の山賤などで、一生をおわりたくはない！」

さすがに、たったいま、父を斬ろうか、と凄じい衝動にかられていたことは口にしかねて、主馬之介は、そういう云いかたをした。

「千草！　わたしと一緒に行かぬか？」

主馬之介は、千草の肩が顫えはじめたので、ぎゅっと力をくわえた。

「千草！　いやか？」
十六歳の少年には、自分の荒々しい気色が、少女をすっかり戦慄させていることに気づかなかった。
しばしの沈黙を置いて、千草は、やっとききとれる程の小声で、
「父様の、おゆるしがなければ……」
と、こたえた。
「ばかな！　そなたの父者が、どうして、ゆるしてくれるものか！　だまって、出て行くのだ。わたしについて来るのだ。わたしは、決して、そなたを不幸せにはせぬ！」
だが——ここでもまた、主馬之介は、自分をけがらわしいものと看做す拒絶を受けねばならなかった。
「……か、かんにん！」
そう叫んで、つかまれた肩をもだえさせる千草が、そのおもてに恐怖の色だけしか滲ませていないのに、やっと気がついた主馬之介は、
「ばかっ！」
と、どなりつけて、力まかせに、磧へ突き倒したのであった。
馬のところへもどった主馬之介は、磧をころげるようにして逃げて行く千草の後姿を見送って、暗然とならずにはいられなかった。
その日から、伊能信也という日坂城の後継ぎは、この世から消えたのである。かわって、御堂



主馬之介という孤独な牢人が生れたのであった。

あれから、八年の月日が流れすぎた。
御堂主馬之介は、腰の一剣に生命を賭す兵法者となっていた。もともと秀れた剣の天稟をそなえていた上に、死地に入ることを聊かもいとわぬ不敵な修業が、主馬之介をして、稀有の使い手にしあげていた。
京の二条城において、徳川家康が、諸国に埋れている兵法者をあつめて、御前試合を挙行した際、飄然としてあらわれた主馬之介は、たちまちにして、向う敵をことごとく打ち据えて勝ちのこり、家康の所望によって柳生但馬守宗矩と木太刀を交えるや、互角引分けの冴えをみせたのであった。
家康は、思いもうけぬ掘出しものに欣喜して、宗矩を呼んで、
「旗本にくわえて、師範にしてはどうじゃ？」
と、相談した。
しかし、宗矩は、しずかにかぶりをふって、
「あの若者は、いまだ二十代も半ばにもならぬのに、その相に、宿世の罪業を背負ったともおぼしい、暗い、凶の色をあらわして居ります。三界六道の苦難をきりひらくには、このさき幾年も費さねばならぬ身の上と思われ、このような悩みを抱く者に、師範の資格はございませぬ。また、当人も、おそらくは、お受け仕りますまい」

と、忠告したのであった。

家康は、しかし、その冴えた腕前と、いやしからぬ人品を持った牢人を去らせるに惜しく、本多忠勝を呼んで、侍大将に任じせしめたのであった。

主馬之介が、徳川方につかえたのは、いわば、父に対して間接に復讐する意図があったからにほかならない。

しかるに――。

その父は、このたび天下分け目の決戦にあたって、殊遇を受けていた石田三成を裏切って、残忍きわまる打撃を大阪方に与えたのである。

この急報を、陣屋できいた刹那、主馬之介は、愕然として耳を疑い、その衝撃が去った時、云おう様のない暗澹たる絶望に陥入ったのであった。

自分は父を裏切り、父はまた石田三成を裏切ったのである。行動において、父と子は、同じく、武士道の吟味をあやまったのである。

戦国の世のならい――として、すませるには、あまりにも、宿業の血は、どす黝く、主馬之介の魂を、汚した。

――父が加った徳川方に、おれはもう、とどまることは出来ぬ！

懊悩の果ての結論が、それであった。

主馬之介は、勲功と栄達をすてて、陣屋を去ったのである。



## 五

宗太郎は、ふっと、目をさました。

夜明けの霧が、小屋の中にまで流れ込んでいて、もぐっている藁が、しっとりとしめっている。

宗太郎が、ごそごそと動くと、かたわらの猿も、もぞもぞと動いた。

「あ――どうしたんだろ？」

炉端に横になっていた筈の主馬之介の姿が見えないので、宗太郎は、目をこすって、起きあがった。

落武者の方は、薪束の蔭で、死んだように、寝息もたてない。

――どこかへ行っちまったのだろうか？

急に不安になった宗太郎は、藁床から抜け出ると、板戸をひきあけた。

今朝も、濃霧が、まったく視界をとざしている。

「小父さあん！」

宗太郎は、両手を口にあてて、声いっぱいに呼んだ。

――小父さあん！

こだまが、むなしくかえって来たきりで、静寂は深かった。

「主馬之介の小父さあん！」

もう一度、あらんかぎりに、咽喉をしぼって、呼んでみた。

すると、足もとで、猿もまた、それを真似るがごとく、キキッキキッ、と啼いた。
「ちきしょうっ！　ほんとに、どっかへ、行っちまったのかあ！」
宗太郎は、あやうく、泪がこぼれそうになった。
この小屋へ来がけに、主馬之介と交した会話が思い出された。
「おまえは、ひとりぼっちだから、急に、わーっ、と泣き出したくなることがあるだろう？」
「う、うん……。あるよ。そういう時は、思いきって、うゎーん、と泣いてしまってやらア」
「大人にも、泣きたくなることがあるのだ。しかし、わたしは、大人だからな。歯をくいしばって、泪をこぼすまいと、怺えているのだ」
そう云った主馬之介の横顔は、宗太郎の目にも、なにか、とても淋しいものに映ったものだったが……。
——小父さんも、ひとりぼっちだったんだ！
宗太郎は、いまにして、はっきりと、そのことがわかった。
「小父さあん！　小父さんのばか！　おいらも、一緒につれて行っておくれよう一っ！」
それから、今日の時間にして、ものの二十分も、宗太郎は、そこに彳んでいた。
うごいてやまぬ霧が、ゆるゆると山襞を移って、灌木を、松の幹や梢を、そして、旗すすきの草原を、淡々とした朝ぐもりの空の下に、浮きあげて行った。
とたんに——。
「うあっ！　いたっ！」



と、宗太郎が、歓喜の叫びをあげるやいなや、坂道を、いっさんに駆け下った。
主馬之介の孤影は、麓の松の疎林の中に在ったのである。
宗太郎が、疎林のはしに達したおり、東天が割れて、一条の陽光の箭が、乳色の宙に斜線を截った。
瞬間、主馬之介の手もとから、煌っと、眩しく、刃が光った。
宗太郎は、びくっと、足をとめて、息をのんだ。
敵は、一間をへだてて立つ一本の松であった。
主馬之介は、剣を抜きはなって、中段に位取ったなり、粛然として、微動もせぬのである。
おのが心の修羅妄執を断つために、主馬之介がとる唯一の手段が、これであった。
神気を、くもりなく澄みわたらせるべく、彫像のごとく不動自若の構えをとった静止相は、少年の心をもひしひしとしめつけて、宗太郎は、にぎりこぶしに、ぎゅっと力をこめた。
剣の気魄は、汐合の満ちるのを待って、突如、奔騰する。
「ええいっ！」
静寂の宙をつらぬく懸声もろとも、主馬之介の五体が、大地を蹴って、躍った。
次の瞬間、仮敵の一樹のむこうに、主馬之介は、ぴたっと、佇立していた。のみならず、その刀身は、すでに、鞘におさめられていた。
宗太郎は、大きく見はった双眸を、ぱちくりさせた。
——なんだろ？　どうしたんだろ？

宗太郎には、わからなかった。
主馬之介は、躍りざま、白刃を一閃して、風のごとく、その地点へ奔ったのである。
が——依然として、その松は、まっすぐに立っているではないか。
あっけにとられつつ、宗太郎が、水洟を手の甲でこすって、一歩ふみ出すや——。
風もないのに、直径五寸もあろう松の幹が、ぐうっと、傾いて、地上三尺あまりの箇処で、ぽくっと、白い口をひらいた。
そのまま……もの凄い音響とともに、松は、地べたへ横倒しになった。
ぽかん、と口をあけて、見まもった宗太郎は、ひょこひょこと、近よって、なまなましい切り口を、ひとなでしてみてから、
「ふうーん！」
と、小鼻をふくらませた。
「宗太郎——」
呼ばれて、顔をあげた宗太郎は、心からの感動で、主馬之介の姿を神々しいものに眺める眩しげなまばたきをし乍ら、
「小父さん！　すげえんだなあ！　強いんだなあ！　日本一じゃないか！　おいら、夢をみているみたいだ！」
と、声をはずませた。
主馬之介は、侘しげにうすら笑って、



「剣で、人間の苦しみや悲しみなど、切ることはできぬ」
と、呟いてから、懐中から、金袋をとり出すと、宗太郎へ、ぽんと投げ与えた。
「宗太郎、すまぬが、あの落人が元気になるまで世話をしてくれ」
と、たのんだ。
「うん——」
「わたしは、ここで、別れる」
「えっ！」
宗太郎は、たちまち、べそをかいた。
「小父さん、行くんなら、おいらも、つれて行っておくれよ」
「おまえには、落人の世話をたのんだではないか」
「だって、よう——おいら、小父さんについて行きてえや。おいらを、剣術のお弟子にしておくれよ。おねがいだよ」
主馬之介は、宗太郎の表情を見て、これは並の言葉でなだめ賺しても、容易なことではきき入れまい、と思った。
「弟子にしてやってもよい」
「ほ、ほんとかいっ！」
「但し、わたしのたのみをやってくれなければならぬ。落人を発たせておいて、あとから来い」
「うん！　お師匠様の命令だからな。……おいら、どこへ、たずねて行くんだい？」

「北へまっすぐ――揖斐郡日坂という、山の中だ」
と教えて、ちょっと考えていた主馬之介は、
「その村に、歓喜寺というお寺がある。そこをたずねて来い」
「小父さんは、きっといるね」
主馬之介は、こたえるかわりに、もう歩き出していた。
歓喜寺の住職は、主馬之介に、武士としてはずかしからぬ一通りの学問を身につけさせてくれた恩師であった。
主馬之介は、この哀れな天涯の孤児を、恩師にあずけようと思いついたのである。
「小父さあん！　きっと行くよ。待っておくれよーっ！」
宗太郎の声が、追って来た。
主馬之介は、ふりかえらなかった。
行先には、死が待っているのだ。
父を斬って、おのれも自らの生命を断とう――その覚悟をきめて、故郷へ帰ろうとする主馬之介だったのである。



# 父子孤影

## 一

午後の陽が、薄絹をかぶせたように、高い峰の片側にあたっていた。その明るい光が、鮮やかであるだけに、渓谷に沿うた尾根径の暗さが、ひどく冷たいものに感じられる。
揖斐川を、津汲という村から左へ入った山峡で、細くうねって下る支流の瀬音が、ひびくほかは、不気味なほど、静かであった。
いま――。
尾根径をつたって、奥へさかのぼって行くふたつの人影のほかは、動くものとては、ひとつもない。
ひとりは、五十年配であろうか、みごとな八字髭をたくわえた、目も鼻も造作の大きい武士であった。気の毒なのは、極端にひどい跛で、一歩毎に、左半身が大きく傾斜していた。老爺のように両手をうしろで組んで、やや中腰になって、均衡を保っている恰好が、いかにも危かしく思われるが、実は、普通の人間よりも、よほど足馴れている証拠は、その歩幅の大きさと迅さであった。

当人は、並の速度で歩いているのであったろうが、一間うしろにしたがう従者は、かるく呼吸をはずませているのだった。

これは、生来の跛を逆に利用して、兵法の極意のひとつたる「小鷹の歩術」を、完全にわがものにしているからであった。

小鷹の歩術というのは、どちらか片脚にのみ力を入れて、一方の脚を、宙に遊ばせ乍ら、滑るように進む秘法である。一定の距離で、この力の比重を入れかえて行くのである。

跛を逆に利用して、小鷹の歩術を、完全にわがものにしているとは、この人物が、なみなみならぬ意志力の持主であることをしめしている。

そのくせ、その立派な風貌がたたえている表情は、いかにも愛嬌のある明るいもので、ぴんと張った髭さえも、その愛嬌を加えるためにたくわえられた印象である。

「茂助――、ひどいところだの」

従者へ云いかけた声音(こわね)も、大きく、明るかった。

「は、もう程なくでございます」

「貴様は、今朝から、程なく、程なくと申して居るぞ」

「いえ、こんどこそ、程なくでございます」

この主従は、京二条城から揖斐城下まで馬をとばして来て、そこから、まる二日間、山の中を歩きつづけて来たのであった。

「場所もひどいが、役目もひどい」



武士は、そう云って、大きなくしゃみをした。

「ほれ、二条城の旗本どもが、わしの役目をあざけって居るわい。竹中内蔵之介正次(たけなかくらのすけまさつぐ)、生れてはじめて、卑劣千万な使者を命じられたぞ。南無！」

徳川家康麾下(きか)にあって、三河譜代の旗本中、大久保彦左衛門とともに、その奇骨ぶりで名をひびかせている人物であった。

「殿は、いったい、なんの御用で、日坂へお出むきなされまする？」

茂助は、ずうっと不審に思っていたことを、はじめて問うた。

正式の使者ならば、供ぞろいがあるべきである。密使ならば、変装するのが常識である。

「日坂城の伊能盛政の首を刎(は)ねるためじゃ」

内蔵之介は、あっさりとこたえた。

茂助は、おどろいて、

「伊能盛政殿は、石田三成を裏切って、美濃路をひそかに下って来た大阪方の大軍を四散せしめた、とききおよびまするが――」

「左様さ」

「それならば、功績を賞せられてよいお方ではございませぬか？」

「裏切りはいかん、裏切りは！」

突然、内蔵之介は、いちだんと大きな声で、云った。

「したが、伊能殿が裏切ったからこそ、お味方は、関ケ原で大勝利を――」

「莫迦を申せ。石田三成の小ざかしい奇襲策略ごときに、わが徳川の陣形が、崩れたなどとは毛頭考えられぬわい。……伊能盛政の裏切りは、金吾中納言が、大阪方を反撃したのとは、わけがちがう。盛政は、三成とは、刎頸の交の仲ではないか。たとえ三成が、全土の大名を敵にまわしても、盛政一人は、これを扶けるべき立場にあったのだ。それを、なんぞ！　たかが、美濃一国欲しさに、竹馬の友を裏切るとは――唾棄すべき人非人！　むくいの程、思い知らねばなるまいて」

内蔵之介は、自分の任務を、自身に納得せしめるために、殊更に、いまいましげに、伊能盛政を罵倒した。

いわば、自分の任務が、正々堂々たる武士道にのっとったものではないので、そのうしろめたさに、内蔵之介は、伊能盛政の裏切り行為を、憎むが上に憎もうとしているのであった。

徳川方は、盛政に、裏切りによって、美濃一国を与えると約束していた。しかし、家康は、はじめから、そのつもりはなかったのである。裏切らせておいて、勝利のあかつきには、盛政自身をも、ほろぼしてしまう――その肚であった。

このずるい家康の計略を遂行すべく、内蔵之介は、使者にたったのである。

## 二

「ほう――みごとな柿だの」

ふと、内蔵之介は、立ちどまって、頭上を仰いだ。



陽あしが移って、山襞を縫って落ちた光を、いっぱいにあびて、枝にたわわにみのった無数の顆粒は、目がさめるばかりあかあかと色づいて、美しかった。

「食えそうではないか、茂助」

「はあ――」

「ひとつ、もいで参れ」

「はあ――」

「なにを、ぐずぐずいたして居る」

茂助は、しかたなしに、肩の荷を地べたへおろすと、しぶしぶ幹をよじのぼって行った。柿盗人は、見つからねば、盗人ではない、と古来云いならされて居る。

ところが、あいにくなことに、手のとどきそうなところに、一粒もないのであった。茂助は、怪しげな腰つきで、そろりそろりと、一寸きざみに、太枝をつたって行ったが、ついに、もうこれ以上は、進めぬと、なさけなさそうに、地上の主人を見おろした。

「とどかぬか？」

「とどきませぬ」

「なさけない奴め――」

舌うちしたおりであった。

不意に、流れをへだてた向いの斜面から、たからかな笑い声が起った。

内蔵之介が、振向くと、男のような黒っぽい縞のきものを、裾みじかにつけた娘が、松茸でも

入れたらしい竹籠をかかえて、立っていた。
「こりゃっ、なにが可笑しいか！　柿もぎも、こうなれば、生命がけじゃぞ！」
内蔵之介は、どなった。
すると、娘は、いちだんと、はなやかな笑い声を、明るい宙にひびかせた。それから、なにを思ったか、軽やかに身をおどらせて、くさむらを跳んで、流れを嚙む岩を、ぴょんぴょんと渡るや、あっという間に、内蔵之介の脇に、立った。
――まるで山猫じゃて。
内蔵之介は、そう思った。
それにしても、大層綺麗な山猫であった。目が、大きく、切長で、いきいきとしてよく動く黒瞳は、もの怯じしない野性のけもののそれのように、清らかな澄んだかがやきをもっていた。小麦色の肌ものびのびと発達した四肢も、健康そのものの潑剌とした若さにあふれて、見る物の気持を、すがすがしくさせるのであった。
「わたしが、とってやるよ」
娘は、そう云って、にこっと、皓い歯をみせた。
「やってくれるか。かたじけない」
内蔵之介も、にこにこして、頷くと、頭上を仰いで、
「こら、茂助、降りろ」
と、命じた。



太枝にしがみついていた茂助が、地上へ足をつけるまでには、見ている方が苛々する程時間を食ったが、それと対蹠的に、するするとのぼって行く娘の素迅さは、唖然とするくらいであった。ぽかんと口をあけて、見あげていた茂助は、内蔵之介から、いやという程、耳朶をひっぱられた。娘の裾がみだれて、紅絹裏のかげから、滑石のような太腿が、のぞいたからである。
「そーら、よ――」
娘は、よくも折れないものだとあやぶまれる箇処まで身を移して、もいだ実を、投げはじめた。
内蔵之介は、童心にかえった愉しさで、掛声かけ乍ら、受けとめた。
やがて、降りて来た娘は、きものをはらってから、
「お武家様は、城へおいでか？」
と、訊ねた。
「う……いや――」
内蔵之介は、あいまいに返答をにごして、小銭をとり出すと、
「駄賃じゃ。受けとれい」
娘は、かぶりをふると、いそいで、竹籠をかかえあげた。
「わたしは、お城につかえる者じゃもの、駄賃などもろうたら、叱られる」
そう云って、ぺこんとお辞宜をするや、さっさと離れて行った。
「小気味のいい山猫だわい」
内蔵之介は、みるみる遠ざかる後姿を笑顔で見送ってから、がぶりと柿にかじりついた。

「うまいぞ、茂助、貴様も食え――」
主従は、せっせと、盗み柿をかたづけ乍ら、再び、尾根径をひろって行った。
それから、小半刻すぎて――。
主従は、ついに、彼方の山上に、碧空を截りぬいて、すっきりとそびえる一城を見出した。
「ふむ――」
凝然として、目を据えて、栄位勢利の移りかわる儚い人世に、つかの間の感慨をおぼえていた内蔵之介は、ふっとわれにかえると、急に、朗々たる音吐で、謡い乍ら、足をはこびはじめた。
「……住み馴れし国を雲路のあとに見て、国を雲路のあとに見て、山また山を越えゆけば、そことしもなき旅ごろも、野暮れ山暮れ里暮れて、名にのみききし邯鄲の、里にもはやく着きにけり、里にも早く着きにけり……」
と――。
この謡いにこたえるように、右方に欝然とこもる杉の木立の中から、ざざっと、灌木を割って、馳せ下って来る音が起った。
たちまち――内蔵之介の面前にあらわれたのは、数名の武士であった。
年かさの者が先頭に出て、鄭重に一礼した。
「竹中内蔵之介殿にございましょうや?」
「左様――」
「それがし、日坂城家臣筆頭宇部隠岐でござる」



と、名のり、他の者たちも、それぞれ、それにならった。
実は、徳川家康は、勝利の夜、この宇部隠岐が伊能盛政代理として、関ケ原の天満山の本陣へ、赴いて来た際、本多忠勝に命じて、その冷酷な計略を暗示しておいたのである。
すなわち、
「伊能盛政は、いずれ、隠居せざるを得まい。嫡子がないときくが、それならば、早急にあとを嗣ぐ者を定めておくがよかろう」
と、つたえ、また、家臣一同は、そのまま安んじて、新城主に仕えるように取りはからう旨も知らしめておいたのである。
宇部隠岐は、いったんは、愕然としたが、衝撃が去ってみれば、やむを得ざる仕儀として、あきらめるよりほかはなかった。主君伊能盛政の自業自得というべきであった。家臣のうちにも、このたびの裏切り行為を、天下にさらした破廉恥として、主君の独断専行を悪んでいる者がすくなからずいたのである。
で――、日坂城へかえった宇部隠岐は、ひそかに、同志をあつめて、主君を隠居せしめる手筈をととのえていたのである。
内蔵之介は、隠岐が、新城主の候補者をきめたのをたしかめ、クーデターの指揮をとるために、やって来たわけであった。
今日の自分の到着は、謡曲「邯鄲」を合図とすると、数日前に、忍者を潜行せしめて、教えてあった。

内蔵之介は、威儀を正して、
「後継者の姓名と氏素姓を問う」
と、云った。
「美濃源氏土岐氏の苗裔、郷士須藤頼十郎の嫡男頼之助に、相定めて居ります。当年二十六歳に相成ります」
「一城の頭梁たる資質を備えて居ろうか？」
「すくなくとも、当主盛政の器量に劣るとは思われませぬ」
——あたりまえだ。盛政より下等な奴をたてられてたまるか。
と、内蔵之介は、思った。
「よし——」
内蔵之介は、懐中から、一通の書状をとり出した。
「これが、内府公（家康）よりの達書じゃ。主人に見せい」
「かしこまりました。……ただ、しかし——」
隠岐は、不安をこめた気色で、内蔵之介を瞶めた。
「もし、盛政が、隠居をがえんじない節は、いかが相成りまする？」
内蔵之介は、しばらく、こたえずに、城を仰ぎ見ていたが、やがて、ぼそりと、
「斬るよりほかはあるまいの」
隠岐はじめ、家臣たちの顔が、さっと変った。



「お主らに、それをなせとは、云わぬ。その役目をはたすために、拙者が参った。……まず、お主らで、隠居をすすめるがいい」
隠岐たちは、去った。
内蔵之介主従が、ひとまず旅装を解く宿舎は、城から半里ばかりはなれた歓喜寺の方丈ときめてあった。
「行こうか、茂助」
促して一歩ふみ出した瞬間、内蔵之介は、眼光鋭く、木立の中の一箇所を睨んだ。
「何者だ？」
誰何したが、ひそりして、反応をしめさぬ。
内蔵之介が、跛は贋でもあるかのごとき敏捷な身ごなしで、くさむらを一間あまり奔るや、そこから、ぱっと立ったのは、意外にも、先刻の娘であった。
「なんだ、山猫か——」
内蔵之介は、訝しげに、
「なぜ、ひそんで、ぬすみ聴いたぞ？」
と、とがめた。
娘は、まなじりが切れんばかりに瞠いた双眸を、またたきもさせずに、内蔵之介に、あてていた。
その眸子の光が、はげしい敵意をあふらせたものであるのをみとめた内蔵之介は、

——捕えようか！
と、考えた。
すると、その危険を察知したごとく、娘は、ぱっと身をひるがえすや、死にもの狂いで駆け出した。
「殿、あやつを遁しては！」
と、茂助が、気色ばんで、叫んだ。
しかし、内蔵之介は、なぜか、追う気が失せた。
——よいわさ、あの小娘が、さきまわって注進して、狼狽した盛政がどうあがいてみたところで、結果はきまって居る。
肚裡で、そう呟きすてていた。

三

ひどく痩せた老人であった。窪んだまなこも、尖った鼻も、ひきむすんだ口も、筋ばった咽喉も、いかった肩も——どの部分も、剃刀の刃のように鋭く険しいものをひそめている。
ここ——日坂城天守の上ノ重の武者走りに彳んで、窓から、じっと、はるか彼方にかすむ美濃の連峰を望み見つつ、この老人が、胸裡に湧かせているのは、大きなよろこびなのであった。ただ、それが、表情として浮きあがっていないところに、この老人の、暗い孤独性があった。
——このわしが、とうとう、美濃の国主となった！　曾つて、斎藤道三が、油売りから成上っ



て、智嚢をしぼり、奸計を積みに積んで土岐氏を仆し、ついにうばいとったこの美濃を、いま、揖斐の小城のあるじたる伊能盛政が、たった一夜で、掌中におさめたのだ！
——もはや、天下は、徳川家康のものだ。その家康に恩を売ったわしの地位は、微動もせぬ筈だ。美濃の国主たるわしは、徳川幕府の要職に就く資格を得たのだ。死に花を咲かせる、というやつだ。ひとつ、盛大に、咲かせてやるか。
なんともいえぬ恍惚感が、痩せさらばえた老軀の中で、潮騒のように、さわいでいるのであった。
階段を、あわただしくかけのぼって来る跫音がきこえたので、伊能盛政は、不快げに、眉宇をひそめた。
せっかくひたっていた陶酔をじゃまされることは、この老人にとって、この上もなく、いまいましかった。
盛政は、背後に、上って来た者へ、振り向きもせず、
「なんだ、騒々しい！」
と、きりつけるように叱咤した。
ちょっと、こたえがなかった。
ぎろっと、眼光をまわした盛政は、そこに、うす穢い装をした小娘が、息をはずませて、蹲っているのを見出して、かっとなった。
「おのれっ！　奴婢ずれが、天守にのぼって来るとは、何事かっ！　無礼者！」

蹴落してくれようと、ずかずかと迫るや、娘は、必死の面持で、
「お、お殿様っ！　一大事でございます！」
と、叫んだ。
「なにが、一大事だ！　一大事ならば、宇部隠岐のところへでも申出い！　たわけがっ！」
「い、いえ……その隠岐様が、お殿様を――」
そこまで云いかけて、娘は、自分の報告がどんな凄じい波瀾を渦巻かせることになるかを思って、大きく喘いだ。
「隠岐がどうした？」
盛政は、噛みつくように怒鳴った。
「隠岐様は、お殿様を、裏切ろうとなされて居ります！」
「なにっ?!」
盛政の面貌が、奇怪な能面のように、陰惨な変りかたをした。
「こりゃっ！　そ、それは、まことかっ！」
いきなり、盛政は、娘の襟をひっ摑んで、ぐいっとしぼりあげた。
娘は、苦しそうに、息をきざみ乍ら、
「どこからか、旅のおさむらいが、おいでなされて……隠岐様と、ご相談なされて、居りました。……わたしは、それを、ぬ、ぬすみぎきました。……おさむらいに、見、見つけられたので、夢中で、に、にげました」



「そやつは、どんな奴だ？」
「立派な口ひげをはやした……跛のおさむらいで、ございます」
「跛？」
かっと、眦を裂いて、宙を睨んでいた盛政は、「む、むっ！」と、呻いた。
――竹中内蔵之介ではないか？
そう思った刹那、竦然として、盛政は、目も口も肩も拳も、はげしく痙攣させた。
「そやつは、五十年配で――、桁はずれな大声を持って居ったろう？」
「そ、そうでございます」
――まちがいない！
盛政は、はらわたの底まで凍るような絶望におそわれた。
――家康め！　狸爺め！　はかり居ったな！
盛政は、自分で自分が発狂するのではないかと、ふっとおそれたくらい、かあっと、毛髪も爪も、からだのすべてが、憤怒の焔となって燃えあがるのを感じた。
――どうしてくれよう、隠岐め！
小姓が、階段をのぼって来たのは、この時であった。
「御本丸評定の間にて、宇部隠岐様以下御家中が、殿をお待ち申上げて居りまする」
平伏して、そう告げた。
――うぬっ！　わしに、詰腹切らせようとか！

盛政は、咄嗟に、おそろしい決意をかためると、足音あらあらしく、階段をふんだ。
「お殿様っ！」
娘が、ふるえ声で、呼んだ。
ふりかえった盛政は、
「お前を、侍女にとりたててやる。なんという名だ？」
「朝路と申します」
「よし、おぼえておく」
天守を出た盛政は、憑かれたような形相で、大股に急いだ。いっさい、何ものも目に映らなかった。
この老人の六十余年の生涯で、はじめて、信じられない現実が、眼前に起ったのである。小城のあるじは、小城に君臨しているかぎり、世界は、おのれのために動いていると確信し、ただの一度も疑ったことはなかった。人も建物も草木も、すべてのものが、おのれの意のままであったのである。ところが、あろうことか、美濃の国主になったよろこびに、われを忘れている矢先に、突如として、足下の大地が轟然と音たてて崩れるような報せが、名も知らぬ下婢によってもたらされたのである。そして、それを裏書きするように、評定の間には、謀叛者どもが詰めているという──。
──一刀のもとに、忘恩のやつばらの謀計を粉砕してくれる！
たけりたちつつも、盛政の胸裡のどこかには、すでに、暗澹たる絶望が、癌腫のように生じていたことは否定出来なかった。いや、それだからこそ、盛政の心理状態は、狂暴性をいやましにしていたといえる。
盛政は、評定の間に、悪鬼に似た姿をあらわした。
一瞬にして、座は、しずまりかえった。
盛政は、ずかずかと、宇部隠岐の面前へ、寄った。
「隠岐っ！」
「はっ──」
片手を畳について、頭を下げた隠岐は、
──殿は、すでに知っている！
と、戦慄した。
「その方が、このたびの徳川本陣への使者の儀、御苦労であった。褒美をくれる！」
云いはなちざま、盛政は、佩刀をひねって、抜き討ちに、一閃した。
隠岐の首は、血飛沫とともに、三尺高くとんで、にぶい音たてて、畳にころがった。
ぶるっと、血顫いした盛政は、家臣一同を、はったと睨みすえて、
「見たかっ！　謀叛者のむくいを──」
と、喚いた。
そして、さっと踵をまわして、出て行こうとした。
すると──。

「殿っ！」

鋭い一声が、盛政の足を、停めさせた。

首をまわした盛政にむかって、首なき隠岐の懐中から、一通の書状をつかみ出して、たかだかとかかげてみせたのは、田屋兵部少輔という大兵の荒武者であった。

「これは、徳川家康公の御諚でござるぞ！」

盛政にとって、そんなものは、もう紙屑にひとしかった。

こやつも！

第二の贄におどりかかるべく、生血のにおいに酔った悽愴の気色で、一歩出た。

そのとたん――。

盛政は、自分へ集中されている七十余名の家臣のまなこが、いずれも、はげしい敵意をこめているのに、気がついた。

おのれの命令ならば、いかなることも、平伏受諾するものときめていた家臣どもが、いまは、一人のこらず、おのれを憎んでいる――。

盛政は、茫然自失した。つぎに、名状しがたい恐怖にかられた。

――飼犬どもに、おれは、殺されるのだ！

そう思った。

## 四



同じ日――。

主馬之介は、揖斐の城下のにぎやかな街道筋を、ひとり、ゆっくりと歩いていた。

実父を討つ！　これは尋常一様の覚悟をもってなせることではないので、主馬之介は、この近くにある禅寺に入って、五日間、座禅を組んで来たのである。

ようやくにして、心気は、冴えて、もはや、その場にのぞんでも、躊躇せずにすみそうであった。

左右にならんだ店棚には、おびただしく品物が積まれて、興亡の決戦の直後の、大層な活気をみせていた。戦場からかすめとられて来たらしい武具も、安値で、呼び売られている。ひともうけたくらんで、京洛から出むいて来た商人たちが、それらをあさっている。

天下のあらたまったあわただしい様相は、ひっきりなしに早駆けて行く騎馬武者の姿で、容易にうかがわれる。それは、京にある徳川家康のもとにつかわされた各国大名の使者たちなのであった。

いまからは、徳川家康の一顰一笑に、各国大名は、神経をくばらなければならぬこととなったのである。

こうした利害得失を露骨にむき出した動きをよそに、主馬之介だけは、澄んだ眸子を遠くに置いて、しずかに、足をはこんで行くのであった。

「おや――？」

すれちがった一人の男が、小さく叫んで、立ちどまった。

小首をかしげて、主馬之介の後姿を眺めたが、
「やっぱり、そうだ」
大急きで、追って来て、
「もし――失礼でございますが、貴方様は、もしや、日坂城の若様ではございませぬか？」
と、問いかけた。
主馬之介は、まわしたまなざしに、見おぼえのある顔を映した。
「多次郎か――」
自分と母との唯一人の忠実な郎党佐次兵衛の甥にあたる男だった。
実直そうな商人の身なりをしていた。
「やっぱり、若様でございましたか。おなつかしゅうございます。立派にご生育なさいました。
お母上様に、お目にかけとうございまする」
「ごらんの通り、見すぼらしい牢人者だ。お世辞はやめてくれ。……そなたこそ、裕福そうな商人になって、結構だ。この城下に住むのか？」
「いえ、ただいまは、大阪で、古着屋をいとなんで居ります。このたびの合戦に、あさましく、なにか、ひとあきないさせて頂こうと存じまして、出かけて参りました次第で――」
多次郎は、そう云い乍らも、なにか気にかかることがあるらしく、ちらちらと左右へ目をくばった。その様子が、律義な商人と思われぬ鋭い気配をひそめているのを、兵法に秀でた主馬之介は、ふと感じた。



しかし、この男が、いかなる仕事をしているのか、自分とはなんのかかわりもないことなので、主馬之介は、気がつかぬふりをして、
「日坂へはもどったか？」
と、訊ねた。
「はい。昨年でございましたか、墓参りに――」
「佐次兵衛は、もう生きて居らぬであろうな？」
「若様が、日坂を出てお行きになりましてから、すぐに、亡くなりましてございます」
「そうか――」
主馬之介の胸の底が、かすかに痛んだ。
「おお、若様。このご城下に、千草様がおいでになりますぞ」
思い出して、多次郎が、云った。
「…………」
主馬之介は、無言で、多次郎を見かえした。
「四日前に、ばったり、道で、お会いいたしました。それは、もう、お美しゅうなられて居りますぞ。なんでも、こちらの伯母御様のところへ、作法見習いにおいでなされて居りますそうで……それ、あのむこうの辻を、左へ折れて、三町も参りますと、大きな檜にかこまれたお屋敷がございます。むかしの、揖斐様の御別邸とかで、すぐにわかりますでございます。たずねて行っておあげなさいまし。さぞ、およろこびなさいます」

この揖斐の城主は、揖斐五郎光親といったが、天文十五年に、斎藤道三に攻めほろぼされていた。千草の父須藤頼十郎は、美濃守護土岐氏の外裔で、また揖斐光親の姉を母に持っていた。千草は、祖母方の揖斐氏一族の家に来ているのであろう。

「気が向けば――」

ひくく云いのこして、主馬之介は、一揖して、歩き出そうとした。

「若様――」

急に、何を考えたか、多次郎が、ひきしまった表情で呼んだ。

「さしでがましいようでございますが……、もう、若様は、日坂のお城へは、おかえりなさいませぬほうが、よろしゅうございます」

「どうしてだ?」

主馬之介は、じっと、多次郎へ、目をあてた。

多次郎は、まぶしげに、パチパチとまばたきして、

「いえ、どうって、べつに、とりたてて理由はございませんが、若様は、若様の道をおあるきなさいますほうが、よろしいのではなかろうかと――」

――この男は、なにか、知っているのだな?

しかし、主馬之介は、それを糺す気持はなく、

「かえりたくはなくとも、かえらねばならぬ時が来れば、やむを得まい」

しずかに、その言葉を、わかれの辞とした。



多次郎は、遠ざかる主馬之介の後姿を見送って、かぶりをふった。

「不幸な運命を背負うておいでになる。あのおかたこそ、美濃の国の御領主にもなれるものを――」

そう呟いてから、急に、別人のごとく、鋭く目を光らせると、素迅い動作で、何処へともなく、身をくらませて行った。

主馬之介は、いつの間にか、亭々たる檜の老樹にかこまれた宏壮な屋敷の門前に佇んでいた。来ようと意志を働かせて、やって来たのではなかった。

足をとめた時、この屋敷の門前だった。

――ここか?

と、眺めた瞬間、自分が、無意識に、千草に会おうとしていたのだ、と気がついたのである。十六歳の日、十四歳の千草を、おのが出奔の道づれにしようとした――あの日の光景が、まざまざと、脳裡に、よみがえった。

「それは、もう、お美しゅうなられて居りますぞ」

さっきの多次郎の言葉も、あわせて、思いかえされた。

主馬之介は、築地に沿うて、ゆっくりと、まわって行った。

と――。

ふかい木立を縫って、かすかに、琴の音が、つたわって来た。

——千草が、かなでているのではなかろうか？

その清雅で艶麗なすがたを描いた主馬之介は、われにもあらず、からだのうちを、血が波立つのをおぼえた。

——会いたい！

——ひと目だけでよい！

強い衝動が、起った。

だが、それは、できないことであった。会ってみたところで、どうなろう。すぐに、別れなければ、ならないではないか。こちらは、幾日かのちには、父を斬って、自らも果てる身なのだ。

せめても、そのひとのかなでる琴の調べをきいただけで、自らをなぐさめねばなるまい。

主馬之介は、いつまでも、そこに、彫像と化したごとく、立ちつくしていた。



# めぐり逢う日

## 一

「お——はて？」

宏壮な腕木門を入りかけた年配の士が、何気なく、築地沿いのむこうを見やって、急に、目を光らせた。

屋敷に向い立って、動かぬ牢人者の姿に、どこかで、見おぼえがあった。

——誰人であったか？

小首をかしげていると、むこうでも、こちらに気がついて、歩き出していた。

士は、腕を組んで、玄関へむかって、足をはこびかけた——とたん、

「あっ！」

と、思わず、驚愕の声を発して、そこへ棒立ちになった。

次の瞬間、士は、いっさんに玄関へとび込んで、だだだ……と、廊下をふみ鳴らしつつ、奥の間へ奔った。

「頼之助殿っ！　頼之助殿は居らんか！」

その叫びにこたえて、裏手で、「おう――」と、声があった。
須藤頼之助は、十六羅漢を形どった石庭で、片脱ぎになって、長槍をしごいていた。上背のある、逞しい筋骨をもった若武者であった。
妹千草を伴って、この揖斐家へ身を寄せて半歳あまりになるが、ただの一日も、兵法の修業を欠かしたことはない。
「なんです、叔父上？」
頼之助は、槍を立てると、血相を変えて竹縁に出て来た来宮藤左衛門を、訝しげに見やった。
藤左衛門は、頼之助の父の従弟にあたっていて、長らく須藤家に食客となっている人物であった。
「頼之助殿！……信也が――伊能信也が、生きて、も、もどって来おったぞ！」
「え？」
頼之助も、さっと表情をひき緊めた。
「人ちがいではないでしょうな？」
そそっかしい見まちがいなどしていたら、宥し難い、といった鋭い気色をみせた。
「信也に相違ない。尾羽打ちからした牢人態であったが、まさしく――」
「うむ！」
頼之助は、呻いた。
日坂城より、一昨日、密使が到着して、当主盛政を隠居せしめて、新城主として迎えたい旨、



慫慂があり、頼之助は勿論狂喜して承諾した――その矢先である。
――信也め、今頃になって、のこのこ、あらわれ居って！
頼之助は、かっと、全身が、燃えあがらんばかりに熱くなった。
盛政の嫡子たる信也が帰還すれば、当然、頼之助としては、後継者たることを辞退しなければならない。盛政にしても、たとえ無断出奔した伜とはいえ、城を他人にゆずるよりは、実子に与えたいのは、人情であろうし、また、家臣一同も、再評定をひらくに相違ない。
武将として、一軍を叱咤駆使してみたい野心に燃えている若武者にとって、労なくして、一城のあるじになれることは、この上の歓喜はない。それが、もう九分九厘まで実現したと信じていたところへ、突如として、正統の世継ぎが出現したのである。はらわたがにえくりかえるとは、このことであった。
「く、くそっ！」
頼之助は、もう一度、呻いた。
その凄じい形相を瞶めていた藤左衛門が、
「頼之助殿！　わしに、まかせい！」
と、語気強く云った。
頼之助は、藤左衛門の肚の裡を、すぐさま、読みとった。
「千載の一遇を逸してはならん！　自ら城をすて去った不孝者に、今更、嗣子面はさせられぬわ。わしに、まかせておけ！」

藤左衛門は、身を翻して、おもてへ走り出て行った。

「お兄さま――」

呼ばれて、頼之助は、振りかえった。

透けるような色の白さも、切長な眸子も、細く通った鼻梁も、小さな朱い唇も、ほっそりと流れた肩も、春葱にも以た指も――すべてのつくりが、嫋やかすぎて、摑めばひと砕けしそうな、影の薄い佳人といえた。千草であった。

離れで琴をひいていた千草は、藤左衛門の大声で、忘れ得ぬ人が、すぐそこにいるときき、あっとなって、馳せ出て来たのであった。

頼之助は、おろおろと不安の色をあふらせた妹の顔を見かえして、何か云おうとしたが、思いかえすや、おそろしい勢いで、藤左衛門のあとを追って行ってしまった。

## 二

主馬之介は、おのれの影法師へ目をおとして、方角も忘れはてたごとく、足のむくままに、広い街道をひろっていた。

数騎の武者が、駆けぬけて行き、影法師も消えるばかりに土煙りを舞いたたせたが、それを避けようともせず、想いを、いま去って来た屋敷の中の女性へとどめていた。

剣の修業に心身を尽している時も、鯨波の渦巻く戦場裡にあっても、その俤は、主馬之介から、はなれずにいたのである。修業の苦しさに堪えがたくなった時、あるいは闘って手傷を負うて喘



いだ時、孤独感のふかまさりゆくなかで、彼が、救いの神の御像のように、宙に思い描いたのは、その清浄可憐な俤であった。

それは、決して、月日とともに薄れるということはなかった。いや、かえって、胸のうちに、鮮やかに、美しく、はぐくまれていた。どうして、この慕情だけが、ひとすじの清冽な泉のように、今日まで、自分の心に涸れることなく湧き流れつづけて来たのか――主馬之介は、自分でもわからなかった。

というのも――。

幼い頃から、主馬之介は、千草と、心から親しんだ記憶があまりなかった。千草は、両親のいいつけをよく守る、というより、その気質が、とても臆病で、例えば、隠れん坊をする際でも、見つからないように苦心するよりも、着物をよごすことの方を怕がった。主馬之介が、わざと、着物をよごしてやるぞとおどかすと、すぐに泣き声をあげて、わが家へかけ去ったものであった。部屋で、ままごとをしている折など、二人は、大きくなったら本当に夫婦になるのだ、という気持が、ぴったりとむすびつくように思われた。尤も、そうした場合、主馬之介が、嬉しさのあまり、ひどく粗暴な振舞いでもみせたりすると、たちまち、千草は、おびえて、非難のまなざしを向けて来た。主馬之介は、悄気かえって、肩をすくめて、部屋を出て行かなければならなかった。

そのうちに、主馬之介は、武将の子息たる者が、女の子とむつみあうことは避けねばならぬ、という周囲の無言のいましめにしたがって、千草からは遠ざかって、兵法と学問に精を出したのであった。勿論、会えば、快活に話しかけることを、すこしもはばからなかったが、千草の方で、

厳しい躾を身につけて来て、ますます、しとやかな作法をまもるようになり、主馬之介との間に距離を置くこととなった。主馬之介も、自然に、城主の嫡子たる威儀をもって、接しないわけにいかなかった。

主馬之介は、せめて、千草とだけは、心と心のあいだに、溝を置かず、幕をへだてずに、親しみあいたいと願望しつづけて来た。冷酷な父に対する憎悪が増すにつれて、その願望は、渇した者が水をもとめるように、はげしくなっていた。しかし、それは、ついに、一度も、叶えられずにおわった。

母が逝ってからは、猶更に、主馬之介は、千草のやさしいなぐさめの言葉に餓えた。だが、同時に、主馬之介は、孤独に堪える意志にめざめて、自ら、千草にもとめようとはしなかった。また、千草と殆ど、会うこともなく、その一年は、過ぎたのであった。

主馬之介は、城をすてる時、千草をも忘れすてる決意をしたのであったが……。

いくたの困苦と、云いがたい寂寥とたたかいぬいて来た八年の間、千草の俤だけは、何処までも、主馬之介につきまとって来たのである。

――琴の音をきくのではなかった！

主馬之介は、力なく、胸中で、そう呟いた。

この時――。

主馬之介の行手を、黒い布で顔を包んだ武士が三名、すっと遮った。

顔をあげて、じっと、冴えた視線を投げた主馬之介は、背後にも、同じ姿の同じ頭数が、退路



を断ったのをさとっていた。

一斉に、抜刀して、じりじりと迫って来るにまかせて、主馬之介は、静かな表情を崩さずに、

「意趣か？」

「……………」

「こちらにおぼえのないことだが、戦場での討ちつ討たれつを怨みとおぼえて襲うて来たのなら、逃げはせぬ！」

凛乎として、云いはなった。

対手がたは、無言であった。

殺気は、ひしひしと、主馬之介をおしつつんだ。

「わたしを、御堂主馬之介と知って、討とうとするのだな？」

「……………」

「よし！　問うて返答できぬ輩ならば、無縁仏となる覚悟ができて居ろう。……みごと、この御堂主馬之介を討ってみろ！」

にわかに、主馬之介の五体に、鋭気がみなぎった。

いままで、じっと抑えつづけて来た孤独の寂寥感が、突如として、狂暴な闘志にすりかわった、といえようか。

目に見えぬ網がしぼられるように、徐々に、ちぢめられて来る白刃の円陣の中点で、主馬之介は、まだ、剣へ、手をかけてはいなかった。

全神経を、敵の殺気に備えて、氷のように鋭いものにしているだけであった。
自ら、抜き打って出ることは、この青年のとらぬところであった。常に、敵から襲わせておいて、反撃するのが、その性格に合っていた、といえる。
「やああっ！」
満身からつんざく懸声もろとも、正面の覆面士が、きえーっ、と刃風を唸らせて、初太刀をふりおろした。
瞬間――。
主馬之介の痩身が、かくれ鳥が羽撃くに似て、ひらっと翻転した。
攻撃者は、だだっと、主馬之介の脇を泳ぐや、苦痛の形相を空に向けて、味方の足もとへ、のめっていた。
主馬之介の衂れた一刀は、いままで背面にあった敵を正面に据えつけて、微動もしなかった。
おそるべき迅業であった。
そうしてつッ立つ主馬之介の全身は、くまなく、敵の目に曝されているのであったが、つづけて、第二の攻撃があびせられなかったのは、幽鬼の妖気ともいうべき剣気が、全員の足を地に釘づけてしまったからである。
技のちがいは、いかんともなし難かった。
すらりとした背中へむかって、白刃を擬している者も、一歩進めば、たちまち、目にもとまらぬ一閃が、舞って来る恐怖で、ただ、固唾をのんでいるばかりであった。



「どうした？　来ぬか？」
冷やかに、云いはなって、主馬之介は、切先を、つと、下段におとした。
それを誘いと知りつつ、味方の腑甲斐なさ、おのれの焦躁に堪えきれずに、一人が、
「とおーっ！」
と、雄叫びざま、横あいから、地を蹴った。
その怒濤の猛撃を、躱しもせずに、主馬之介は、すりあげに、一颯、白光を宙に放った。
薙ぎはらわれた胴から、びゅーっと、血飛沫が、陽光に、虹を描いた。

## 三

「彼奴っ！　つ、つよい！」
その言葉を、胸奥からしぼり出した者が、修羅場から十間あまりへだてた老杉の蔭に、いた。
頼之助であった。
主馬之介が、一人を斬り仆す毎に、頼之助の総身を、瀑布のような戦慄が、音たてて、なだれおちていた。
夢想だにしなかった、主馬之介の手練ぶりであった。
――彼奴！　何処で、あれ程の腕前になり居ったか?!
少年の頃、頼之助は、主馬之介と、いくども、木刀をとって、試合をしたものであったが、すでに正式に師について剣術を学んでいた頼之助は、主馬之介を、惨酷なくらい、さんざんに打ち

据えたことだった。
　その記憶が、いまだ、根強く軽侮の念を、頼之助の心底にのこしていたのである。
　頼之助の生涯にとって、これ程の驚愕は、またとなかった、といって誇張にはなるまい。
　武技の修練を、一日も欠かさずにつづけて来た頼之助であり、また、青年となって以来、いまだ、屈伏すべき強敵には出会っていなかったのである。事実、剣聖伊藤一刀斎の高弟たる師から、印可を受けて、その強さを、自他ともにゆるしていた。
　第三番目の攻撃者が――それは、あきらかに、この襲撃を企図した来宮藤左衛門にまぎれもなかったが――一合ときりむすばずして、あっけなく、主馬之介の刃の下に伏すのを目撃した頼之助は、
「う、うむっ！」
　と、呻くや、いっさんに、その修羅場へ走り出していた。
　狡猾であったのは、走り乍ら、
「信也殿っ！　伊能信也殿ではないか！　須藤頼之助だ！　助勢いたす！」
　と叫んで、抜刀してみせたことであった。
　とたんに――。
　覆面士の群は、さっと、ひきさがったとみるや、往還を東西へ、いっさんに逃げ去って行った。
　頼之助は、いかにもなつかしそうな面持で近づくと、



「貴方を見かけたという者があったので、いそいで、さがしに参った。……つようなられた。お見事な腕前だ！」
　さも三嘆措くあたわざる語気で、云いかけた。
　主馬之介は、刀身を懐紙でぬぐうと、腰に納めた。何事もなかったような静かな表情であった。
「頼之助殿か――」
　主馬之介の方は、心から、なつかしそうに、むかしの喧嘩友達を、眺めた。
「今日まで、どうなされていたのだ？　会いたいものだと、いつも思うていましたぞ」
「ごらんの通り、こちらにおぼえのない曲者たちに襲われるような漂泊無頼の牢人ぐらしだ。面目ないと思う」
　さびしく笑って、主馬之介は、かるく一揖すると、歩き出そうとした。
「ま、またれい！　是非てまえの住処へ、お越し頂きとう存ずる。どうぞ、是非――」
「いや、わたしは……」
　主馬之介は、ためらった。
「主馬之介殿！　千草も、貴方にお会いしたがって居りますぞ！」
　その言葉は、主馬之介の足を停めさせるに充分だった。
　それから、幾分かが過ぎて――。
　揖斐家の書院へ、主馬之介を招じた頼之助は、郎党たちを、そっと呼び寄せて、藤左衛門たちの遺骸を収容するように命じた。

肚裡に、主馬之介に対する熾火のような憎悪をひそめ乍ら、頼之助は、冷静に、復仇の手段をめぐらそうとした。

まず、下婢に、お茶の用意をさせてから、眠り薬を、それに混じた。そして、妹を呼んだ。

「千草！」

鋭く見すえて、

「書院に、信也が参って居る！」

と、告げた。

「えっ！」

千草の白い顔が、さらに白く、血の気をひいた。

千草は、兄が、日坂城の新城主に指名されたことを、きき知っていた。先刻の藤左衛門と兄との会話の内容も、ほぼ察しがついていた。兄が、その人を当屋敷へともなったこんたんも、およそ想像がつく。

「よいか、千草！　いささかの恋慕の情がのこって居るのであれば、たったいま、すててしまえ！」

「……………」

「叔父上は、信也に、斬られたのだぞ！」

「ええっ！」

千草は、息をひいて、恐怖を全身に滲ませた。



「わかったな！　わかったなら、書院へ、このお茶を持って行け！」

「兄様！」

「しいて、なつかしげなそぶりを見せずともよい。平常の躾通りにやれ。……信也は、お前のことを、まだ、忘れては居らぬ。いや、彼奴にとって、お前は、女菩薩のように美しいものになって居るに相違ない。先刻、屋敷の前に立って、お前のひく琴の音に、耳をかたむけていたそうな——」

「……………」

「ただ、しとやかに、作法通りに、このお茶をすすめるがいい。うろたえて、彼奴に、感づかれたならば、お前のいのちも危いと覚悟せい！　わかったか！」

厳しく云いふくめられて、千草は、必死に、迅鳴る胸の騒ぎを抑えた。

千草には、わからなかった。じぶんが、信也を愛しているのか、どうか……。

今日まで、信也の俤を忘れずに、そっと胸に抱いて来たことは、たしかである。しかし、それは、決して、いつかめぐり会える希望にすがった思慕というわけではなかったようである。千草の前に、新たな男性があらわれなかっただけのことで、親から未来の良人として定められていたその人の俤以外、彼女は、心にとめる相手を知らなかったのである。

いま——。

その人が出現したとき乍ら、千草は、異常な事態に、ただもう動転して、懼れおののくだけであった。

これがもし、何事もなく、その人が、飄然として訪れて来たのであったならば、千草の心は、素直なよろこびに燃えたかも知れない。千草は、その嫋(たお)やかなすがたと同じく、性質もまたかぼそく弱かった。

「持って行け」

兄に命じられて、千草は、茶道具を、両手にした。

長い廊下をすすみ乍ら、千草は、いくども立ちどまって、微かに、喘いだ。

——信也さまが、はやく、お逃げなさればいい！

書院から、その姿が消えていることを、ねがった。

だが——。

その人は、書院の中央に、端然として坐っていた。

千草は、ちらとみとめてから、顔を伏せた。その瞬間すらも、千草の胸の中では、なつかしさも慕わしさも、恐怖の念で押しつけられてしまっていた。

主馬之介は、しとやかに一礼して、お茶をささげて寄って来る清楚な姿を、まばたきもせずに、見戍(みまも)った。

想い描いて来た艶麗そのままであった。

——おれは、会ったぞ！　こうして、千草に、会っている！

素朴な感動の叫びが、心の内にあった。

そっと楽茶碗(らくじゃわん)をさし出す両手の、白く細い美しさを眺めて、主馬之介は、声なく呻いた。



——この娘が、おれの妻となる筈だったのだ！

若く逞しい体軀は、抑えがたい情熱の焔に焼かれて、ぶるっと痙攣した。

千草は、うしろへ退って、両手をつかえると、挨拶した。その声音は、あまりにちいさくて、ほとんどききとれなかった。

「……しばらくであった」

主馬之介も、ただ、それだけしか云えなかった。

ふかい沈黙が来た。

主馬之介は、何か云わねばならぬと思い乍らも、言葉が見つからなかった。

千草は、両手を膝で組み、ずうっと俯向いたなりであった。

主馬之介は、千草のおもてに刷かれたはげしい緊張の色を、自分に出会った感動のためだと見てとっていた。もし、対手が千草ではなく、他の女であったならば、勿論、主馬之介は、その様子がただならぬ恐怖によるものと看破したに相違ない。

「あ、あの……お茶を——」

すすめられて、

「あ——」

と、われにかえって、茶碗をとりあげた主馬之介は、なんの疑惑もなく、それを、飲んだ。

# 四

金時が、金時が、
緋おどしよろいに
金ぷくりん
赤母衣羽織に
朱槍をかざし
まっ赤な夕陽を
行ったげな
行ったげな

思いきり大きくはりあげた唄声が、秋の陽に光る旗すすきの野づらを流れて行く。

伊吹山の麓を走る街道を、襤褸をまとった少年は、飾りの小刀に面目を誇示して、大手をふって、元気よく、北へむかって歩いて行くのであった。

傷ついた落武者が、今朝がた、小屋を立去ったので、宗太郎は、すぐさまに、とび出して来たのである。

——日坂へ。

——日本一強い小父さんの待っている日坂のお寺へ。

希望は、小さなからだいっぱいに、はちきれるほどふくらんでいる。



——おいら、あの小父さんに教えてもらって、日本一の達人になってやるんだ！

そう決心している宗太郎にとって、こんなに愉しい旅は、生れてはじめてであった。空も山も野も川も家も、行き交う人も翔ける鳥も、みんな、じぶんの門出を祝ってくれているようである。

やがて、山頂へ通じている道と交叉する辻へ出た時、宗太郎は、そちらへむかって、両手をあわせた。

「伊吹山に棲むお天狗さま！　おねがいです！　おいらを、日本一の剣術の達人にして下さい！」

真剣に、そう祈って、柏手を打った。

伊吹の山頂には、本当に、天狗が住むと信じられていた。

むかし、修業に余念のない聖が、この山の中腹の庵にこもって、念仏をとなえつづけていたところ、空に声があって、汝は仏道に入って以来、精進けなげである故、明日未の時に、観世音のまことの御姿を拝ませよう、とつたえた。聖は、歓喜して、水をあび、香をたき、花をちらして、念仏をとなえつつ、その時を待った。やがて、秋の月の雲間から、一条の金色の御光が降って来て、蓮台上に結跏趺坐する観世音菩薩の御姿が、玲瓏として現われ出た。聖は、臀をさかさまにして、ひれ伏し、いちだんと声高く念仏をとなえた。すると、ふしぎにも、聖のからだは、宙につりさげられて、するすると中天へ昇った。……それきり、聖が行方不明になってから三日あまりすぎて、ある木樵が、山頂の池のほとりをあるいていると、楢の木の高い梢から、救けてくれ、と絶叫する者がある。大急ぎで、よじのぼってみると、一人の法師が、高手小手にしばりあげられて、枝からつりさげられているではないか。苦心して、ひきおろしてやると、法師は、観世音

菩薩にさらわれた聖であった。つまり、天狗にあざむかれて、そのようなひどい目に遭ったわけであった。……魔界の存在が信じられた時代である。宇治拾遺物語にみえているこんな話も、里人の心に、あり得た事実として、すこしも疑われずにとどまっていた。

当時——。

剣を学ぶには、山中奥ふかくわけ入って、天狗に出会うて、教えを乞うて、極意をさとる——これが、最ものぞましいこととされていたのである。

だから、宗太郎は、熱心に、祈ったわけである。

さて——、また、勢いよく歩き出そうとして、宗太郎は、片手を、腹にあてた。ぐう、と鳴った。

「忘れていた」

にこっとして、ツツツ……と草原へ馳せ下った。

あまり急いで、小屋をとび出して来たので、まだ、なんにも喰べていなかったのである。背中には、三日ぶんの弁当を背負っている。

澄みきった水を音もなく流している小川のほとりに出て、水車小屋のそばに、ちょこんとあぐらをかいた宗太郎は、包みをおろして、もそもそとひらいた。

炒米を胡麻油でこねた餅と乾燥梅干である。これは、戦場に斃れた武者の遺骸からひろって、蓄えておいた兵食である。

腹がふくれると、宗太郎は、ねむくなった。



ごろんと仰向けに寝そべると、綿雲をふたつみつ浮かせた碧空へむかって、

「おーい！　小父さあーん！」

と、呼びかけた。

「まってて、おくれよーっ！」

雲の中から、小父さんが、にっこり笑いかけてくるような……その幻影を、しっかと瞳の中へとらえるように、まぶたをつぶって——もう、すやすやと、睡りにおちていたのであった。

どれくらいの時刻が移ったろう——。

「こども！……これ、こども……」

ゆさぶられて、パチンと音たてるように目をあけた宗太郎は、のぞき込んでいる綺麗な顔を仰いで、

「あっ！　姫さま！」

と、叫びかけようとするやいなや、すばやく、白い手で口をふさがれた。

「しっ！　しずかに——」

きついまなざしで、制したのは、金吾中納言小早川秀秋の妹美尾姫であった。

切迫した気色で、

「たのみがあります！　教えて欲しい！」

「な、なんだい？」

起きあがった宗太郎は、そのけんらんたる衣裳に、眩しげに、パチパチとまばたきした。

「そなたは、このあいだ、御堂主馬之介と一緒であったな？」
「う、うん――」
「主馬之介は、何処じゃ？」
宗太郎は、ちょっと、ためらった。
「教えて欲しい。礼は、のぞみのままに進ぜる。な、教えて欲しい！」
慕心をむき出した声音であった。
宗太郎は、こたえるかわりに、そうっと、首をのばして、むこうの街道を見やった。
数十人の武者たちが、休息している。まん中に、立派な駕籠が据えてある。この姫君が、乗って来たのである。
偶然であった。
美尾姫は、小用（こよう）を催して、この小川のほとりまで降りて来たところが、見おぼえのある小さなまっ黒な顔が、無心に睡っているのを発見したのである。
それが、御堂主馬之介のともなっていた少年に相違ないと思い出すや、とっさに、美尾姫は、決心したのであった。
「さ、たのみまする！　教えてたもれ！　主馬之介は何処じゃ？」
「小父さんは、もう、このあたりには、いねえや」
「では、どちらへ参ったのじゃ？」



「北の方だよ」
宗太郎は、こたえた。
「嘘ではあるまいな？」
「嘘なんかつかねえや」
「こども！」
「おらア、宗太郎という名まえがあらアい」
「宗太郎、おねがいじゃ！　わたしの代りに、しばらく、この被衣（かつぎ）をまとうていて、たもらぬか？」
「どうするんだい？」
「ただ、しばらく、ここに、じっとしていればよいのじゃ」
「姫さまは、逃げるつもりかい？」
「そうじゃ」
「おいら、いやだ！　あのさむらいたちにつかまったら、殺されちまうよ」
「いいえ、大事ない。そなたは、こどもじゃ。決して、むごい仕打は受けますまい。姫さまに、たのまれただけじゃ、と云えばよい。……礼に、これを進ぜます」
美尾姫は、金襴（きんらん）の袋に入った懐剣を、宗太郎に手持（たも）たせた。
「ほんとうに、おいら、慍（おこ）られねえのかい？」
「大丈夫です」

美尾姫は、大急ぎで、提帯（さげおび）を解き、紅梅模様の振袖を脱いで、裏がえしにした。縹色（はなだいろ）の裏地は、野を忍んで行くには、恰好とみえた。

「よいか。たのみましたぞ！」

小用をたしているのであるから、しばらくは、家臣たちも、近づくのをはばかっている。

どれだけ遠くへ奔ることができるか――美尾姫は、必死であった。

あの日以来、美尾姫の脳裡から、主馬之介の俤が、片時もはなれずにいるのであった。

異常なまでに勝気に生れたこの美姫（びき）は、これから、その恋しい青年のあとを追うのだと思うと、前途によこたわる幾多の困難など全く意にかけず、痛みにも似た強烈な情熱の陶酔感がからだの内を走るのをおぼえているのであった。

裾をたくしあげた美尾姫は、すんなりとした滑らかな白い脛をあらわにして、小川を渡って行った。

それを見送った宗太郎は、惑わしげに、眉を八の字に寄せていたが、

「姫さま！」

と、思わず、呼んだ。

「小父さんは、日坂のお寺にいるよ」

宗太郎は、そう教えたい衝動を起したのである。

しかし――。

美尾姫が振りかえると、その言葉は、宗太郎の咽喉に、ぐっとひっかかってしまった。



小父さんが、そこにいると教えてしまったら、姫さまは、むりやりに、徳川のお城へつれもどすだろう。そうしたら、おいら、剣術を教えてもらえない。

宗太郎は、きっと口をひきむすんで、ただ、日坂の方角を、指さすにとどめた。

美尾姫は、うなずいて、岸へあがると、身を跼（かが）めて、灌木のしげみの中へするすると消えて行った。

同じ日の同じ時刻――。

日坂城にあって、突如、天守閣と本丸、二の丸の館から、濛（もう）っと黒煙（くろけむり）が噴き出ていた。

とみる間に、紅蓮舌（ぐれんじた）が、めらめらと、はい出し、たちまち、炎々（えんえん）として、空をこがしはじめたのであった。

その凄じい業火の中から、狂おしい笑い声がつたわった。

「うわっはっはっ……燃えろ！　燃えろ！　日坂城は、今日（きょう）を限りに、地上から消えうせてしまえ！……燃えろ！　何もかも、焼きつくしてしまえ！　家康ごとき狸爺めに、何条（なんじょう）奪われてたまろうぞ！　ひっひっひっ……天も地も、燃えはててしまえっ！」

# 運命それぞれに

## 一

この日坂城に住む人々のうちで、誰が、いったい、この惨たる終末を予感し得たであろうか――。
城主盛政は、おのれにつきしたがう者が、わずか二十余名と知るや、ついに、狂気の決意をしたのであった。
天守も櫓も館も塀も、この山上にある一切のものを灰燼に帰せしめ、おのれもまた、その火の中に果てようとしたのである。
城内、城外にいた宇部隠岐側の将兵らが、愕然と色をうしなって、奔馳した時は、もはや、手おくれであった。
火薬の炸裂によって、全城は、一挙に、火焔につつまれたからである。
そして――。
主君に殉ずべく、それをやってのけた二十余名の士らは、昨日までの上司、朋輩、部下にむかって、悪鬼にも似た凄じい形相で、太刀を、槍をひらめかせ、
「うああっ！」



と、鯨波をあげて、斬り込んだのであった。
この山城は、谿谷の絶壁を、前面にめぐらして、大手門から架けられた跳ね橋が、唯一の入口であった。渓流を掘りひろげた濠は、四季に増減こそあれ、白い水泡を岩に嚙ませ乍ら、どうどうと清冽な水を流していた。
修羅場は、その門内の枡形で、くりひろげられた。
生きんとするのぞみをふりすてた武者たちの、文字通り死にもの狂いの働きは、数百余の多勢を、一時、猛然と、押しまくり、門外へ追い散らすかにみえた。
だが――所詮、勝敗は、時間の問題であった。
包囲陣が、ようやく脈絡をととのえるや、反乱士たちは、各個ばらばらに、そこへ、ここへ、ときりはなされ、黒蟻にたかられた蓑虫のように、無慚な、なぶり殺しに遭っていった。
中には、目の前に立ちはだかったのが、わが伜であるのをみとめつつも、
「おのれっ！　不忠者めがっ！」
と、目も歯も剝き出して、太刀風を唸りおろしていた。
流石に、伜の方は、どどっとあとへしりぞいたが、かわって、おどり出て来た者の槍に、脾腹をつらぬかれた老武者は、
「お屋形っ！　お、おさらば！」
と、咽喉をふりしぼりつつ、よろめいていた。
決死の奮迅も、あとからあとから押しつめて来る白刃の怒濤の前に、みるみる、血飛沫の下へ

崩れ伏していた。

そして、怒号と血汐の渦は、ひとつひとつ、しずまっていった。

黒煙と火の粉が、その上へ降りそそぎ、まさに、この世乍らの地獄図絵であった。

ついに——。

さいごにのこった三四人が、蔀塀ぎわで、無数の矢をあびて、斃れた時、天守もまた、紅蓮舌になめつくされて、轟音とともに、どうっと、落ち崩れていた。

「お屋形は、どこだ？」

「さがせっ！」

「まだ、どこかにひそんでいるに相違ないぞっ！」

士も兵も、いずれも、生血の色と匂いに酔った異様な形相で、口々に喚きつつ、思い思いに、火焔へむかって、殺到していった。

——いかに、城主とはいえ、この無謀は、断じて許せぬ！

——日坂城は、伊能盛政一人のものではないのだ！

皆の胸中には、その叫びがあった。

昨日、本丸評定の間において、盛政が、宇部隠岐の首を刎ねた瞬間には、——殿の逆上も無理はない、と思った連中たちも、心底から、憤怒していた。

君臣の節義と秩序が、整然たるものになった後年の徳川時代であったならば、このような、全員一致して、主人を裏切る事態には、いたらなかったであろう。



覇業達成のためには、主君のみならず、その実父さえも弑逆して、あやしまれなかった戦国時代である。

ひとたび、形勢が変転すれば、白刃をかざす武者たちは、餓狼の群と化した。

## 二

「ここだっ！　お屋形がいたぞっ！」

その絶叫は、二の丸の館裏手から、噴きあがった。

すべての建物が、燃えつくして、余燼が烟っている頃であった。

浮塵子が灯へむかって、むらがるように、そこへ——本丸へ通ずる小天守の渡櫓へむかって、人々は、奔った。

この渡櫓は、外側にむかっては、矢狭間と銃眼をひらき、内部は、平時には、上階が倉庫にあてられたり、牢屋にされたりしている。

焼けのこったのは、ここだけであった。

どっと、なだれ込んで、われ勝ちに、上階への階段をとびあがろうとしたとたん、

「待てっ！」

凄じい大喝が、飛んだ。

おそろしい迅足で、馳せ入って来た徳川家康の使者竹中内蔵之介の口から、発しられたものであった。

「わしに、まかせい！」
威風凛然として、武者たちを抑えると、ゆっくりと、左半身を大きく傾け乍ら、階段をのぼりはじめた。
田屋兵部少輔が、そのあとへしたがおうとすると、ふりかえって、
「ひかえい！」
と、鋭く叱咤した。
兵部少輔は、不服そうに、口をへの字にへし曲げたが、出足を停めた。
内蔵之介は、うす暗い階段を、中段までのぼった時、
「お――」
と、ひくく、うなった。
頭上に、殺気がひそんでいるのを、感知したのである。
かまわずに、すっすっと、身をはこびあげて、さいごの一段へ足をかけたせつな、はたして、稲妻のような槍の一撃が、襲って来た。
身をかわしざまに、その柄を、むずと摑んで、ぐいと引いた。
どどっと、よろけて、片膝を折ったのは、意外にも、荒武者ではなく、女であった。
「ほう！」
内蔵之介は、目を瞠(みは)った。
「おまえであったか」



日坂へ来る途中、柿もぎを手つだってくれた山猫娘だったのである。
「主人に忠実な山猫とみえるな」
内蔵之介は、にやりとして、無造作に槍を奪いとると、一歩ふみ出した。
山猫娘――朝路は、はじかれたように立ちあがると、両手をひろげて、内蔵之介の前に立ちふさがった。
「ふむ――」
内蔵之介は、きらきらと敵意を燃やしている朝路の眸子(ひとみ)へ、視線を射込んで、
「城主を守護する最後の一人が、おまえか」
と、云った。
「…………」
朝路は、紫色に変ったくちびるを、微かに痙攣させたが、一語も発しようとはしなかった。
「けなげな振舞いだ、とほめてつかわす。……が、もはや、無駄だ。退(の)くがよい」
語気をおさえて、命じた。
朝路は、なおしばらく、肩を波うたせて、烈しく睨みかえしていた。
内蔵之介は、つと一歩出るや、一瞬、目にもとまらぬ迅業(はやわざ)で、槍の柄尻で、朝路の鳩尾(みずおち)を突いた。
たあいなく、その場へ俯っ伏した朝路を跨ぎ越して、内蔵之介は、板の間へ、ふみ込んだ。
盛政は、武者窓下の板壁に、凭りかかって、くわっと、眦(まなじり)がひき裂けんばかりに、眼球(がんきゅう)を剝き

出していた。
しかし、その瞳孔は、光をうしなって、濁っていた。
地獄から彷い出して来た幽鬼——まさしく、それであった。
頭髪も面貌も手も足も、いたるところ、焼け爛れていた。衣服は、まだ燻っているように、ぼろぼろだった。
生きていることは、にぎりしめた双の拳を、ぶるぶると顫わせているので、わかった。
「盛政殿！　竹中内蔵之介正次じゃ。おわかりか？」
大声で云いかけると、盛政は、焼きはらわれた眉跡を、ぎゅっとしかめて、
「……き、きさま！……家康め！　狸爺め！……み、みたか！」
と、きれぎれに、罵った。
——狂って居る！
内蔵之介は、いたましげに、じっと見戍っていたが、
——斬ってやるのが慈悲であろうが……もしかすれば、生命だけは、とりとめるかも知れぬとすれば、すてておいてやろう。
と、思いかえした。
——そこの娘が、看護するであろう。
内蔵之介は、踵をまわした。
昏絶している朝路のわきを過ぎがてに、その寝顔へ、一瞥をくれて、



——最後の護衛者が、下婢であったとは！
と、暗然たらざるを得なかった。
階下へ降り立つと、そこにひしめいている人々へ、
「おぬしらの主君は、狂気いたした。火傷もひどい。長くて半年、短くて一両日の生命であろう。……城主たる妄執にとり憑かせたままに、逝かせてやるのが、せめてもの旧家臣としての礼節であろうかの」
と云った。

三

ぐん、と顎を蹴られて、主馬之介は、意識を甦らせた。
——なんとしたのだ、これは？
高手小手に縛りあげられて、ころがされていることに、咄嗟に、まだ悪夢の中にいるような気がした。
千草と対座していた書院ではなく、蒲筵を敷いた粗末な一室であった。
すでに、燭台に火が入れられてあった。
主馬之介は、頸をねじって、そこに仁王立ちになった者を仰いだ。
頼之助であった。
ゆらぐ炎に、下から照らされて、頼之助の形相は、残忍な色をさらに陰惨なものにしていた。

主馬之介は、頼之助の眼光が、凄じい憎悪を罩(こ)めているのを見てとって、
「わたしを、どうしようというのだ？」
と、訊ねた。
しずかな声音であった。どのような窮地に陥入っても、おのれの身を必死に動かさなければならぬとさとる瞬間までは、水のように冷たくしずかでいられる主馬之介であった。
「どうしてやろうか——それを、目下(もっか)、思案中だ」
頼之助は、にくにくしげに、吐きかけた。
「なんの理由による？」
「貴様は、わしの叔父を斬った！」
「叔父？」
主馬之介は、不審げに眉宇をひそめたが、すぐに、
「ああ——あの襲撃は、おぬしの叔父上のしわざか。……こちらには、意趣を抱かれるおぼえのなかったことだ。おぬしから、理由を明らかにしてもらおう」
「うるさいっ！」
頼之助は、力まかせに、主馬之介の胸を蹴った。
ごろり、と一廻転した主馬之介は、仰のけになると、一切の感情を秘めた眼眸(まなざし)を、宙へ送って、
「千草は、睡り薬と知り乍ら、わたしに、あの茶をすすめたのであろうか？」
と、独語するように、問うた。



「知って居ったとも！　自惚れるのもいい加減にせい！　千草は、疾(と)くに、貴様ごとき乞食牢人には、愛想をつかして居るわ！」
「…………」
主馬之介は、目をとじた。
先刻、お茶をささげて寄って来た清楚な姿が、鮮かに、眼裏に描かれた。
——あの千草が、おれに、毒茶をのませたのか！
異常な苦痛が、全身をつらぬいた。
次の瞬間、
——ちがう！
主馬之介は、烈しく、うち消した。
——千草は、なにも知らなかったのだ！　この兄に命じられるままに、おれに、すすめたのだ！
胸裡で、そう叫ばずにはいられなかった。
主馬之介は、目蓋をとじたままで、
「あの襲撃は、おぬしの指令によるものではないのか？」
「おれは、知らんぞ！　おれは、目撃して居っただけだ」
「卑劣な遁辞(とんじ)は不要だろう。わたしは、こうして、なんの抵抗もできぬ身となって居る。……それとも、かくさなければならぬ程、わたしを斬ろうとした理由は、うしろめたいことなのか？」
「うぬっ！」

頼之助は、かっとなって、主馬之介の顔を、ふみつけ、力まかせに、ぎゅっぎゅっと、ねじりまわした。
主馬之介は、一語も発せず、その苦痛と侮辱に堪えた。
「乞食牢人め！　明朝までの生命だぞ！　明朝、京より、新刀が届くのだ。試し斬りに、そっ首を刎ねてくれる！　念仏をとなえておけい！」
頼之助は、灯をふき消し、杉戸を開けて出ると、鍵をかけておいて、跫音を遠ざけて行った。
主馬之介は、口腔にあふれた血汐を、吐きすてると、闇に、まなこを瞠いて、
――おれを殺さねばならぬ理由が、頼之助に、どうしてあるのか？
と、考えた。
――石田三成を裏切った父の行為を憤怒して、その息子たるおれをも、ゆるせぬと思いたったのか？
それ以外には、考えられなかったが、それならば、堂々と、その理由を明言できる筈ではないか。
頼之助のとった手段の卑劣さに、疑惑が生ずる。
――何かある！
主馬之介は、死地を脱する方法を思いめぐらそうとはせずに、そうやって、じっと倒れたなりで、いつまでも、闇を瞶めていた。



この時、離れでは――。
千草が、血の気のないおもてを俯向けて、ひっそりと坐りつづけていた。
頭の中は、じーんと鳴るように痛み、そして、空白であった。
時おり、名状しがたい戦慄が、からだの内をかけぬけて、びくっと顫えあがるのだったが、それはそれだけのことで、千草のかよわい思考力は、まったく停止してしまっていた。
どうしていいのか、わからなかった。ただ、もう、彼女は、おそろしかった。主馬之介に、毒茶をのませたことが、おそろしかった。生まれてはじめて、犯した罪であった。しかし、あの兄に命じられた以上、そうするよりほかはなかったのだ。拒絶する強い意志など、彼女のたましいは持合せていなかったのだ。両親と兄から、右を向いておれ、と云われれば、三年でもそうしていなければならぬように、躾られて来たのだし、そのことに疑いを抱いたり、反抗するような気質を与えられなかった千草なのであった。
……主馬之介は、とらえられている。兄が、主馬之介を、どうしようとするのか、千草には、わからなかった。斬るのではなかろうか、という予感は、勿論、脳裡を掠めたことだったが、その予感だけで、千草は、気が遠くなりそうだった。主馬之介が斬られるのが可哀そうなのではなかった。主馬之介が斬られると、じぶんの犯した罪が、決定的なものになる――それが、おそろしかったのだ。
「……ああ！」
千草は、葦のように細い神経を顫わせて、歎息した。

千草の背後の壁を、黒い影法師が、すうっと、よぎったのは、この時であった。奇怪にも、その影法師は、さかさであった。

千草が、音のないその動きに、気づいて、驚愕と恐怖で、反射的に、つッ立ったせつな、天井から、ひらっと落ちた者が、間髪を入れずに、口をふさいでいた。

全身黒ずくめであった。顔も、頭巾で包んで、目だけ鋭く光らせていた。

「おしずかにねがいます、千草様」

含み声で、そうたしなめておいて、男は、千草から、一歩はなれると、

「千草様、ぐずぐずなさっている場合じゃございますまい」

と、眼光を、刺すように、はなって来た。

「……………」

千草は、全身を氷のように冷たく、かたくした。

「あなた様のお兄上様は、どういうこんたんがあって、お城の若様を捕えなすったか存じませんが、やりかたが、名誉のあるさむらいのなさることじゃありません。一騎討ちをなさって、お勝ちになったのなら、てまえの方も、黙って、若様のお遺骸をひきとったところだ。……暗殺をしくじったからといって、あなた様をつかって、睡り薬をのませるとは、言語道断、腰ぬけ公卿などがやりそうな下前の手でございまさあ」

この男は、今日の出来事を悉知して、忍び込んで来たのである。

「そ、そなたは……何、何者です？」



喘ぎつつ、やっと、色褪せたくちびるをひらいて、千草は、咎めた。

「名のる程の者じゃございません。ただ、あなた様が、このお屋敷においでなさる、と若様にお教え申したのが、てまえでございますのでね、よもや、こういうひどい目にお遭いなさろうとは、夢にも思わなかったもので——、若様には、あとで、幾重にもお詫びいたしますが、それだけでは、すむ筈もございません。そこで、ひとつ、千草様に、お力をお借りしたいのでございます」

「……………」

「なアに、かんたんでございますよ。若様のところへ、しのんでお行きになって、縄を切ってあげて下さいまし。それだけで、よろしゅうございます。……なんにも仰言らなくてもいい。縄を切ったら、すぐに、出てお行きなさいまし」

「……………」

千草の全身が、急に、わなないた。

「てまえが縄を切るよりも、あなた様がお切りになる方が、若様がおよろこびになる——そのことでございますよ。……あなた様も、毒茶と知っていて、若様におすすめになった罪が、それで消えるなら——これア、ひとつ、やっていただかねばならぬ、と申すものでございます」

「わ、わたくしは……」

千草は、おそろしさが、絶頂に達して、

——死にたい！

と、思った。

と──。
不意に、男が、語気を一変すると、
「千草様！　かりにも、一度は、将来わが良人と心でおきめになっていた若様でございますぞ！」
おし殺した声音ではあったが、肺腑をつらぬく鋭さをみなぎらせて、叱咤した。
千草は、あやつり人形のように、
「はい！」
こくんと、うなずいた。

## 四

黒装束の男が先に立ち、千草は、魂魄の抜けはてた足どりで、うしろにしたがった。
廊下を、鉤の手にまがるところへ達するや、男は、
「ここで、お待ち下さいまし」
と、ささやいておいて、おのれだけ、影のように、音もなく、進んで行った。
千草は、板壁へ凭りかかって、かるい眩暈の身をささえた。
男は、すぐにもどって来ると、
「よろしゅうございます」
と、促した。
その端部屋の前には、見張りの郎党が二人、がっくりと折重っていた。男に、当て落されたも



のに相違ない。
杉戸の鍵は、はずされていた。
男に手燭を渡された千草は、大きく波のようにうねりあげて来た喘ぎを、けんめいに怺えつつ、中へ入った。
主馬之介は、縛られた身を壁に倚りかけて、目をとじていた。
千草は、立ち竦んで、その静姿を、瞶めた。
そのまま、数秒が過ぎて、主馬之介は、目蓋を揚げて、千草をみとめるや、わずかな微笑を口辺に刷いた。
「そなただったのか──」
千草は、その穏かな声音に、はじめて、生心地をとりもどして、ふらふらと、近づいた。
わななく手で懐剣を抜くと、そのいましめを切った。
主馬之介は、自由の身になっても、なお、その場に坐ったままで、じっと、千草を見戍っていた。
千草は、顔をそむけて、
「……お、お逃げ、下さいませ……、は、はやく──」
と、急かした。
しかし、主馬之介は、おちつきはらって、
「そなたの兄は、何故、わたしを討とうとした？」

と、訊ねた。

「存じませぬ！」

千草は、遽に、あらたな恐怖をおぼえて、立ちあがっていた。兄の跫音が、いまにも、廊下に、ひびくような気がした。

「まこと、知らぬのか？」

「は、はい――」

千草は、身を翻すと、廊下へ、のがれ出た。

「千草！」

主馬之介は、立ちあがって呼んだが、あえて追おうとはしなかった。

廊下のかなたを、走り去る衣ずれの音をききながら、主馬之介は、反対の方角へ、歩み出そうとした。

そのとたん――。

「若様、これを――」

闇の中から、刀が、つと、さし出された。

透し見て、闇にくろぐろと滲んでいる黒装束をみとめた主馬之介は、無言で、刀を受けとって、腰にした。

庭に出ると、霧の流れが、はっきりとわかる夜明けのあかるさがあった。

主馬之介は、周囲に気をくばるでもない足どりで、すたすたと檜の老樹の間を縫って行った。



男は、そのあとを、一間と離れずに、跟いて来た。

往還を歩きはじめた時、主馬之介が、はじめて、男を呼んだ。

「多次郎――」

男は、自分の名をずばりとあてられて、

「お気づきでございましたか、若様」

「お前が、ただの商人でないことは、会った時に、目のくばりかたで、わかって居った」

「おそれ入りましてございます。その通りでございます。商人とみせかけて、実は――」

「盗賊になって居るのか」

「左様、まア盗賊同然の仕事でございます。陽が落ちた頃あいから、あちらへ走ったり、こちらへ隠れたり……いつどこで、闇から闇へ、葬られるかわからぬ身でございます」

主馬之介は、きき流してから、

「千草が、わたしをたすけてくれたのは、お前の指図によるのではなかったのか？」

「いえ――」

多次郎は、あわてて、主馬之介の背中へ、かぶりをふってみせて、

「てまえは、ただ、千草様から、おたのまれしたにすぎませぬ。……千草様が、ごじぶんで、必死の覚悟をなされたのでございます」

そう告げて、心の裡では、

――そうなのだ。若様の夢をこわしてはいけないんだ。これでいいのだ。

と、自身へ云いきかせていた。
「いつわりではないな？」
「決して――」
それきり、言葉を断って、ものの二町も歩いたろうか。
とある辻へ出ると、主馬之介は、立ち停まって、多次郎を振りかえった。
「忝けなかった。……ここで、別れよう」
そう云う主馬之介の貌を、朝霧の中に、この上もなく淋しげなものに、多次郎は、見た。
「若様――」
「なんだ？」
「どうしても、日坂へおかえりなさいますか？」
「帰る！」
短く、きっぱりとこたえて、主馬之介は、歩き出した。
「若様、おかえりになって――、どうあそばされます？」
多次郎は、不安をこめて、その孤影へ訊ねた。
主馬之介は、前方へ眸子を置いたままで、
「伊能盛政を斬るのだ！」
と、こたえた。
多次郎は、あっと息をのんで、その驚愕の色を、顔面に凍てつかせた。



## 五

「ひでえや！」
宗太郎は、大声で、そう叫んだ。
大きなお寺の本堂の柱に、くくりつけられているのであった。
「ひでえや！　畜生っ！」
やけくそに、足をばたばたさせてみるのだが、どうなるものでもなかった。
美尾姫に随行していた武者たちの大半は、姫が失踪したと知るや、あわをくらって、八方へ飛び、駕籠につき添っていた数名が、宗太郎を、この寺へ、ひきたてて来たのであった。
「姫さまの嘘つき！　おいら、ひっくくられたじゃねえかよっ！」
宗太郎は、とうとう、声をはりあげて、喚いた。
「むごい仕打ちは受けやしない、だなんて、こん畜生っ！　こんな、ひでえ目に遭ったじゃねえか！　姫さまの嘘つき！」
宗太郎は、あらんかぎりの力で、畳を蹴とばした。
美尾姫つきの侍女が、急いで入って来て、
「これ――しずかにしませぬか！」
と、しかりつけた。
「縄をといてくれよっ！　おいら、なんにも悪いことなんかしてやしねえんだ」

「姫さまの被衣をかぶったり、懐剣を持っていたりしたのは、姫さまをお逃し申上げた証拠じゃ」
「姫さまが、そうしろと云ったから、そうしててやったんだい！　おいらの方で、すすめたんじゃねえや！」
「さわがずに、お沙汰を待つがよい」
「お沙汰って、なんだい？　おいらを殺すつもりか！……いやだい！　おいら、殺されてたまるもんかい！」
この時――。
境内へ、馬を駆け入らせ来た者があり、何か、大声で問い糺すのが、きこえた。
すぐに、ずかずかと、本堂へ入って来たのは、遠藤嘉八郎であった。
「小わっぱ！　姫は、どちらに逃げた？」
「知らねえや！」
「知らぬ筈はあるまい！　姫は、このあたりの土地には、不案内だ。お前に、行先を告げて、道すじを尋ねたに相違あるまい」
「知らねえ！」
宗太郎は、頑固に、かぶりをふった。
嘉八郎は、きかぬ気性をあふらせたそのまっ黒な顔を睨みつけていたが、
「お――」



と、気がついた。
「お前は、主馬之介について行った小僧だったな」
「…………」
宗太郎は、
――しまった！
という顔つきになった。
嘉八郎の脳裡で、すぐさま、主馬之介と美尾姫がむすびついた。
――そうか！　姫は、主馬之介を追ったのだな！
美尾姫が、強烈な情熱のはけ口をもとめるあまりに、目にあまる勝手気ままな振舞いをしめすのを、つぶさに眺めて来た嘉八郎であった。
立去って行く主馬之介を、ひきとめるように歎願した美尾姫の、必死の表情が、思い泛んだ。
――成程、姫にとって、主馬之介は、夢中になって追いかけるねうちのある男だ！
いくばくかの嫉妬と羨望を交えて、嘉八郎は、それをみとめざるを得なかった。
「小わっぱ！」
嘉八郎は、宗太郎のえりくびを摑んで、ぐいとひとねじりした。
「主馬之介は、何処へ行った？　云えっ！」
宗太郎は、嘉八郎がわざと作ってみせた凄じい形相に、びくんとすくみあがった。
「云わぬか！　云わぬと、しめ殺すぞ！」

「か、かんべんしてくれよっ！」
宗太郎は、くしゃくしゃに顔中をゆがめて、悲鳴をあげた。
「主馬之介の行先を申せば、ゆるしてやる！　どこへでも、行くがよい」
「…………」
宗太郎は、はあはあ、息をはずませて、世にもなさけない目つきで、嘉八郎を見あげた。
「云えっ！」
嘉八郎が、大喝するや、宗太郎は、ぎゅっと、目をつぶった。
「き、き、北の方だよ」
「北だけではわからぬ」
嘉八郎は、美尾姫とちがって、それだけでは、ゆるさなかった。
「お、おいら、そ、それだけしか、知らねえよ」
そうこたえたとたん、宗太郎は、頬へ、冷たいものを、ぺたっとあてられて、ぎくっと、亀の子のように首をちぢめて、そうっと目をひらいた。
嘉八郎は、脇差の刃で、ぴたぴたと、宗太郎の頬をたたき乍ら、
「数を十かぞえる。よいか」
宣告して、ひとつ、ふたつ、三つ……と、ゆっくりかぞえはじめた。
宗太郎は、ふたたび、目をとじて、全身を石のようにしていたが、嘉八郎が、
「九つ！」



と、高く云いはなつや、ぱっと目を瞠いて、
「おさむらいさんは、あの小父さんの友達だろ！　友達だから、斬りあいなんか、しないだろ？　それを約束してくれよ！」
と、云った。
子供乍らも、衷心からほとばしらせる声音は、荒武者の胸を打った。
「よし！　約束してやろう。さあ、云え！　主馬之介は、何処へ行った？」
「揖斐郡日坂、という山の中だよ」
宗太郎は、しょぼしょぼと、まばたき乍ら、白状した。
「なに、日坂？……伊能盛政の城のあるところだな。主馬之介が、なんでまた、あの裏切り者のところへ――？」
ちょっと、不審げに小首をかしげたが、猶予をゆるされぬ事態であり、嘉八郎は、宗太郎をそのままにすてておいて、さっと、立ちあがった。
だだっと、廊下をふみ鳴らして、方丈へ走ると、率いて来た配下たちへ、
「おいっ！　一人のこらず、揖斐の城下へ通ずる街道を駆けて行け！　捜索へ出た者たちを見つけたら、そう連絡せい！　急げ！」
と、命じた。
本堂では、大人たちの嘘に、火のように怒った宗太郎が、まっ赤になって、
「ばかやろう！　こん畜生っ！」

と、絶叫していた。



# 女心ふたすじ

## 一

いまにも、ぽつり、と落ちて来そうな、雨雲がひくく空を掩うたうすら寒い朝であった。
北方の美濃の連山は、わずかに灰色の稜線のみを霧の上に滲ませて、さむざむとした淡い遠景だった。
いま——。冬をのせて来るかとおもわれる風音は、野の彼方で鳴っていた。
黙々として、ひとつの影が辿って行くひとすじ道は、松林の中にあり、足もとは、暮れがたのように暗いのであった。
——どうなるというのだ？
目を、その薄闇の地べたへ落して、腕を組み乍ら、男は、胸中で、相手なしの問いをくりかえしている。
——若様は、お父上を斬る、とお云いなされた！　しかも、伊能盛政を、と敵のごとく呼びすてにされた！
——なぜなのだろう？　若様が、お父上を怨んでおいでになったことはわかる。母様を斬った

お父上を、のろって、出奔なされた若様だったのだ。お世嗣ぎとしてのあつかいを、ただの一度も、御城主様から、お受けにならなかったお気の毒なお身の上だし、出奔なされたのは、あたりまえのことだったのだ。……しかし、実父を斬ろうと決意されたとは?!

——いったい、若様は、今日まで、何処でおすごしなされていたものだろう? どうして、突然に、帰っておいでになったのだろう?

こうした疑念に心を奪われている者は、多次郎を措いて、ほかにはない。

この男は、日坂を出てから、伊賀の里へ行き、忍者の群の中へ投じていた。そして、このたびの天下を分ける合戦にあたって、徳川家康にやとわれて、大阪勢の動静をさぐって来たのである。もとより、彼が、家康自身の口によって使令される隠密たることは、その側近しか知ってはいないのであり、それが味方に露見することも、厳に禁じられていた。

忍者というのは、まことにふしぎな存在であった。忍者は、一般社会とは全く別な世界に棲息する種族であった。彼らは、絶対に、主君を持たないのである。彼らは、常に、武将に一時的に傭われるだけであった。忠節をつくすのではなく、義務を果すにすぎなかった。任務が終了すれば、報酬を得て、その武将から、未練気もなく、はなれ去る。そして、次の日には、その武将の敵である城主のもとに趨って、傭われたとしても、べつに、われ人ともに、これをあやしまないのである。彼らは、武士道というものには、従わない。彼らがしたがうのは、「忍者の術」であった。

忍者は、術のために生き、術のために死んでゆく。



したがって、忍者が、たたかう対手は、敵方に傭われた忍者と、であった。この場合、あるいは、両者は、ともに同じ伊賀の里で修業した親しい友であるかも知れない。しかし、敵の立場に立ったからには、互いに、みじんの容赦もなく、人知れぬ闇の世界で、あらんかぎりの術をつくして、対手を仆すべく、血みどろにたたかう。そして、勝った方は、おのれの術が、対手のそれにまさっていたことに、最上のよろこびと誇りをおぼえて、次の任務につくのであった。

忍者は、まさしく、最も非情な、非人間的な特殊人種であった。

多次郎もまた、決して、他の忍者に劣る人物ではなかった。彼は、このたびの合戦にあたって、大阪方に傭われた懇意の仲間を、二人までも、仆していた。仆さなければ、自分が殺されるからであった。

おかげで、合戦が終った現在も、大阪方の忍者たちから、生命をつけ狙われているのであった。

この危険を、絶えず警戒していなければならない多次郎としては、こうして、このあたりを、神経を四周にくばることを忘れて、ぼんやりと歩いてはいられない筈であった。

忍者としての多次郎にも、ただひとつの弱点があったのである。

日坂城の若君に対して寄せる無条件の尊敬と憐憫——それであった。

多次郎は、信也であった主馬之介を、その幼児の頃から、好きであった。少年の多次郎が、その頃の唯一のねがいは、若様を一度だっこしてみたい、ということであった。

そのねがいが、かなえられた時、多次郎は、全身が、ふるえたものだった。若君が、いやがらぬばかりか、にっこりと美しく笑ってくれるや、多次郎は、感動の大きさ深さで、ぼうっとなり、

泪があふれ出て、とめ度がないくらいだった。

——一生、一度でいいから、若様のために、生命をなげ出して、おつくししたい。

生長して行くその姿を遠く見まもりつつ、思いつづけて来た多次郎であった。

若君が、突然、出奔してしまってから、多次郎も、日坂の山中でくらす何の生甲斐も失せて、そのあとを慕って、とび出してしまったのであった。

それから、八年——ついに、一度もめぐり逢えず、そのあいだに、多次郎の心身も、別人のように変ってしまっていた。

ところが、ゆくりなくも、揖斐城下で、ばったり出会うや、多次郎は、長い年月を灰で掩われていた熾火（おきび）が、遽に（にわか）、あかあかと胸でおこるのをおぼえたのであった。

——やっぱり、おれは、この世で、若様が、一番好きだったのだ！

自分にそう云いきかせるや、多次郎は、おのれが忍者たることを忘れてしまったのである。自分にそう云いきかせたのは、主馬之介に、千草の居処を教えて、別れて、ほんのしばらくしてからであり、急に、矢も楯もたまらなくなって、その後を追ったのである。

おかげで、捕われの主馬之介をすくい出すことが出来たのであったが……。

こんどは、多次郎が、熱誠をこめて日坂までお伴をしたいと願い出ても、主馬之介の方で、頑として受けつけなかった。

やむなく、別れて、多次郎は、揖斐城下を離れ、こうして、京への道をひろっているわけだが、後髪（うしろがみ）をひかれる思いで、足どりは重かった。



## 二

「もし——」

むこうから来た市女笠（いちめがさ）をかぶった若い女に、すれちがいがけに声をかけられて、多次郎は、われにかえった。

そのおもては、市女笠にかくれて、白いあごだけしか見えなかったが、多次郎には、すばらしく美しい、と直感された。

見るでもなしに、すばやく足もとまで観察してしまい、

——身分が高いぞ。

そうみとめていた。

すんなりとしたきれいなからだの線、手と足の置きかたで、ひとり旅などする素姓ではない、とわかったのである。

——大阪方の武将の女（むすめ）が落ちて行くのであろうかな。

想像しつつ、多次郎は、商人の物腰で、

「なんぞ、ご用でございますか？」

「この道をまっすぐに行くと、どこへ着きます？」

その言葉づかいと語気は、まぎれもなく、大名の子女のものだった。

「へい。揖斐の城下でございます」

女は、うなずいてから、つと、左手をさし出した。
てのひらにのせているのは、螺鈿蒔絵の小さな香料筥であった。琥珀と真珠がちりばめられた見事な品であった。
「路銀が乏しゅうなりましたゆえ、これを買うてくれませぬか」
こちらを律儀な商人とみてのたのみであった。
「ほう……これは！」
多次郎は、見惚れたふりをしつつ、内心、
――こういうあんばいに、人を疑うことを知らずに、ひとり旅をして居っては、たちまちに、餓狼のえじきにされてしまうわい。
と、あやぶまずにはいられなかった。
「いくらでもよい。こころざしだけ、与えて欲しい」
「失礼でございますが、これア、てまえの懐中にある金では、とてもおゆずりねがえぬ高価なお品でございます。どうぞそちらへ、おしまい下さいまし。いささかの路銀なら、お貸し仕ります」
「借りても、返す日がいつ参るかわかりませぬ」
「いえ、なんの――お返し頂こうとは、毛頭思っては居りませぬ」
多次郎は、いくばくかを紙につつんで、さし出した。
女は、大様に、受けとった。
別れて、四五歩はなれてから、多次郎は、ふと気づいて、呼びとめた。



「よけいなさしで口でございますが、揖斐の城下は、合戦のあとのならいで、欲深な者どもが群れて居ります。そのような高価なお品を、お気軽にお出しになりますと、とんだ災難にお遭いなさらぬともかぎりませぬ。くれぐれも、お気をつけなさいまし」
これは、心からの忠告であった。
女は、かるく頷いただけで、遠ざかって行った。
それから半刻も経たないうちに、躍起になって、女のあとを追わなければならない事態に到ろうとは、多次郎自身、夢にも考えられないことだった。
野道を過ぎて、赤坂の宿に近い川堤に出たおりであった。
灰色の空の下を、蓦地に馬をあおって飛ばして来る三騎の武者があった。
多次郎が、身を避けて、枯草の斜面へ降りていると、先頭をきっていたさむらいが、突然、たづなをひいて、馬脚を棹立て乍ら、
「多次郎ではないか！」
と、鋭い目を投げかけた。
振りかえった多次郎は、膝をついて、
「これは、どうも――」
と、鄭重に頭を下げた。
家康の股肱本多佐渡守正信に仕える松永弥九郎であった。多次郎を、隠密として家康に推挙したのはこの人物であった。

「どちらへ、いらせられます？」
こたえるかわりに、堤の果てへ、急ぎの眸子を送ったが、
「うむ」
「多次郎、貴様は、揖斐郡の生れであったな？」
「左様でございます」
「揖斐の城下から、伊能盛政の日坂まで、馬を責めて、行くことは可能か？」
「…………？」
多次郎は、はっとなって、まじまじと、弥九郎を仰いだ。
「どうだ？」
「それは、ご無理でございましょう。険しい渓流に沿うてのぼる杣道でございます」
「ふむ。それでは、もう間に合わぬか」
弥九郎は、背後の者をかえり見て、
「御堂主馬之介が、関ケ原から失せたのは、何日であったな？」
「七日前でござる」
「では、もう日坂へ到着して居ろう。日坂には、まだ、竹中殿が滞在している筈だが、主馬之介と出会うたか？」
多次郎は、俯向いて、この言葉をききつつ、烈しい胸さわぎをおぼえていた。
若君が、今は、御堂主馬之介と名のっていることは、その人自身の口から、きかされていたこ



とだった。
弥九郎たちが、若君を知っているのが、意外であった。
——この方たちは、若様がお父上を斬ろうとなされるのを、はばむために、後を追うておいでになったのであろうか？
多次郎は、知っていた。
伊能盛政が、大阪方を裏切って、美濃路潜行の石田三成勢を一挙に殲滅した功績によって、美濃一国の領主になったことを——。ただ、忌まわしい夢の実現が、はたして、いつまでつづくものか——その疑懼もまた、多次郎は、抱いていた。
実は、竹中内蔵之介の密命を受けて、その到着を、謡曲「邯鄲」をもって合図にすると、日坂城の家臣筆頭宇部隠岐に伝える仕事を果した忍者は、多次郎だったのである。
竹中内蔵之介が、いかなる任務をおびて日坂城へおもむいたのか、もとより、多次郎の窺知するところではなかった。
ただ、城主盛政に全く気づかれぬように、両者の会見がとり行われることを知った多次郎は、城主が、そのまま、安泰であるとは、到底思えなかったのである。
——必ず、大きな騒動が起る！
戦国の世の忍者たる多次郎が、その予感を抱いたのは、当然すぎることであろう。
多次郎が、主馬之介に、日坂へ帰らぬように、忠告したのも、その不吉な予感ゆえであった。
自分とは関りのない出来事のように、つつましく、顔を伏せている多次郎は、弥九郎たちの会

話を、一語もききのがしてはいなかった。

「……しかし、姫君の足では、まだ揖斐の城下まで辿り着かれては居りますまい」

と、殿りの者が、云った。

「それは、まちがいあるまい。……だが、御堂主馬之介と何かのしめし合せがしてあったとすれば、だ」

「御堂は、日坂へ行かずに、揖斐の城下で、姫君を待ちうけている、と申されるのか？」

「そう考えられなくもないではないか」

「どうも、面妖な話でござるな。信じられんことだ。あの無双の勇者が、姫君の容色に目晦んで、武功を敝履のごとく棄てるとは――」

中の者が、いまいましげに、吐きすてた。

弥九郎は、ふと思いついて、

「多次郎。貴様は、ここまでの途中、気品のある若い女性に出会わなんだか？」

「は――？」

「目立つ美しい貌を持っている。出会えば、貴様の目の底には、必ずのこっている筈だ」

「てまえの記憶には、一向に――」

とっさに、しらばくれた多次郎は、いよいよ、胸裡の不安を大きなものにした。

弥九郎たちが、一散に馳せ去って行くのを見送った多次郎は、不意に、厳しくひき緊った気色になると、



「よしっ！」

と、自分に頷いた。

次の瞬間には、斜面をひと跳びに、刈入れの終った田へ降り立つや、猛然と、走り出していた。

それは、黒い旋風に似て、田面を、あっという間に、掠め去った。

### 三

――会える！　屹度、会える！

一途に、それを信じ、じぶんに絶え間なく云いきかせ乍ら、美尾姫は、揖斐の城下を彼方にのぞむ地点を、辿っていた。

足も痛むし、腹もひもじかった。生まれてはじめての、孤独な道中であった。いかに、気性が勝っているとはいえ、その心細さは、ここまでの一日の旅で、充分にあじわった。このさき、御堂主馬之介にめぐり逢えるまで、どれだけの日数を、ひとりですごさなければならないか、わからないのである。

そのためにも、

――屹度、主馬之介に会える！

と、心で叫びつづけていなければならなかった。

まぶたのうらに鮮かにやきついている思慕する人の俤は、時に、ふっと、無情にも、遠のこうとする。瞬間、美尾姫は、堪え難い悲しみで、全身が疼くのであった。若い女として、人を恋う

るよろこびとかなしみを知った心驕れる姫は、いつの間にか、だんだん、娘らしい優しい人柄に変ろうとしていた。

まばらな松林の中に入って、とある一宇の阿弥陀堂（あみだどう）の前にさしかかると、美尾姫は、両手をあわせて、祈りたい気持さえ起していた。

この時であった。

殆ど足音をひびかせぬ独特の走法で、ひとつの人影が、矢のように追いついて来たのは——。

その気配に、頭をまわした美尾姫は、先刻別れた親切な商人であるのをみとめて、追って来てくれる予感でもあったように、なつかしさをおぼえた。

多次郎は、もはや、商人の表情をつくる余裕もなく、

「追手が参りますぞ、姫様！」

と、早口に告げた。

「え？……どうして、そなたが——」

「仔細は、あとで。さ、この御堂の中へ、おかくれなさいまし」

抱きとるようにして、多次郎は、美尾姫を、格子扉（こうしとびら）の内側へ入れた。

貧しい旅人たちが屢々泊って行くものとみえて、近所の人たちの喜捨による夜具、炊事道具、道中入用品などが、きちんと置かれてあった。

……息を殺して、じっと身じろぎもせずに待つ時間が、しばらくつづいた。

やがて、遠くから馬の蹄（ひづめ）がつたわって来て、烈風が吹きぬけるように、堂前を馳せ過ぎて行く



や、多次郎は、落着いた声音で、

「あれは、本多様の御家臣方でございました」

と、告げた。

薄くらがりの中で、美尾姫は、あらためて、不審そうに、多次郎を、まじまじと見据えた。

「そなたは……？」

「てまえの素姓などは、お気になさらないでも、よろしゅうございます。とるに足らぬ、賤しい男でございます。……おことわり申しておきますが、貴女様が、高いご身分の姫様、ということだけを拝察して居りますが、何処のお大名の、何と仰せられるお方かは、全く存じ上げませぬ。それは、おうかがいせずとも、結構でございます。おうかがい致したいのは、貴女様が、もしや、御堂主馬之介様をお慕いなされて、そのあとを追うていらっしゃるのではなかろうか——そのことでございます」

「…………」

美尾姫は、すぐには、返辞をしなかった。

「てまえは、実は、主馬之介様の下僕（しもべ）同然の者でございます。多次郎と申します」

多次郎は、うちあけた。

「まことか？」

美尾姫の顔が、光でもあてられたように輝くのを、多次郎は、みとめた。

「神かけて、いつわりは申しませぬ。てまえの伯父が、主馬之介様の御生家の郎党（ろうどう）でございまし

た」
　それから、さらに、幾秒間かの沈黙があってから、美尾姫は、呟くように云った。
「わたくしは、金吾中納言の妹美尾じゃ」
「…………？」
　多次郎は、口のうちで、うっと息を嚥んだ。
「そなたの云いあてたごとく、わたくしは、御堂主馬之介を、未来の良人と思いさだめた。……わたくしは、徳川内府殿の側妾になどなるのは、いやじゃ！　だから、ひとりで、逃げ出して来ました。……主馬之介に会いたい！」
「姫様。主馬之介様は、貴女さまのそのお心をご存じでございましょうか？」
　その問いは、美尾姫の胸に、氷をあてるにひとしかった。ために、かえって、きっぱりとした口調で、
「存じています！」
と、こたえずにはいられなかった美尾姫を、誰人も責めてはなるまい。
「よろしゅうございます！」
　多次郎は、大きく頷いてみせた。
「え！　では、主馬之介に会わせてくれるのか？」
「お会わせ仕ります」
　多次郎は、脳裡に、ちらと、千草のすがたを横切らせつつ、かたく決意した。



　美尾姫は、胸をはずませつつ、
「うれしい！　お礼を云います！」
と、感情のあふれるままの声音をあげて、頭を下げた。
　心驕れる姫が、生まれてはじめて、目下の者へ、頭を下げたのである。

## 四

　夜空に、月が昇り、その光が、山肌を徐々にひたして行き、やがて、無慚の廃墟となった城郭と、その周辺を、蒼白く染めた。
　静かであった。死に絶えたような寂寞といえた。
　しかし——。
　業火が消えて、すでに二日になるが、まだ、その余燼は、一陣の風でひと煽りされると、めらめらと燃えたちそうな、不気味な気配を、そこここに、ひそめているようだった。
　狂った城主の無限の怒りと怨みを罩めた妄執を象徴するかのように、この静寂の空気には、異様な焼けこげの臭いが、ただよっている——。
　その廃墟と谿谷をへだてた北側の山腹の坂道を、数個の黒影が、ゆっくりとのぼって来た。
　先頭に立っているのは、まだ二十歳あまりの若い士であった。城主盛政に首を刎ねられた家臣筆頭宇部隠岐の嫡子市太郎であった。したがうのは、日頃親しい朋友たちであった。
　城主にそむいた将兵全員は、竹中内蔵之介の指令によって、二里あまり下った津汲の里に、移

っていた。そこには、小城といえる砦があったし、広くなった渓流に沿うて、人家の聚落も幾群かにわかれていて、城を喪った二百余名を収れるに足りたのである。

　しかし、若ざむらいたちのうちには、この指令を大いに不服とする者がいた。城主盛政を仆して、直ちに、城を再建すべきではないか、というささやきが、ひそかに交された。父を殺された宇部市太郎は、この意見を、すすんで、内蔵之介に告げたが、かるく一蹴されてしまった。

「よし！　それならば、われわれ数名だけで、お屋形を討とうではないか。竹中殿も、結果をやむなしとされるに相違ない」

　密議するや、市太郎を先頭にして、津汲の里を抜け出て来たのであった。

　千余年を経た檜の木立を過ぎると、大手門とをつなぐ跳ね橋の前に出る。

　跳ね橋も、火をあびて、なかばを焼かれて、形も崩れかかっている。一度、嵐にでも見舞われたら、あえなく、濠へ落下してしまうに相違ない。

　一望して、変らぬものといえば、石垣とそれを洗って流れる水だけであった。いや、その石垣にさえも、骨肉相噛んだ血汐がこびりついているであろうし、水底には、幾個かの屍が沈んでいる筈であった。

　跳ね橋の袂に立った市太郎たちは、悽愴の夜景を眸子に映して、心身をひき緊めずにはいられなかった。

「行くぞ！」

　市太郎は、一言発して、橋板を踏んだ。



——もはや、主君ではない！　父の敵だ！

胸中に、そう叫びつつ、市太郎は、一歩々々に決意を強めた。

橋梁は、数個の若い体軀を乗せて、不気味に軋んで、ゆれた。

大手門の扉は、黒こげになって、傾いていたが、苦心して、閉ざしてあった。それをなした者が、城内にいる！

　これは、若ざむらいたちにとって、意外な発見だった。

　狂った城主がたった一人、廃墟の中に棲んでいるものとばかり、思っていたのである。

　市太郎は、朋友たちをふりかえって、

「油断すな！」

　と、警告した。

「十人以上も居るわけがない。それも、手負いが大半だろう」

　一人が、云うと、他の者は、

「いや、具足を鳴らして迎え撃たれた方が、こちらも、働き甲斐があるぞ。……いざ、ござんなれ！」

　と、威勢をみせた。

　市太郎が、佩刀を抜きはなつや、皆も、それにならった。

　扉は、内側から、幾本かの焼柱で、つっかいがしてあったが、これは、苦もなく突き開くことが出来た。しかし、そのためには、夜空に、大きな音をひびかせなければならなかった。

一斉に、足なみをそろえて、横列で、入って、陰惨な焼跡へ、目をくばった。
刹那——。
だあん、と銃声が、ほとばしって、市太郎の横の者が、呻きを発して、膝を折った。
「おのれっ！」
火を噴いた銃口の位置をみとめた一人が、喊号をあげてそこへ奔ろうとした。
次の瞬間、その者は、けたたましい悲鳴をあげて、身を弦のように反らした。これは、足もとで、鋭い短い唸りとともに、びゅんとはじきかえった鉄の環に、股間を嚙みつかれたのであった。
他の者は、それを見て、ぞっとなった。
山犬や熊を獲る罠が、仕掛けてあったのである。たくみに、焼け板や粗朶で掩い隠して、侵入者に備えていたのである。
これは、いたるところに、その罠が仕掛けてあると考えられた。
敵方が、姿をあらわして、武器をかざして、殺到して来るのであれば、こちらも、闘志をほとばしらせて、斬りむすぶことに、なんのためらいもあるものではない。
しかし——。
物蔭からの狙撃と、獣罠の伏兵に対しては、心理的に、なんともいえぬイヤな焦躁にかられずにはいられなかった。
身を伏せた市太郎たちは、一歩も、前進できなかった。
すると、また、別の場所から、銃火の轟音が発して、弾丸は、市太郎の前の駒つなぎの柵の柱



へ命中した。
「いかん！　伏兵は、多いぞ！」
そのささやきは、自分たちの退却を卑怯ではないと自己弁護するに役立った。無駄死した二人の朋友のなきがらを見すてて去るうしろめたさからも、伏兵は自分たちに、数倍すると考えたかった。
「出なおしだ！」
市太郎たちは、音をたてないように、じりじりと、さがって行った。
ややしばしの静寂があってから、とある暗い一箇処で、黒いものが、うごめいた。
すっと、月かげの下に姿をあらわしたのは、銃をかかえた小柄な小者態の人物だった。
「ちきしょう！　ざまをみろ！　お主を襲いに来たけだもの野郎！　罰あたり！」
さも、憎さげにののしる声は、若い女のものだった。
最後に、ただ一人、狂った城主を守って、この廃墟にとどまっている下婢朝路に、まぎれもなかった。
左様——。
門扉を閉ざしたのも、罠を仕掛けたのも、みな、朝路一人で為したことだった。
朝路は、この美濃の山奥に住んでいた猟師の娘であった。父が、熊に襲われて、非業の死を遂げてから、この城内へ、ひきとられたのであった。十年前——まだ七歳の時であった。
炊事、洗濯、掃除にこきつかわれて、誰一人からもやさしい言葉をただの一度もかけてもらえ

ずに育った哀れな存在だった。
　いつも、館の台所の片隅か、曲輪端の炭小屋か、渓流のふちか、そうでなければ、城外の山中で、一日中、口もきかずにすごして来たのである。与えられた場所で、絶え間なくくるくるとよく働いたが、働けば働くだけ、それをあたりまえのこととして、侍女や下男たちから、あとからあとから用事を云附けられたものだった。しかし、それを、辛いとも苦しいとも思ったことはなかった。それが、じぶんの役目だと信じて、けんめいにやりとげて来た娘であった。
　生きているあいだは、一秒間も休まずにせっせと働きつづける本能を与えられた小動物――それだった。
　だからこそ、朝路は、ただ一人、廃墟にふみとどまっているのであった。
　――お殿様を、わたし一人で、お世話申上げている！
　このことは、なんという大きな誇らかなよろこびであったろう。
　城に住む下婢にとって、城主は、神にひとしい。十年間、一瞥すらも与えられなかった朝路である。
　それが、思いもかけぬ凶変によって、傷ついた神さまのいっさいの世話を、このいやしいじぶんの手にまかされたのである。
　神さまを裏切った家臣全員に対する心からの憤りもあって、朝路は、いまこそ、全身全霊をつくそうと覚悟をきめ、そうしているのであった。
　毛すじほどの苦しさも淋しさも、このけなげな山猫娘の心の裡にしのび込む余地はなかった。



　朝路は、幼い日に父が鉄砲を撃ったり、獣罠を仕掛けたりするのを眺めた記憶が、ゆくりなくも役立ったことに、この上もない満足をあじわい乍ら、大急ぎで、お殿様の待っている二の丸の渡櫓へ、駆け戻って行った。
　盛政は、半焼けの布団の中に、横たわっていた。
「お殿様。ただいますぐに、やけどのお手当をいたします」
と、云いおいて、また大急ぎで、渓流にひたしてある薬草をとりに、階段を駆け降りて行こうとした。
「待て――。わ、わしを、起せ」
　盛政が、天井を仰いだなりで、にごった声音で、命じた。
　朝路は、目を瞠いて、盛政の寝顔を見戍った。
　はじめてきく、正気の言葉だったからである。
　燭台の仄かな明りの中に浮いた老人の形相は、まさしく、平常の思考力をとりもどした色を湛えていた。
　朝路は、よろこびと怖れで、全身が顫えて、その場を動けなかった。
「起せっ！」
　盛政は、衰死の身のどこから出るかと思われる烈しい叱咤をあびせた。
　朝路は、あわてて、おそるおそる、焼けただれた老軀を、抱き起した。
　盛政は、わなわなと痙攣するおのが十指を眺めて、

「もう……字も書けぬか――」

と、呟いた。

それから、しばし、宙へ、あんたんたる眼光を送っていたが、

「き、きさまは……朝路――とか、申したな」

「は、はいっ！」

――お殿様は、おぼえていて下された！

朝路は、わくわくした。

「きさまだけが……わしの、味方として……生きのこり、居った――」

「はい。左様でございます」

「わしが、死んでも……こ、この城へ、生きのこって居れ」

「お、お殿様！」

「これは、命令だ。……わしの、遺言だぞ！……よいか！」

「は、はい――」

盛政は、呼吸をととのえるために、口を開いて、かんまんに、大きく、肩の喘ぎをつづけていたが、ふたたび、語を継いだ。

「きさまは、信也を、存じて、居るか？」

「若様でございましょう。知りませいでか。お美しい、お立派なお方でございました」

少女の日、遠くから、夢みるようなあこがれに胸をふくらませて、凛々しい若衆姿を拝した朝



路である。

「彼奴が……ここへ、かえって参る」

「えっ！」

「その予感がする。……死んで行く者の霊感に、彼奴の、もどって来る足音が、つたわって来るわ。……必ず、ここへ――ま、まちがいはない！」

「…………」

朝路は、ごくっと、生唾をのみ込んだ。

「だから……きさまは、生きのこって、彼奴を、待って居れ。……よいか。信也を、迎えたら、わしの、遺言を、つ、つたえい」

ここでまた、盛政は、苦しい息をととのえなおさなければならなかった。

「よいか。わしが、信也に、のこす遺言だ。……一句も、まちがえずに、おぼえておけ。……信也よ、わしが、お前の母を憎み、お前を愛してやれなかったわけは、お前がわしの子では、なかったという、理由による。……二十余年前、わしは、新妻であるお前の母を、ともなって、石田三成の周旋により、羽柴筑前たりし太閤秀吉のもとへ、挨拶に、行った。……好色の秀吉の目に、美しかったわしの妻のすがたが、映った。……妻は、むりやりに、秀吉の夜伽を命じられた。三成めが、とりもったのだ。秀吉をそのかし、わしをなだめ……妻を、観念させ居った！……妻は、一月間、秀吉の館に、とどめて置かれた。……わしの人柄が、悪魔のごとく、変ったのは、それからだ。……やがて、お前が生まれた。わしには、全く、似ていなかった。お前は、太閤秀

吉の子であった！」
そこまで語った時、この不幸な老城主の生命の灯は、ふっとほそり、そして、消えた。
がっくりと、前へのめって、俯っ伏すからだに、朝路は、あっとなって、とりすがった。
「お殿さまあっ！」
絶叫は、むなしく、廃墟にひろがり、こだまを呼んで、夜空に吸い込まれていった。



# 帰去来坂

## 一

その日――。
主馬之介は、まっすぐに日坂への道をとらず、本巣郡祖父江へまわって、母の兄である春日明神社の神官を、八年ぶりにおとずれていた。
父伊能盛政を討つことを告げて、なろうことなら、いかなる理由で母が父に斬られたのか、こんどこそ、打明けてもらいたかったのである。
伯父は、留守であった。
むなしく、ひきかえして、主馬之介が、再び、揖斐の城下に姿をあらわしたのは、それから二日後であった。
自分を捜しもとめて、徳川家の武者たちが、奔馳しているとは夢にも知らず、主馬之介は、そのままの姿で、揖斐川沿いに、山ふところへ、入って行った。
美しく晴れわたった午後のことであった。澄みきった秋空には、純白の鳥毛のような吊し雲が、ふたつ、みっつ、ふんわりと浮かんでいた。

一歩一歩、山坂を登るにつれて、主馬之介の感慨は、深く濃いものになって行く――。

生きて再び戻って来ようとは、みじんも考えなかった故郷の山坂を、いま、陰惨な業念を胸に抱いて、辿るのである。

八年前とすこしも変らぬ山河の眺めが、かえって、主馬之介にとっては、苦痛であった。

にも拘らず、主馬之介の眸子が、むさぼるように光っているのは、

――もはや、この道を下って来ることはないのだ。

心にその悲愴な独語があり、父を討って、おのれも自決しようと覚悟をさだめた身にとって、この静かな美しい景色が、この世の見おさめとなるからであった。

岬のように突出した箇処をまわると、山峡は、急にせばまって、嵐気がきびしく冷たいものに感じられる。

渓流の音にまじって、筏を乗り下す山の男の鄙歌が、遠くから、つたわって来た。

――山も河も、永遠にかわらぬのに、人間の運命だけが、無慚に移ってゆく……。

主馬之介が、重い苦しい感慨を、ほっと溜息にして洩したおりであった。

前方の木立に、非常に迅く人影があった。

直感が働き、主馬之介は、その瞬間から、まわりに、油断のない神経のくばりかたをした。

樹木を縫って、一本の矢が、主馬之介めがけて、飛び来ったのは、数間と進まぬうちだった。

無造作に、それを二つに切り落した主馬之介は、そのまま、抜身を携げて、そこに立った。

矢の唸りと白刃の煌きにおびえて、数羽の山鳥が、梢からあわただしく、はばたき去ったあと、



山中は、しーんと、不気味にしずまりかえった。

主馬之介は、第二、第三の矢に備えた足どりで、数歩をふんだ。

人間の本能は、危機にのぞんで、ふしぎな働きをする。もとより、主馬之介の感覚は、殺気というものに対して、鋭く砥ぎすまされていたのだが、

――来るぞ！

と、さとって、ぱっと身を躍らせて、左側の急傾斜した叢中へ伏すのと、蜂の大群の翅音にも似て、数十本の矢が、黒い染羽をつらねて、びゅーっ、と襲い来ったのが、全く同時だったのは、ただに、兵法の修業によって得た迅業を行使したとのみ、片づけられない、ふしぎな本能の働きであった。

なぜならば、叢中に伏し乍ら、主馬之介は、自分自身思いがけない程の、烈しい活力が、心身にみなぎるのをおぼえていたからである。

――おれの生命は、守護されている！

まもってくれているのは、故郷のすべて――亡き母の霊魂をはじめ、草も木も石も水も、鳥も虫も、いっさいのものみなであった。

主馬之介には、このことが、かたく信じられた。

一斉に、木立の中から、七八十名ともかぞえられる武者の群が、路上へ、なだれ出て来るのを見てとり乍ら、主馬之介が、水のように冷静であったのは、このおかげであった。

## 二

はね跳んで、敵陣に正対した主馬之介の孤影は、凛然として、いっそ爽やかとさえいえた。
「おぬしたちは、徳川の家臣だな」
そう云って、冴えた眸子を放ちつつ、主馬之介は、有利の地歩をえらんで、すこしずつ、あとずさった。屏風のように殺がれた崖の断面が、背後にそびえていたのである。
主馬之介と見知った顔が多く交っていたにも拘らず、敵陣は、沈黙をまもって、白刃をかざして、前進して来た。
「何が故の襲撃か？　きこう！」
しかし、いずれも、凄じい眼光を送って来るだけで、こたえようとする者はなかった。
実は、討手たちの殆どは、どうして、御堂主馬之介を討たねばならぬのか——その理由を明らかにしていなかった。
無断で、麾下から離脱し去った主馬之介を、主君本多忠勝が憤ったためであろう、と推測しているにすぎなかった。しかし、輝かしい戦功を敝履のごとくすてたについては、何かの深い仔細があってのことであろうし、これを追って、翻意を促してみるのならともかく、討ち取るというのは、あまりに度量が狭いように考えられた。のみならず、武者たちは、戦場における主馬之介の颯爽たる働きぶりや、侍大将としての謙虚な振舞いなどを見聞していて、すくなからず、尊敬の念を持っていたのである。



たまたま、揖斐の城下の警衛にあたっていた一隊にもたらされたこの命令は、まことに唐突なものだったといわなければならなかった。
御堂主馬之介は、日坂へ行くであろうから、その行手をさえぎれ、と通告があって、この地点で、待ち伏せていたのであったが、その姿の出現しないことを願う気持が強かった。
物蔭から、矢を射かけたのは、卑怯の行為ではなく、誰も、おのが刃で、主馬之介を斬りたくなかったからである。けだし、御堂主馬之介何者ぞ、と気負いたったのは、第一矢を放った者ぐらいであろう。
「どうして、こたえぬのか！　指揮をとっている者は、誰だ？」
主馬之介は、声を張って、問いを重ねたが、ついに、返辞を与えられなかった。
背中を岩肌へ寄せて、主馬之介は、立ち停まった。
白刃の列は、一間に肉迫した。
主馬之介は、幾個かの屍を、地に伏さしめるのをやむなしと、思いさだめて、切尖を天に指し、ぴたっと、陰の構えをとった。
それなりに、この凄絶の対峙の光景は、時間を喪ったごとく、動きを停止してしまった。
主馬之介が、自ら進んで斬り込むのを好まぬことは、すでに、来宮藤左衛門一党に襲われた際に、述べてある。
襲撃者たちは、しかし、その主馬之介の落着きはらった静止相にうたれて、かえって、攻撃をためらってしまったかたちであった。

ここからすこしのぼったところにある杣小屋にいた遠藤嘉八郎が、急報を受けて、宙を翔けるようにして、奔り降りて来るや、一同は、ほっとして、殺気を納めた。
主馬之介は、正面に立った嘉八郎を見て、微笑した。
「おぬしが、主将だったのか」
「主馬之介！」
嘉八郎は、らんらんと双眼をひき剝いて、云った。
「主命によって、討つ！　覚悟せい！」
「理由は？」
「屍にしたのちに教えよう！」
「むざとは、討たれぬ。……陣屋を立去った罪を問うのだな」
「それは、貴様の勝手だ。それを咎めるなら、すでに、あの折、立去らせては居らぬ」
「その一事を除いて、わたしが、いったい、なんの罪を犯したというのだ？」
嘉八郎は、すずやかな主馬之介の眼眸を受けて、忸怩たるものをおぼえずにはいられなかった。
主馬之介が、美尾姫を誑し、そそのかして、逃亡させたのではないことは、あまりにも明白なのであった。
しかし、美尾姫護衛の責任者として、嘉八郎は、彼女が何故に逃亡したか、その理由を、主君忠勝に、報告せざるを得なかった。当然、おりかえして、もたらされた命令は、
「御堂主馬之介を討って、美尾姫の慕心を断て」



これであった。
主馬之介には、なんの罪もないのだ。いや、全く関り知らぬことなのだ。
しかし、家康の妾たるべく定められた女性から慕われたという運命からは、もはや、まぬがれることはゆるされない。すでに、慕われてしまったのだ。美尾姫は、逃亡してしまったのだ。
主命というものが、万能の掟である以上、主馬之介は、おのれの関り知らぬ事態に責任をとって、死をもって掟に服さねばならぬ。
「主馬之介！　ゆくぞ！」
嘉八郎は、一喝して、太刀を青眼にとった。
「待て！　身におぼえのない上意討ちで、昨日の友とたたかう意志は起きぬ。……嘉八郎！　どうして、理由を明かさぬ？　云えっ！」
それに対する返答は、猛然たる一撃であった。
きぇーっ、と山気を摶った太刀を、主馬之介は、かわしもせずに、鍔の切羽台で、がっと受けとめた。
鏘然と、刃と刃は火花を散らして、はがねの匂いを、明るい陽の中へ撒いた。
嘉八郎の血走った双眼からは、めらめらと青い炎が燃えたちそうであった。
それにひきかえて、主馬之介の眸子は、玻璃のように冷たく澄みきっていた。
嘉八郎の背後におしならんだ武者の群は、固唾をのんで、この一騎討ちを見戍った。
この決闘は、並の目には、五分と五分とに映っていた。

しかし、危機は、嘉八郎の方にあった。

嘉八郎は、渾身の力をふりしぼって、白刃を押しつけていた。主馬之介は、それを、鍔の切羽台で受けとめていた。すなわち、上から押す力と、下から受けている力とでは、消耗の速度と量において、大きな差があった。

いわば、嘉八郎は、振り込んだ刹那、目には見えぬが、その体勢を最も不利なものにしてしまったのである。

主馬之介は、嘉八郎が、太刀を引く一瞬を、気長に、しずかに待っていればいいのであった。

「う……むっ！」

嘉八郎が、太刀を引くやいなや、主馬之介の剣は、その胴を、横薙ぎに一閃するであろう。

嘉八郎は、絶望的な呻きを洩らして、あらんかぎりの腕力で、主馬之介の剣を、押し拉ごうとしたが……。

これを受けとめる主馬之介の剣をつらぬいている強さは、おそるべき天稟に加えた修練が生んだものであった。盤石不動の見事な守勢であった。

——八幡っ！

嘉八郎は、全身に、さむざむとした空虚を感じ、これをふりはらおうとして、さらに、最後的な闘志をふるいたてて、心中で、そう絶叫した。

## 三



「茂助——、降りるのは、登るのより楽だと思うて居ったが、いやはや、逆であったわい」

大声で、うしろの従者へ云いかけたのは、一歩毎に、左半身を大きく傾ける竹中内蔵之介であった。

なんとも後味のわるい結末であったが、ともかく、日坂城における任務を終えて、帰路についたのである。

跛を逆に利用した「小鷹の歩術」も、急な坂道をくだるのには、少々勝手がちがっていた。つまり、一気に駆けくだるのは、容易のわざであったが、ゆっくりと足をはこぶのには、凸凹の傾斜度が、からだの揺れの均衡をさまたげるのであった。

「殿、てまえにかまわず、足をお速めなされませい」

「たわけ。このあたりは、熊が出て参るときいたぞ。貴様が、間抜け面で、とぼとぼ歩いて居れば、熊めが、恰好のえじきだわいと、舌なめずりいたそうて——」

「逃げ足は速いつもりでございます」

とある曲り角へ来て、内蔵之介は、急に、表情を鋭くひき緊めて、

「はて——？」

と、小首をかしげた。

「く、くまでございますか？」

びっくりして、茂助が、寄ろうとするよりもはやく、内蔵之介の足は、地を蹴った。

あっと思う間に、その姿は、むこう側へ消え去っていた。

「と、と、殿っ！」
茂助は、あわをくらって、追いかけた。
道は、大きく、深く、きれ込んで、うねっていた。内蔵之介は、こんどこそ「小鷹の歩術」を最大限に利用して、急坂を滑走するや、たちまち、幾曲りかして、その修羅場へ達していた。
「待ていっ！　竹中内蔵之介正次、見参っ！」
高らかに呼ばわるとともに、武者の群が左右へ割った道を、驀地に駆け抜けて、嘉八郎と主馬之介が嚙み合せた二本の白刃を、下からすくいあげるように、鉄扇で、ぱっと打ち離した。
「やれ！　間に合ったぞ！……危機一髪を、一里の彼方で知る。竹中内蔵之介、いまだ老いずじゃ」
そう嘯いてから、双方へ、目をくれて、
「本多麾下の竜虎が、嚙み合うとは何事ぞ！」
と、叱咤した。
嘉八郎は、あとへさがって、はじめて、顔面に、どっと汗を噴かせ、肩を大きく喘がせた。
主馬之介は、しずかに、剣を鞘におさめると、内蔵之介へ一礼して、
「失礼いたす」
と云って、歩き出そうとした。
「待て待て！　御堂主馬之介ともあろう戦功第一の勇士が、そんなみすぼらしいなりになり居って、追撃をかけられて居るとは、なんとも解せぬぞ。そのいわれをきこうぞ」



「それは、嘉八郎におたずね下さい」
主馬之介は、こたえた。
「嘉八郎、どうしたと申すのだ？」
問われて、嘉八郎は、相手が内蔵之介ならば、適宜の捌きを心得ているに相違ないと思いたって、
「美尾姫君が、逃亡されました」
と、告げた。
「ふむ。それで――？」
「姫は、この主馬之介のあとを慕われたのでござる」
これをきくや、はじめて、主馬之介の面に、朱の色が滲んだ。
「嘉八郎！　主命とは、そのことか！」
「……………」
「おぬしは知っている筈だぞ！　わたしは、あの姫君が、島津の落人に拉致されようとしたのを、救ったにすぎぬ。それだけのことだ！……あの驕慢な姫君が、どのような存念を抱いたか、わたしの知ったことか！」
「……………」
「嘉八郎！　恥を知れっ！……金吾中納言の妹なら、兄をみなろうて、どのようにでも、心変りはいたすだろう。それに踊らされて、武士として、屈辱をおぼえぬとは、見さげはてた痴れ者と

罵られて、返す言葉があるか！　よし！　それが主命だと申すなら、こちらも、挑みに応じてやる！……竹中殿、引いて頂こう。御堂主馬之介の兵法ぶりをごらんにいれる」

「待て、主馬之介！……この内蔵之介が仲裁に入ったからには、一歩も退かんぞ。……嘉八郎、おぬしも、主馬之介を討つのは、本意ではあるまい。この場は、わしにまかせい。よいか、主馬之介を去らせる責任は、わしが、引受ける。者共をつれて、もどって行けい。忠勝殿に、ありのままを報告してくれてかまわぬ。この首ひとつを賭ければすむ話じゃわい」

内蔵之介の明るい大声は、険悪な空気を散らせる効果があった。

嘉八郎は、内心、内蔵之介に感謝して、一同へ、引きあげるように合図した。

内蔵之介は、主馬之介と二人きりになると、穏かな口調で、

「なんの仔細があって、牢人にかえったの？」

と、訊ねた。

「お見すておきねがいとう存じます」

主馬之介は、視線をそらして、こばんだ。

すると、内蔵之介は、鉄扇で、自分の刀の柄を、丁と打った。

「刀に誓って、他言はせぬぞ！」

その声音は、厳然としていた。

主馬之介は、頭をまわして、内蔵之介を見た。

「おききになっても、無駄なことです」



「主馬之介！　この竹中内蔵之介が、内府公に、おぬしを養子にいたしたい、と申出て居ったのを存じては居るまい。わしには、仁者の徳はないが、おぬしに惚れた真情は、父親に劣ろうとは思わぬ！」

主馬之介は、顔を伏せた。大きな感動の波が、胸からのどもとめがけて、うねりあげて来た。

この奇骨ある三河譜代の旗本中の錚々が、かねてから、自分を高く買って、折ある毎に、旗本へ加えたいと、家康へ推輓していてくれたのを、主馬之介は知っていた。

いくばくかの沈黙を置いてから、主馬之介は、じっと、内蔵之介を見かえして、

「日坂城へ、使者として出むかれたとお見受けいたします」

「うむ——」

「たぶん、伊能盛政を、その城主の地位から追い墜す目的をお持ちであったかと、推察いたします」

「慧眼だの。……おぬし、この道を辿るところをみると、日坂へ行くらしいが、それが、牢人になった仔細に関りがあるのか？」

「てまえの正体は、伊能盛政の実子信也——とお知り下さい」

「なにっ！」

内蔵之介は、愕然として瞠目した。

「人倫の道をふみはずした父を、その子が討つために、故郷へ戻ろうとして居ります」

主馬之介は、独語するように云って、遠い眸子を、行手へそびえる美濃の山へ置いた。

内蔵之介は、何か云おうとしたが、咽喉がひきつれて、声にならなかった。
主馬之介は、鄭重に頭を下げると、歩き出した。
「主馬之介！」
あわてて、内蔵之介は、その袖をとらえた。
「日坂城は、炎上いたして、廃墟と化したぞ。盛政殿のしわざであった。家臣一統は、津汲に降りて居る」
これをきいて、主馬之介は、眉間に暗い虚無的な翳を刷いて、
「父は、果てましたか？」
と、問うた。
その沈んだ語気が孕む不気味さに、内蔵之介は、背筋に、冷たいものが匍うのをおぼえた。
「…………」
名状しがたい苦しげな、蒼然たる表情を、内蔵之介に見せて、しばし、無言をつづけていた主馬之介は、やがて、ひくく、
「果てては居らぬ。しかし、気が狂うた。……気が狂うて、ひとり、廃墟の中に棲んで居る」
「わが子に斬られるために、気が狂うたのかも知れませぬ」
と、云った。
「主馬之介！ 盛政殿は、天によって裁きを蒙った。もはや、手を下すまでもあるまい。……子として父を斬る因果の罪を犯して、この先長い生涯を暗くする必要はあるまい。おぬしの智能と



腕前と人品をもってせば、未来は海のように広くひらけて居るのだぞ。な、思いとどまるがよい。ここから、わしとともに、ひき返してくれい」
主馬之介は、侘しげに、微笑して、かぶりをふった。
「てまえは、帰らねばなりませぬ。狂気の父をあの世に送ってやるのも、子としての務めなら、その屍骸を葬ってやるのも、子としての務めであります。左様、家臣たちから背かれたときおよんでは、猶更に、子として、城主たる尊厳をうしなわぬ葬儀をいとなんでやらねばなりませぬ。……この旨、竹中殿なら、よくおわかりかと存じます」
「うむ――」
内蔵之介は、呻いた。
主馬之介は、石田三成を裏切った人非人の所業を憎悪するあまりに、父を斬ろうというのではないのだ。その卑劣をあがなわしめると同時に、日坂城城主たる尊厳をも保たせてやりたい目的をもって、敢えて、それを為そうとしているのだ。
――伊能盛政が、石田三成を裏切った原因をつきとめて、天下に公表してやるのが、子としての務めだ、と決意したのだ、この若者は。
内蔵之介は、そう読んだ。
「よし！ 止めまい」
内蔵之介は、云った。
主馬之介は、離れて行った。

——惜しい！ 父の汚辱を、おのれが代って背負うて、裏切りの原因を明らかにしたならば、自らの生命を断つ覚悟であろう。惜しい！

肚裡から、熱湯が噴くような歎きを、じっと抑えて、見送っていた内蔵之介は、はっと気がついて、

「主馬之介！ 津汲を過ぎる時は、くれぐれも心せい。家臣たちは、盛政殿を憎んで居るぞ！」

と、忠告した。

主馬之介は、ふかく頭を下げて、それに応えた。

## 四

この頃——。

須藤頼之助は、妹千草の住む離れで、その書置きを、わななく手で披見していた。

頼之助は、あれ程厳重に高手小手に縛りあげて、一室へ監禁しておいた主馬之介が、夜のうちに、煙のように消えうせているのを知って、遁したのが妹ではないか、と疑いをかけて、責めつづけていたのであった。

千草の姿が、離れから見えなくなったと、召使いから報らされて、急いで来てみると、机の上に、書置きがのこしてあった。

はたして、主馬之介を遁したのは、妹であった。

文面は、心乱れたさまを映して、ただ、宥しをひたすら乞う言葉が、くりかえされてあったし、



じぶんがすすんでそうしたのではなく、多次郎に脅迫されてやむなくしたことだと弁明してあったが、頼之助の胸中は、一片の不憫の情を催す余地ものこさずに、逆上してしまった。

「千草め！ 追うて、手討ちにいたしてくれる！」

家出した妹の行先は、ほぼ見当がついていた。大垣の東方にある美濃路の古い宿駅墨俣に、頼之助兄妹の叔母が、塔頭が三坊もあるかなり大きな尼寺の庵主となっていた。千草は、そこへ、はしろうというこんたんを起したに相違ない。

召使の証言によれば、一刻前までは、たしかに離れに、千草の姿があった、という。

かよわい娘の足では、まだ一里もさきに行っては居るまい。

頼之助は、凄じい勢で庭へ走り出て、下僕に怒鳴って、馬に鞍を置かせると、とび乗りざま、馬腹を蹴あげて、矢のように、腕木門から、街道へ、疾駆して行った。

近道をとって、武家屋敷地の裏手から、松林寺門前を、駆け抜けようとして、土塀ごしに、境内の鐘楼のあたりへ、瞥っと、目をくれたとたん、

「おっ！」

と、ひくく唸って、たづなをひきしぼった。

鐘楼わきに、市女笠をかぶった若い女の姿が佇んでいたのである。

——千草か？

馬上にのびあがって、凝視したが、人ちがいだとわかって、再び、馬脚をあおろうとした。

その時、女のそばへ、近よって、何事かをささやきかけている商人態の男をみとめた頼之助は、

からだ中が、くゎっと熱くなった。

——多次郎っ！　彼奴っ！

妹を脅迫して、主馬之介を遁した張本人が、偶然にも、頼之助の目の前にあらわれたのである。

頼之助は、地上へ降り立つと、跫足を消して、ツツツ……と、山門へ忍び寄って行った。

多次郎は、ここへ美尾姫を待たせておいて、主馬之介が日坂への道を辿ったかどうか、そして、姫を追う手勢の動静を、さぐりに行って来たのである。

「姫様。……主馬之介様が、たしかに、日坂へむかわれたことは判りましたぞ」

「おお、よかったこと！　すぐに、あとを追います」

「ところが——」

多次郎の顔は、苦渋の色に満ちていた。

「どうやら、追手方は、すでに、この城下で、主馬之介様を見つけてしまった模様でございます。すぐに襲わずに、知らぬふりで、山へのぼらせたのは、途中で、迎え撃つ手筈がととのっているものと思われます」

「主馬之介ならば、斬り抜けるであろう」

「いや、おそらく、百名にもあまる頭数が、待ち伏せているのではございますまいか」

「わたくしが、あとを追うために、主馬之介が殺されるとは——なんという、本多忠勝の狭量であろう。いいえ、主馬之介は、ぜったいに、殺されませぬ！……多次郎、急ぎましょうぞ！」

「姫様。貴女様は、このままのお姿では、すぐに、見つけられてしまいます。なりをお変えなさ



らなくてはいけませぬ」

そう云いかけた多次郎は、この瞬間、身に迫る殺気に、ぎくっとなって、美尾姫をかばって、振りかえった。

頼之助が抜き討ちの豪剣は、それへ、真っ向から、躍って来た。

多次郎も、一流の忍者である。もし、一人であったならば、殺気をあびるやいなや、敏捷に、一間余を跳び逃げたに相違ない。美尾姫を守護する心くばりが、自身の五体を、その場から、動かさなかった。

虚空を截って、襲いかかった白い凶線を、躱すいとまがなかった。

多次郎は、絶体絶命の場合に、おのが生命をまもる唯一の方法をとった。

すなわち、左腕を頭上へかざして、これで、刃を受けたのである。

ぱっと、鮮かな紅の飛沫が、宙に撒かれた。

「こしゃくっ！」

吼えて、切尖を、地上すれすれに廻して、びゅっと、刎ねあげたが、もうその時には、多次郎の姿は、二間余り後方に、飛び退っていた。

左腕は、肱から両断されて、美尾姫の足もとに、ころがっていた。

返り血をあびて、悪鬼の形相と化した頼之助は、

「うぬがっ——」

と、満身からの憤怒をその吼号にほとばしらせて、ずかずかと迫った。

多次郎は、袖をねじって、創口の血を止め乍ら、
「姫様！　お約束がはたせませぬが、おゆるし下さいまし。……ここは、ひとまず、わが身をまもって、おわかれ仕ります」
と、云いのこした。
重傷をうけた身ともおもわれぬ素迅い身ごなしで、たちまちのうちに、本堂と方丈のあいだへ、姿を消し去ったのであった。
美尾姫は、頼之助が、じぶんの方へ向きなおるや、怒りと憎しみで、からだを顫わせて、
「無礼者っ！」
と、鋭く叱咤した。
「ふん――」
頼之助は、じりじりとつめ寄って来た。
「えい、寄るな！　けがらわしい！　わたくしを捕えて、褒美にあずかろうとの下種根性であろうが、笑止な！　お前ごとき郷士ずれに捕えられるくらいなら、舌を嚙んだ方がましじゃ」
美尾姫は、狂気のように叫んだ。
頼之助は、市女笠の下のすばらしい美貌をみとめたとたんから、妹を追いかけることを中止したのである。
大阪方の大名の息女が、徳川の手勢に追跡されているに相違ない、と見てとって、北叟笑んだのであった。



美尾姫は、罵りつつ、あとへさがり、ついに、鐘楼の石垣へつきあたってしまった。
頼之助が、刃を上に、ぐいと持ちかえるや、美尾姫の四肢は、恐怖で凍った。
対手の面上にみなぎったのが、露骨な獣欲の本能だったからである。
「……ひイっ！」
悲鳴をあげて、身をひるがえそうとした美尾姫の胴へ、峰打ちの一撃が送り込まれた。
濃霧にとざされたような、暗い世界の奥底で、美尾姫は、羽毛のように、じぶんのからだが、揺いでいるのを感じていた。
――のがれたい！　はやく、のがれたい！
と、あせればあせるほど、からだは、しだいに、沈んでゆくような気がした。
そのうちに――。
急に、腰から下が、ひえびえとして来て、いつの間にか、下肢が左右へ大きく開かれているのをさとった。
羞恥と屈辱で、烈しくもがこうとすると、どっと、重いものが、のしかかって来て、うっと息がつまった。
「いやっ！……いやっ！」
そう叫び――そのじぶんの声で、意識が甦った。
と同時に、からだの一部に、おそろしい疼痛が走った。

まがまがしい、あぶらぎった男の顔が、瞳孔いっぱいに拡大されていた。
あっとなって、無我夢中で、はねのけようとしたが、そのあらがいが、かえって、男の欲情を、たけだけしいものに、あおりたてた。
「おそいぞ、もう——。観念せい！」
残忍に、男の顔は、笑った。
美尾姫は、ひしと目蓋をとじた。
——死にたい！
そう思った。



# 荒城の娘

## 一

京から下る小山伏
肩にから笠、
お手に数珠、
腰につけたは、螺の貝、
袂に入れたは、恋の玉章、
鎌倉女郎衆に、渡すげな
螺貝吹いて、渡すげな

とんびが一羽、大きな弧を描いている、澄んだ秋空へ、のどいっぱいにはりあげた唄声が、ひろがる。
宗太郎であった。
大きなお寺の本堂の柱に、ひっくくられて、まる三日間も、すてておかれたことなど、けろりと忘れた、なんの屈託もない、明るい顔つきである。

昨日は昨日、今日は今日、明日(あした)は明日の風が吹く——野性児が、身につけた処世法は、まことに自然で、なんの暗い翳も持たないのである。

ひろった竹ぎれで、道端の灌木をたたき乍ら、この美しい野景色(のげしき)は、じぶんのためにひらけているのだといわんばかりに、大きく胸をはって、足どりも軽かった。

揖斐の城下は、揖斐川の白い流れのむこうへ見えていた。

牛連れの百姓がやって来るや、

「おっさん——」

と、声をかけた。

「日坂へ行くのは、あのお城下から、どっちの山へのぼるんだい？」

「日坂じゃと？」

百姓は、ちょっと首をかしげたが、

「知らんわい、日坂なんどちゅうところは——」

と、云いすてた。

「ちぇっ！」

舌うちして、かぶりをふると、宗太郎は、とっとと、足をはやめようとした。

このおり、

「おい、こども——」

右手の旗すすきの中から、呼ぶ声があった。



頭をまわして、のびあがった宗太郎は、

「なんだい？　おいらのことかい？」

と、問いかえした。

「そうだ。……ちょっと、訊きたいことがある。降りて来てくれんか」

姿を見せずに、まねいた。

「へん——訊きたいことがあるんなら、そっちから上って来るのが、礼儀だぞ」

「あいにく、動けぬのだ」

「どうしてだい？」

「来てみれば、わかる」

宗太郎は、ちょっと警戒の目を光らせたが、好奇心の方が勝ったか、とんとひと跳びして、旗すすきの中へ入った。というより、もぐった、という方がふさわしい。立っていて、頭が没する深さだった。

がさがさとかきわけて行って、

「どこだい？」

と、大声をあげると、すぐ、足もとで、

「ここだ」

と、こたえがあった。

三尺とはなれぬ箇処に、その者は、横たわっていたのである。

踞みかかって、
「へえ？」
と、宗太郎は、怪訝のまばたきをした。
「どうしたんだい、小父さん？　なんで、こんなところへ、ひっくりかえっているんだい？」
「歩けなくなったからだ」
「病気かい？」
「ああ、揖斐の町へ、片腕を落して来た」
あっさりとこたえておいて、やおら、上半身を起した。成程、痛みを怺えて、苦しそうだった。
左の袖が、だらりと垂れている。
「喧嘩をしたんだな、小父さん？」
「そんなところだ。それよりも、お前は、いま、日坂道を尋ねていたな？」
「ああ——」
「日坂へ行くのか？」
「うん——」
「……………」
「どういうわけで、日坂へ行く？」
宗太郎は、むっと口を一文字にひきむすぶと、対手をにらみかえした。
——もう、大人の嘘つきには騙されんぞ！



小さな軀いっぱいに張った気概である。
観音様みたいな綺麗なお姫様も、立派な侍大将も、大嘘つきだったのである。おかげで、さんざんな目に遭わされた宗太郎だった。
「どうした、なぜ黙っているのだ？」
男は、やさしく訊いた。
「どこへ行こうと、おいらの勝手だ！」
昂然と、宗太郎は、肩をそびやかしてみせた。
男は、笑った。
「そりゃ、そうだ」
「そんなら、わけなんか、きくない」
「いや、わるかった。あやまる」
男は、頭を下げた。
宗太郎は、拍子ぬけがして、威張ってみせた自分がすこしはずかしくなった。
「実はな、日坂へ行くのなら、ちょっと、たのみたいことがあったのだ」
「なんだい？」
「まあ、よそう。子供にたのめることではない」
「へん、ばかにすんない！　おいら、そこいらの洟たれ餓鬼とは、すこしばかりちがうんだぞ！
おいらは、関ケ原の木樵小屋で、猿を家来にして、たった一人で、りっぱにくらして来たんだぞ」

「ほう――」
男は、あらためて、宗太郎の顔を、じっと見戍っていたが、
「それじゃ、たのむか」
と、云った。
「ああ、きいてやらあ」
「日坂に、お城がある。伊能盛政というお方が城主だ」
「知ってら。石田三成を裏切った卑怯な奴だろ」
「噂のひろがるのは、早いものだな。……その伊能盛政を斬り仆す目的をもって、あるお人が、日坂へお行きになった」
「へえ――？」
「御堂主馬之介という、お若い、強いおさむらいだ」
「えっ！」
宗太郎は、蜻蛉のように、目ン玉をくるっとまわした。

## 二

忍者多次郎は、少年の驚愕ぶりに、呆気にとられて、
「どうした？」
「そ、その、小父さんは、お、おいらのお師匠様だい！」



「そうか。そうだったのか。……これア、神様のおひきあわせだ。わしもな、実は、あの若様の、家来同様の者なのだよ」
「ほんとかい？」
宗太郎は、顔をかがやかせた。
「なんで嘘などつくものか。主馬之介様は、日坂城のお世継ぎだったのだ。わしは、そのお館にお仕えしていた郎党だった」
「ふーん！ けど、おかしいじゃないか。お世継ぎが、どうして城主様を殺しに行くんだい？」
「これには、深い仔細がある」
「あ――」
宗太郎は、はっと思いあたった。
木樵小屋に案内されて行き乍ら、小父さんは、云っていたではないか。
「大人にも、泣きたくなることがある。しかし、わたしは、大人だからな。歯をくいしばって、泪をこぼすまいと、怺えているのだ」
その横顔が、とても暗く、淋しげであったのを、宗太郎は、はっきりと記憶にのこしている。
――小父さんは、ひとりぼっちなので、あんなに淋しそうなんだと思っていたけど、それだけじゃなかったんだ。
宗太郎は、目がしらが、じーんとなった。
「云っておくれよ。おいらは、お師匠様を追いかけて行くんだ。おいらに、できることは、なん

でもしてやらあ」
「若様にお会いしたら、伝えてもらいたいのだ。いいかな。……美尾姫様が、地位も身分もすてて、おあとを慕うて、揖斐の城下までおいでなさいましたが、不運にも、須藤頼之助殿に捕えられました。救ってあげて下さいますよう――。そう伝えてくれぬか」
「よおし、ひきうけた。……美尾姫様って、ひょっとしたら、おいらに嘘ついたあの姫さまかな？」
「お前、知っているのか？」
「うん――」
　宗太郎は、そのいきさつを語った。
「まちがいない。そのお方だ」
「おいら、あの姫さまは、あんまり好きじゃねえや」
「地位も身分もすてて、いのちがけで、主馬之介様をお慕いなされて居るのだ。主馬之介様の方も、そのお心をご存じだ、と姫様は申して居られた。是非とも、主馬之介様に、姫様をお救いして頂かねばならん！」
「…………」
　宗太郎は、多次郎の真剣な形相を、パチパチとまばたき乍ら、見戍った。
「しかし……」
　多次郎は、急に、暗然と、地べたへ目を落した。



「主馬之介様は、お城へ斬り込まれて……もしかすれば、再び、もう――」
　その独語（ひとりごと）を、宗太郎が、金切声で、烈しくさえぎった。
「ちがわい！　ちがわい！　小父さんは、強いんだぞ！　おいら、見ているんだぞ！　日本一強いんだぞ！……小父さんが、討死なんかして、たまるもんかい！　変な気持を起すない！　おいらまで、胸がドキドキして来たじゃないかよっ！」
「ゆるしてくれ。つい――こっちも、気が弱っていたものだから……。じゃ、たのむぞ、くれぐれも、気をつけてな。主馬之介様にお目にかかったら、多次郎が、お生命をお大切に、と申していたと――」
「ああ、きっと――」
　宗太郎は、旗すすきをかきわけて、行きかけて、ちょっと心配そうに見かえった。
「小父さん、そのからだで、大丈夫かい？　ここで、死んじまっちゃ、つまらねえや」
「はゝゝゝ。心配するな。わしは、商人じゃない。忍び者だ。腕の一本ぐらいすてても、死にはせん。ただ、二、三日、ここで、寝て、熱を下らせるだけだ」
「それなら、いいけど……大事におしよ」
　云いのこした言葉が、胸にしみた。
　しずかに、仰臥（ぎょうが）し乍ら、多次郎は、
「やさしい心を持っているらしい。若様の家来に、ふさわしいこどもだわい」
　そう呟いて、目蓋をとじた。

## 三

地誌によれば——。

揖斐川が岐れて、日坂へ溯る渓流を左方に置いた山腹の津汲の里は、すでに、天正時代において、今日とほぼ変らぬ穀高を記録している。

聚落も、渓谷の東と西の斜面を拓いて、幾群かにわかれ、欝蒼たる樹林に掩われた断崖を、ほそぼそとうねる杣道を辿って来て、三倉という地点を過ぎると、ふいに、ひろびろと、この里が、ひらけるのであった。

いま——。

川幅もひろくなり、砂礫が、しろじろと浮きあがって、流れの色と対照して、眺めは美しいのであった。

この磧の水ぎわを、ゆっくりと歩いて来る人影は、簗をかける堰き場所を物色しているとも見えた。

黒い布で頬かむりをして、尻紮げのいでたちであった。背中に、細長い菰包みを負うていた。

川面へ向けた顔を、ずうっとそのままにして、磧で、数人の若い士たちが、槍稽古をすませて、ひと憩いしている有様を、見ようともしなかった。

ところで——。

日坂城炎上によって、この津汲の里へ下って来た城士たちは、無聊をもてあましていたし、ま



た同時に、将来どうなるのかという不安も次第に昂じていて、険悪な徴候は、その行動のふしぶしにあらわれて来ていた。

「お——」

水ぎわを歩いて来た男へ、鋭い眼光をはなった一人が、つと槍を携げて、忍び足に迫って行ったのは、怪しい者、とにらんだからではなかった。

無聊ざましに、生身を突く刺戟を欲したにすぎなかった。

「戸倉、無益な真似は止せ！」

と、眉をひそめて、制したのは、宇部市太郎であった。

戸倉なにがしは、しかし、ちらと振りかえって、狂暴な笑いをみせただけで、きかなかった。

「しかたのない奴だ」

舌打ちした市太郎自身、心のどこかでは、その刺戟をのぞんでいなかった次第ではない。

他の者たちも、一様に、残忍な目つきになって、戸倉の行動を眺めていた。

ツツツ……と、戸倉のからだが、敏捷に、男の背後へ、奔り寄った。

とみるや、一槍を、ひとしごきして、

「えいっ！」

気合凄じく、突き入れた。

誰もが、絶鳴をあげてのけぞる姿を、そこに見とどけることで、緊張していた。

わが目を疑ったのは、次の瞬間に展げられた光景であった。

槍は、男の小脇にかい込まれ、戸倉は、たたらをふんで、前へのめっていた。男が、そのひと突きを躱した動きは、誰の目にもとまってはいなかった。戸倉が、わざと、男の小脇へ、槍をさし入れたとしか、受けとれなかった。

男は、川面を見ている、依然とした同じ姿勢で、立っているのであった。ただ、槍のけらくびを、しっかと摑んだなりで——。

「う……むっ！」

あやうく膝を折るのをまぬがれた戸倉は、驚愕と屈辱で、満面を朱にして、槍をひきもどそうとした。

こちらでは、若い士たちが、一斉に立ち上った。

——あれだけの手練を有するとは、見遁せぬ曲者！

兵法者のいでたちをしていたのであれば、怪しむことはなかった。地下人態を装っているのが、曰くありと読みとれたのである。

だだだっ……と、砂利や小石を踏み散らして殺到して行くや、男は、はじめて、布でかくした顔をまわして、摑んだ槍を突き離した。

戸倉は、あっけなく、のけぞって、しりもちをついた。

「何者だ、おのれっ！」

「ただものではあるまい！」

「かぶりものをとれ！」



威丈高になって、口々にあびせかけたが、男は、冷たく冴えた双眸を送りかえすだけで、一語も発しなかった。

「貴様っ！　石田の残党かっ？」

市太郎が、叫んだ。

「それとも、徳川の間者かっ？」

「そのいずれでもない」

「なにっ！　では、なんだ？　それだけの腕前をかくして、忍び過ぎようとした理由をきこう！」

「市太郎！」

「…………？」

わが名を、ずばりと呼びすてられて、市太郎は、ぐっと息をつめた。

男は、白面に、薄ら笑みをのぼせると、

「八年前の面差をいまだ持ちつづけるおぬしは、なんの辛酸もなめずに育ったことになろう。……わたしの貌かたちは、それほど変ったか？」

そう云われて、市太郎は、あらためて、穴があく程、対手の面相を凝視していたが、突然、

「げっ！」と、非常な驚愕の唸きをあげた。

「わ、若君！」

その一言に、若い士たちは、烈しい動揺をしめした。市太郎を除いて、彼らは、いずれも、二十歳前後であり、八年前に出奔した若君信也の顔についての記憶には、乏しかった。

「気づかれなければ、これに越したことはないと思って、通り過ぎようとしたのだ。その者の酔狂の振舞いが、こちらには、甚だ迷惑だったということだ」
冷やかに云いすてる主馬之介を、市太郎は、驚愕のあとに来た痴呆的な当惑で、茫然と瞶めていたが、
「お戻りなされたのか、若君は――」
と、自分にたしかめるように云った。
「死んでしまったものと、おぬしたちは、考えていたのであろう」
主馬之介は、ずうっと、一同を見わたして、
「どの顔にも、おぼえがある。名をあててもよい」
ひくい笑い声をもらしてから、歩き出そうとした。
「若君！」
はっと、気力をとりなおして、市太郎は、鋭く呼びとめた。
「城が、いかが相成ったか、ご存じありますまい」
「知っている」
「え――？」
「烏有に帰したそうだな。その廃墟の中に、父一人、生き残って居る、ときいた」
「………」
市太郎たちは、そうと知って居り乍ら、あまりにものしずかな主馬之介の態度を、薄気味わるいものにおぼえずにはいられなかった。



主馬之介が、十間余彼方に遠ざかるのを、無言で見送っていた市太郎は、眸子に凄じい光を帯びさせると、地を蹴って追った。
「若君っ！　お屋形は、われらが父を、問答をゆるさず、首を刎ねられたのでござる。その狂気が、城兵全員の心を、お屋形から離反させたのでござる。断じて謀叛ではござらぬ。……城に火をつけたは、お屋形ですぞ！」
嚙みつくように、そう云いはなったが、見かえす主馬之介のまなざしは、すこしもかわらずに、冷たく澄んでいた。
「もはや、おぬしたちにとっては、主君ではない、というのか？」
「いかにも――」
かるく合点しておいて、主馬之介は、背中を向けた。
「城へ戻られて、なんとされる？」
その問いに対して、返辞はなかった。
主馬之介の姿が、磧から、斜面をのぼって、雑木林の中へ消えた時、一人が、はっと気づいたように、
「われわれの主君として頂くのは、あの御仁ではないぞ！」
と、口走った。
「そうだ、日坂の新城主は、須藤頼之助殿だぞ！」

暗黙裡に、一同は、自分たちが為さねばならぬことを、了解し合った。
その後を追跡しようとする殺気がみなぎるや、市太郎が、
「待て！」
と、抑えた。
「あせる必要はない。……狂うたお屋形のざまを、とくと御覧に入れておいて、おそくはあるまい」
市太郎は、廃墟の中に、いまだ幾人かが生き残っていると信じていたので、
――殺すなら、其奴らも一挙に――、その手段をとるべきだ。
と、考えたのである。

四

陽が、西に傾きかかった頃あい――。
主馬之介は、ついに、さいごの曲り角をまわって、千年檜の木立の中に立った。
目を挙げて、見た。
紅蓮になめつくされた荒廃の恐ろしい対岸の光景を――。
崩れかかった、焼けこげた跳ね橋のむこうに、大手門が、肉を焼かれて骨をむき出した野獣宛然に、無慚に建ち残っていた。
曾て、山上に悠然とそびえていた巨大な建物の屋根は、消えうせて、ひろびろとした空間がひ



ろがっていた。石垣上の塀は、いたるところ崩れて、黒焦げになった残骸をとどめていた。
主馬之介は、変りはてた故郷のすがたに、肚裡で、微かに呻いた。
――この荒城の中に、父は、まだ、狂って、生きているのか！
ゆっくりと、跳ね橋にむかって、歩み寄って行き乍ら、主馬之介は、遽に、すでに不退転のものとなったと信じていた決意が、その一歩毎に、削ぎとられるような気がした。
不気味に軋る橋板を、踏みしめつつ、脳裡に、ふと甦らせたのは、竹中内蔵之介の忠告だった。
「……子として父を斬る因果の罪を犯して、この先長い生涯を暗くする必要はあるまい」
内蔵之介は、そう諭してくれたものだった。
――いや！　この廃墟も、人為による。わたしもまた、おのが意志を枉げまい。
きっぱりと云いきかせて、扉へ手をかけた。
手をかけただけで、扉は、主馬之介へ倒れかかった。
気合を発して、これを突きはねると、音もなく、住へ凭りかかった。
その隙間を通って、門内の桝形に入ってみると、前面には、焼け落ちた黒い材木と瓦礫の山が盛りあがっていた。
突如――。
主馬之介は、足もとから、鋭い短い唸りをたてて、飛びあがって来たものを、反射的な素迅さで、半間余、跳び退って、避けた。
それが、山のけものに対して仕掛ける鉄の罠と知って、

——はて？

と、小首をかしげた。

——父は、まこと、狂うて居るのか？

焼け板や粗朶で、巧みに掩い隠したこの罠は、まことに、敵の侵入に備える絶好の威嚇の武器である。

——これは、ほかにも、たくさん、仕掛けてあるに相違ない。

主馬之介は、見わたして、慄然とした。

この鉄製の顎からのぞいた、長い鋭い牙に、がっと噛まれたならば、肉は裂け骨は砕けてしまう。噛まれる箇所がわるければ、そのまま絶命する。

主馬之介は、奇蹟のごとく、幾十日も病み臥さねばならぬ災厄を、あやうく免れたわけであった。

焼け棒をひろって、用心ぶかく、地面を探りつつ、主馬之介は、惨憺たる廃墟を、進んで行った。

そこここに、太刀や槍が、折れて、ころがっていた。

——わが館は、どのあたりであったろう？

とある斜面に立ちどまって、視線をまわしたおり、またしても、焼け棒にふれて、罠が、唸りをあげて、はねあがった。

主馬之介は、城郭内全体が、罠でうずまっているような気がした。

本丸が、そこであった、と見てとって、登りかけて、三度び、主馬之介は、罠の攻撃を躱して、



ぞっと身顫いしなければならなかった。

見わたしたところ、人間が通れるべき箇処は、悉く、その仕掛けがしてあるようであった。

——父は、どこに匿れているのか？

これは、一番高い本丸跡に立たなければ、見当がつけ難かった。

主馬之介は、さらに長い棒をひろいとると、細心の注意をはらって、行手の障碍物をはね除けつつ、そこへ登って行った。

やがて、頂上に辿りついた主馬之介は、赤い夕陽をあびた荒寥たる焼跡を見わたして、ほっと、深い溜息をもらした。

この時、ふと、どこからか、地を打つ物音がひびくのを、きいた。

頭をまわした主馬之介は、二の丸の館があったとおぼしい地点に、ひとつの人影を見出した。鍬をふるって、土を掘り上げているのであった。

——女だ！

主馬之介は、眉をひそめたが、すぐに合点した。

その人影の背後に、焼けのこった唯一の建物が在った。

——そうか、あの渡櫓に、父は、下婢を使って、ひそんでいるのだな。

主馬之介が、跫音をしのばせて、そこへ近づいた時、穴は、三尺深くも掘りさげられていた。かなり大きな穴であった。

主馬之介の目には、見おぼえのない顔であった。

主馬之介をおどろかせたのは、二十歳にも満たぬ娘が、逞しい力を持っていることであった。

野性——ということばが、ぴったりとしていた。夢中で、鍬をふっているうちに、まとうた布子の前がはだけて、ぷっくりとふくらんだ乳房があらわになり、熟した白桃のように色づいて、せわしい息づかいをしめしていた。

上気した顔は、いちめん汗になり、ときどき、手の甲で、目蓋へ流れて来るのをぬぐっては、鍬をうち振りつづけるのであったが、ひとつの仕事に熱中した双眸は、妖しいまでにきらきらと輝いて、美しいのであった。

ざくっと、打ち込んで、かきあげる土の量は、たっぷりと豊富で、その正確な力の均衡をしめす動作は、見ていて気持がよかった。

そうして……彼女は、ひくく、鄙歌を口ずさんでいた。よく透る、佳い声であった。主馬之介には、意味はよくくみとれなかったが、木樵歌のようだった。

巨樹へ斧を打ち込むのと、地へ鍬を振り下すのと、調子が同じなので、自ずと、その歌が口にのぼったものであろう。

「おい——」

主馬之介が、声をかけるや、瞬間、娘は、小鹿のように跳びあがって、ぱっと向きなおると、鍬を武器にして、身構えた。

黒瞳が、炎を放つように、敵意をみなぎらせた。

主馬之介は、顔をそむけたくなった。



殆ど半裸の恰好は、当人自身意識していないだけに、かえって、強烈ななまなましい印象を与えるものだった。

「誰だい、あんたは——？」

噛みつくように、娘は、問うた。

いたるところへ仕掛けた罠を突破して来た見知らぬこの男の運のよさを、あきれ、訝っている表情を、敵意の色の中に泛べていた。

「前をかくせ！」

主馬之介は、まず、そう命じた。

娘は、はっと気がついて、大急ぎで、きものをかき合せた。

主馬之介が、そう命じたことは、娘の敵意を薄れさせる効果があった。

娘は、この男が、害意を抱いて来た者ではない、と直感して、声音をおだやかなものにすると、

「こんな焼跡に、なんの御用なんです？」

と、糺した。

主馬之介は、黙っていた。

「ここは、旅のおひとの入って来るところじゃありません。はやく、出て行って下さい。……あんたは、ようも、罠に噛まれなかったものじゃ。……まるで、嘘みたいじゃ。……通って来た道すじをまちがえずに、足もとを用心し乍ら、去んで下さい」

しかし、主馬之介は、なお無言をまもって、陰欝な視線を、渡櫓へ移して、据えつけた。

娘は、男の様子に、ちょっと途方にくれて、当惑の目を地面におとすと、額や頬にみだれかかった黒髪を、かきあげた。

それから、もう一度忠告しようと、顔を擡げたとたん、男の眼光に、射られた。

「伊能盛政は、あの中にいるのか？」

冷たい語気で、詰問する男に対して、娘は、たちまち、最初に顔を合せた刹那と同じ敵意を、全身にあふらせた。

「なにしに来たんだ、あんたは――？」

再び、鍬を構えて、睨みつけた。

主馬之介は、とりあわずに、渡櫓へむかって、つと、一歩ふみ出した。

一瞬――。

娘は、ぱっと奔って、主馬之介の前をさえぎった。

目をいからせ、歯をくいしばり、肩を喘がせて、通すまいと、必死の気勢をしめした。

「どけ！」

「どかぬ！　どくもんか！」

険しい対峙が、数秒間つづいた。

と――。

娘の双眸が、不意に、大きく瞠かれて、別の色を滲ませた。

ひとつの直感が来て、その直感を疑い、そして、たしかめる咄嗟な心の動きが、その表情にし



めされた。

それから……娘は、なんとも名状しがたい困惑の面持で、主馬之介を、凝視しつづけていたが、

「あっ！」

と、悲鳴にちかい叫びを放つと、べたっと、地べたへ坐った。

「……若さま！」

わななく唇から、もらされたのは、それだった。

そう呼ぶことで、いまこそ、はっきりと、夢のように期待していたことが現実となった歓喜を湧きあがらせた娘は、しばらく、両手をつかえてひれ伏すと、どっと哭き出した。

主馬之介は、しばらく、そこに彳んだなり、髪も頸も肩も背中もうち顫わせつづける若い下婢を、見下していなければならなかった。

娘は、嗚咽しつつ、きれぎれに、

「……若さま……若さまが……おもどりに、なった……若さまが――」

と、譫言のように、口走っていた。

そのうちに、なかば無意識の動作で、地べたをいざって、この現実が、決して、夢でないことをたしかめるように、両手をさしのべて、主馬之介の足に、さわろうとした。

主馬之介は、小犬のような、その卑屈な振舞いに、微かな嫌悪をおぼえて、一歩さがると、

「おい、伊能盛政のところへ、案内しろ」

と、命じた。

のろのろと顔をあげた娘は、悲しげに、まばたきして、
「お、お殿様は……」
と、云いかけて、のどがつまって、絶句した。
主馬之介は、はっとなって、
「伊能盛政が、どうしたというのだ？」
と、鋭く、訊ねた。
「お殿様は……お、お亡くなりに、なりました！」
「なにっ？ 亡くなった?!」
主馬之介は、足下が崩れて、ずうんと、五体が、地底へ落ちるような気持をおぼえた。
「は、はい、お亡くなりになって……、わたしは、お、おとむらい申上げようと、思って……、そこへ、穴を、掘って居りましたのです」
娘は、そう告げて、両手で顔を掩うと、さらに烈しく哭きむせびはじめた。
主馬之介は、首をまわし、その穴を見やった。
赤い夕陽が、ななめに、その中へ、降りそそいでいた。束の間の明るさの中で、荒城は、静かであった。



# 輪廻

## 一

主馬之介は、渡櫓にむかって、しずかに、歩き出した。
手の甲で泪をぬぐって、そのあとに跟いて行きかけた朝路が、
「あ――そこに、罠がございます」
と、注意した。
焼けこげた材木と瓦礫が、ここにも、積みかさねてあり、これをふみ越えなければ、渡櫓の入口に達しられなかった。
主馬之介は、立ちどまった。
朝路は、大急ぎで、鍬をふるって、罠を撥き出した。それは、わずか、五間あまりの距離に、三個所も仕掛けてあった。
のみならず――。
朝路は、入口で、蹲ると、両手で、せっせと土を掘りかえしはじめた。
「どうした？」

主馬之介が、問うと、朝路は、手をやすめずに、
「火薬を埋めてあるのでございます」
と、こたえた。
主馬之介は、この野性の娘のおそろしく周到な防備ぶりに舌をまいた。
朝路は、黒い筒を掘り出すと、それを、思いきり遠方へ抛った。筒は、檜の幹に当って、凄じい音をたてて、破裂した。
朝路は、赤い斜陽の中に、濛と舞いあがる白煙を見やって、にっこりすると、その笑顔を、主馬之介の方へまわしたが、陰鬱な眼眸にぶっつかると、あわてて、その場へ跪いて、頭を下げた。
主馬之介は、内部へ入って、
「上か？」
と、指さした。
「はい」
「もう、ほかに危険な仕掛けはないか？」
「ございませぬ。……お殿様だけが、おやすみでございます」
そのこたえをきいて、主馬之介は、背すじに、微かな悪寒をつたわせた。
階段をのぼりきると、屍骸の臭いが、主馬之介を襲った。
武者窓から、束の間の燦きをもつ光箭がしのび入った仄暗い上階の真中に、鎧櫃が据えられて



あった。その前に、箸をさした飯盛りの茶碗と、香煙をたちのぼらせている香炉が、供えてあった。
主馬之介は、ゆっくりと近よって、蓋をひらいた。
烈しい死臭が、むっと、鼻孔を衝き、主馬之介は、息をつめた。
焼け爛れた、無慚な顔が、やや仰向いて、残照にさらされた。
落窪んだまなこと、尖った鼻は、主馬之介の記憶にあるものだったが、そのほかの部分は、傲岸なりし城主の俤を全くとどめてはいなかった。ひとまわり小さくなった面貌は、老衰の果てに逝ったような、哀れな、淋しい相を泛べていた。殊に、焼けちぢれた灰色の髯の下の口は、なかばひらいて、いま漸く、孤独な安らぎを得て、ほっと溜息をもらしているがごとくであった。
——これが、伊能盛政か！
主馬之介は、凝然として、まばたきもせず、その貌を瞶めつづけた。
——その子であるおれさえが、斬らねばならぬと悪んだ……伊能盛政が、この人間なのか！
妻を殺し、子に去られ、刎頸の交の仲たる石田三成を裏切り、そして、ついに、家臣一統の謀叛を受けて、自ら居城に火をはなって焼きはらった人物の屍骸としては、これは、あまりにも、みすぼらしいのであった。
死して猶、その形相に、武将たる不屈の誇りを漲らせているのであったならば、主馬之介は、かえって、気持が落着いたであろう。
老いさらばえた木樵か農夫のように、惨めな、侘しい翳を刷いている死顔は、堪え難い苦痛を、主馬之介に与えた。

——父上！　貴方も、不幸な御仁でした！……わたしが、帰って来て、貴方をまもって、そむいた家臣たちと、たたかうべきでした。

心のうちで、そう云いかけると、主馬之介は、ぐっと、唇をひきむすんだ。

泪があふれて、頬をつたった。

階段ぎわに蹲っていた朝路は、主馬之介の泪をみとめて、唇をわななかせた。

「わ、わ、若様！」

のどをしぼるように呼びかけると、主馬之介は、顔をそ向けて、

「下に降りて居れ！」

と、鋭く、命じた。

## 二

朝路が、跫音をしのばせて、階下へ去ると、主馬之介は、櫃の蓋をしめて、あらためて、あたりを見まわした。

朝路が、各処からひろいあつめて来たのであろう、焼けのこった雑多な品物が、ならべてあった。素襖だとか、指物だとか、鐙だとか、面具だとか、征矢の束だとか——もはや、なんの役にもたたないしろものばかりだった。

ただ、一方の壁の武具棚には、数梃の鉄砲と、幾本かの長槍が、ずらりとならべてあった。これは、もともと、この渡櫓に備えつけてあったのである。



武者窓の下部には、一枚の絵図面が貼ってあった。それには、罠が仕掛けたしるしが、無数の個所に、記されてあった。

主馬之介は、暗然となった。

廃墟となったおのが居城に、けもの罠にまもられて、焼け爛れて死んで行った父は、もう充分に天罰を受けたのではなかったか！　まさしく、竹中内蔵之介の忠告通りであった。

——これは、追いつめられた猛獣よりも、もっと悲惨な、むごたらしい最期だ！

主馬之介は、呟きすてて、階段を降りて行った。

すでに、もう、残照は消えて、くろぐろと、闇が這っていた。

主馬之介は、心をほかにとられていたので、階段下に蹲っていた朝路のからだに、ぶっつかった。

朝路は、小さな悲鳴をあげて、跳び退いた。

主馬之介は、闇を透かして、朝路を、じっと見据えた。

「この城に生き残っている者は、ほかに幾人いる？」

「わたし一人だけでございます」

「お前ひとり？　主君側についてたたかった者たちは、のこらず討死したというのか？」

「はい、若様」

「では、お前が、伊能盛政の臨終を見とったのか？」

「はい、そうでございます」

朝路は、ごくっと生唾をのみ込んでから、お殿様の遺言を伝えなければならない、と口をひらいた。しかし、咄嗟に、どう云っていいか、わからなかった。

そして、言葉を出す前に、主馬之介から、つづけて質問を受けていた。

「お前は、なぜ、城を去らぬのだ？」

「若様――」

「若様は止せ！　いまのわたしは、伊能信也ではない。御堂主馬之介という者だ」

「は、はい、若――い、いえ、お殿様」

「殿様ではない。ただの牢人者だ。そう思え――よいな！」

「はい、若様」

「ばか！　若様ではないのだ！」

主馬之介の叱咤に、朝路は、顫えあがった。しかし、「灯を持って来い」と命じられて、大急ぎで、その用意をし乍ら、主馬之介の云った意味がわかるや、ひとり、うれしそうに、「ああ……」と、熱い息をついた。

朝路が、燭台を持って階段をのぼって行くと、上階にひきかえした主馬之介は、武者窓のところに立って、暮れはてた廃墟へ、目をはなっていた。

やおら、向きなおった主馬之介は、さっきの問いをくりかえした。

「お前は、どうして、ここにとどまって居るのだ？」

「どうして、というて……」



朝路は、あかい灯を受けた顔に、困惑の色を滲ませた。

「お前一人、のこっていることはないではないか」

「若様！」

思わず、禁じられたその呼びかたをして、朝路は、きらきらと眸子を光らせた。

「お殿様を……身うごきもおできにならなかったお殿様を、見すてて、わたしが、どこへ行くことが、できたのでございますか？……わたしだけが、おそばに、のこっていたのでございますよ！……みんな、みんな、に、にげてしまったのでございますよ！」

主馬之介は、泪をあふれ出させて烈しく抗議する下婢を、瞶め返して、ふかい感動をおぼえた。

しかし、それを表情にも、言葉にも出さなかった。

朝路は、じぶんの昂奮に、はっと気づいて、俯向くと、くすんとすすりあげた。

「わたしは、孤児でございます。帰る家がございませぬ。……こ、このお城が、わたしの家でございました」

そう云った。

かすかな沈黙があってから、主馬之介は、しずかな口調で促した。

「石田三成の軍勢が、ここを通った頃からのことを、お前の知っているかぎり、くわしく話せ」

「はい」

朝路は、記憶力をけんめいにしぼって、語りはじめた。

主馬之介は、相槌ひとつ打たずに、黙々として、耳をかたむけた。

三

朝路の話が終ってからも、しばらくのあいだ、主馬之介は、沈思をつづけた。
朝路は、いまが、お殿様の遺言をお伝えする時だ、と決心した。
しかし、またもや、主馬之介の問いが、それをさえぎった。
「焼けのこったのは、ここにある物だけか？」
「いいえ、御本丸の地下室に、まだ、いろいろと残って居ります。……だけど、喰べものは、何も、ございません。これから、村へ行って、わけてもらって参ります。夜でないと、出て行けませんので――」
「どうして、夜でないと出て行けないのだ？」
「村の衆も、お殿様を、うらんで居ります。お殿様が、わるいから、こんなことになったのだ、といって――」
「……………」
「だから、お殿様にお供えするものなど、わけてくれませぬ。お寺へ行っておたのみ申しても、お線香も下さらないのでございます」
「しかし、こうして供えているではないか」
主馬之介は、櫃の前を指さした。
「盗んで来たのか？」



すると、朝路は、それを為したじぶんをほめてもらいたげに、はっきりと頷いてみせた。
主馬之介は、その無知を叱る気にはならなかった。
「お前は、歓喜寺に、葬らせて欲しいとたのんではみたのだな？」
「はい、ご住職様にお願い申上げました。……けど、どんなにお願い申上げても……」
主馬之介は、肚裡で、呻いた。
――あのお人までが！
歓喜寺は、伊能家の菩提所であった。また住職は、主馬之介に学問を教えてくれた恩師であった。
朝路は、主馬之介の暗く沈んだ顔を見戍り乍ら、ちょっと得意そうに、
「……だから、わたしは、お線香を、こっそり盗ってやったのでございます。見つけられて、村の衆から追いかけられましたが、わたしは、誰よりも足が早うございます。捕ったりなど、いたしませんです。石をぶっつけられましたけど、竹籠を頭にかぶって、逃げてやりました。……いい気味でございました」
「……………」
「石は、どんどん飛んで来ました。ひとつだけ、ここに、ほら、当りましたです」
朝路は、いきなり、布子の裾をめくって、膝の上をしめした。
主馬之介は、視線を逸らして、
「お前は、ほかに、着物を持っていないのか？」
と、訊ねた。

朝路は、とまどって、かぶりをふった。
「ございません」
「本丸の地下室へ行って、捜して来い。衣裳を入れた長持が一棹(ひとさお)や二棹は、あるだろう」
「それは、いけませんです！」
朝路は、大きく目をひらいて、手をふった。
「あれは、わたしのような、いやしい者がきるきものではございません。お殿様のおそばにおつかえするおかたが……」
「誰がいるというのだ、ここに——」
主馬之介は、苛立(いらだ)たしげに、どなりつけた。
「おれとお前のほかに、住んでいる者がいるか！」
「若様！」
「若様ではない！　二度と、若様と申したら、城から追い出すぞ！」
「は、はいっ——」
「きものをきかえて来い」
朝路は、黙って、階段を降りて行った。
主馬之介は、鎧櫃に、目をあてて、
——これを、明日(あした)は、歓喜寺に埋葬しなければならぬ！
と、ほぞをかためた。



やがて、階段に跫音がしたので、主馬之介が目をやると、紅梅模様の絞染(しぼりぞめ)の小袖をまとった朝路が、おずおずと、あらわれた。
髪もくしけずり、顔も洗って来たのであろう、別人のように、ういういしく、美しくなっていて、一瞬、主馬之介に、微かな狼狽をおぼえさせた。
綺麗なきものを、生れてはじめてまとった朝路は、同時にまた、生れてはじめて、処女の羞恥というものをさとったように、からだぜんたいに、それをしめしていた。
侍女がそうするように、主馬之介のためにえらんで来た衣服を、両手にささげて、そろそろと進んで来ると、ぎこちなく膝を折って、平伏した。
「侍女の真似までせよとは云わぬ」
主馬之介は、冷やかに云いすてた。
朝路は、痛いところを突かれた挙措(きょそ)で、階段口へ、こそこそとひきさがった。
それから、
「あの……これから、村へ、参りましても、よろしゅうございますか？」
と、乞うた。
「盗みは止すがいい」
「でも、もう、ここには、喰べものは、何もございませんです。……若様——いえ、貴方様は、朝から、山道を歩きつづけてお出でだったのでございましょう、だから、わたしは、そう思いまして——」

「…………」
「貴方様は、とてもお疲れで……おなかが、空いておいでではなかろうかと――」
「その心配は要らぬ」
拒絶し乍ら、主馬之介は、今朝から何も喰べていないことに、気がついた。

## 四

夜明け――。
武者窓から流れ込む霧の冷たさに肌が粟立って、主馬之介は、目を覚した。
屍骸を容れた鎧櫃は、同じ場所に、しいんと、据えられていた。
死臭になれた主馬之介は、半焼けの布団をはねて、起き上ると、ひとつふかく呼吸をして、今日為さねばならぬ仕事を考えた。
――仏は、埋葬されるのを、こうして、待っている！
主馬之介は、立ちあがると、昨夜朝路が持参してくれた衣服をつけて、剣を腰におびた。
主馬之介を愕かせたのは、階段下の地べたに、朝路が、一枚の筵(むしろ)にくるまって寝ていたことだった。
跫音に、敏感に、ぱっと目をさました朝路は、撥かれたようにつッ立つと、
「申しわけございませぬ。寝坊いたしました」
と、詫びた。



「まだ、夜明けだ」
主馬之介は、そう云ってやってから、
「ほかに寝る場所はないのか？」
「ここが、わたしのいるところでございます」
朝路は、なんの不満もない口調でこたえた。
「ずうっと、ここに寝ていたというのか？」
「はい。そうでございます」
主馬之介は、何か云いかけたが、思いかえして、外へ歩き出した。
「どちらへ、お出(いで)になるのでございますか？」
「歓喜寺へ行く」
「御要心なさらぬといけませぬ！」
朝路は、叫ぶように云った。
「村の衆は、ほんとに、お殿様をうらんで居りますです！　津汲からも、ときどき、御家中の人たちが、城へふみ込もうとして、登って参ります。……若様ということが知れますと、大変なさわぎになります」
「伊能盛政が受けた憎しみと恨みは、このわたしが、引継ぐことになるのだ」
主馬之介は、きっぱりと云いはなって、ずんずん歩を速めた。
「主馬之介様っ！」

朝路が、語気を変えて、呼んだ。
「お殿様の御遺言をおつたえいたします！」
振りかえった主馬之介の厳しい面持に、朝路は、極度の緊張で、棒のように全身をかたいものにすると、ひしと目蓋をとじた。
「お殿様は、こう仰言いました。……信也よ、わしが……お前の、母を憎み、お前を、愛してやれなかったわけは……お前が、わしの子では、なかった……」
「なにっ?!」
主馬之介の鋭い声が、きりつけるように朝路のおもてを搏った。
朝路は、目蓋を、さらに強く、ぎゅっとふさいだ。すぐには、動悸が烈しくて、次の言葉が出なかった。
「つづけろ！」
「はい。……二十余年前、わしは、新妻である、お前の、母を、ともなって、石田三成の、しゅうせんにより、羽柴筑前たりし、太閤秀吉のもとへ、挨拶に、行った。……秀吉の目に、美しかった、わしの妻のすがたが、映った。……妻は、むりやりに……」
「よい。わかった」
ぴしりと、とめられると、朝路は、くらくらと眩暈をおぼえた。
数秒が過ぎて、朝路が、そうっと目をひらいてみると、主馬之介は、こちらに背中を向けていた。



その静止の立像は、朝路の眸子に、ふしぎなけだかさを湛えたものに映った。
主馬之介が、ゆっくりと一歩ふみ出すと、朝路は、はっと気づいて、そのわきをすり抜けて、前へ出た。
罠の個所を避けて通って行かなければならなかったのである。
大手門をくぐって出た時、はじめて、朝路は、主馬之介と、目を交した。
主馬之介の顔は、やや蒼く冴えているだけで、なんの感情も滲ませてはいなかった。
「わたしが、戻って来るまでに、罠を全部取除けておけ」
それだけを命じた。
朝路は、跳ね橋を渡って行く後姿を見送っていたが、急に、肩を喘がせると、べったりと、そこへ坐って、両手をあわせた。
「若様のお母上様！……どうぞ、若様のおからだをおまもり下さいませ！」
その祈り声が、耳にとどいたが、主馬之介は、振りかえろうとはしなかった。
——そうだったのか！
——おれは、秀吉の子だったのか！
この事実に、胸の顫える感動はなかった。いくども、おのれに呟いてみるのだが、それは、この五体の中のいのちには、なんのひびきも与えぬ、いっそ遠い風音のように、呟くそばから消えて行く……。
太閤秀吉が、いかに巍然たる英傑であろうとも、いまの自分にとっては、なんのかかわりもな

い存在だった。

そのかわり、母を犯した男に対する憎しみは、胸底に湧いていた。左様、それは、太閤の位を持った英傑ではなかった。ただの「男」であった。

犯された母と、その良人であった父の苦しみが、堪え難い悲しさで、想いやられる。

父が母を憎み、そして、その子の自分を憎んだのは、当然だったのだ。憎まれた母も、憎んだ父も、ともに、この世の地獄の苦しみをあじわったのだ。

――おれは、やはり、伊能盛政の子なのだ！

父が、石田三成を裏切った真因が、明らかになったいま、主馬之介もまた、はっきりとその進むべき途を見さだめることができたといえる。

――伊能盛政の子だからこそ、おれは、父の汚名を雪いでやらねばならないのだ！　父は、美濃の国が欲しさに、石田三成を裏切ったのではない、という釈明を、天下に公表してやれるのは、このおれしかいないではないか！

秀吉の子と知り乍ら、わが子として認め、育てることに堪えた父に、主馬之介は、無限の同情をおぼえずにはいられなかった。

父の裏切り行為をきいた時、その卑劣をあがなわしめるために、子の手によって斬ろうと決意したのだったが、それは日坂城主たる尊厳をも保たせてやりたいという心づかいでもあったのだ。その心づかいには、いまにして、神の摂理が働いていたと、思いあたるのだ。

主馬之介は、冷たい夜露に濡れた草をふんで、人家の聚落へむかって、下って行った。



## 五

その頃。――

敗軍の将石田三成は、伊吹山中――伊香郡古橋村法華三殊院裏の岩窟において、田中吉政の臣田中長吉の手に捕えられて、大津にある徳川家康の本陣へ、護送されて来ていた。

岩窟内にひそんでいた三成は、泄（下痢症）を患っていて、まったく変貌し果てて、行動の自由を喪っていた。

田中吉政は、三成とは幼い頃から親しく、三成によって秀吉に執りなしてもらったこともある間柄であったので、俘囚のとりあつかいをせず、鄭重に、貴族の乗物にのせて来たのであった。

しかし、大津の本陣にいたるや、三成は、当然のこと乍ら、俘囚として、門外の地べたへ、筵を敷いて、坐らされた。

この時、福島正則が、馬で打通りかかって、はったと三成を睨みつけて、

「治部っ！　貴様、無益な乱を起して、そのざまは、なんぞや！」

と、叱咤した。

三成は、毅然として、首を擡げると、

「わしは、おぬしを生捕って、わしの本陣の門前に、こういう風に、ひき据えてやる積りであったが……少々生命がのびたようだな。せいぜい内府の髭の塵をはらうがよい。長つづきはすまいが……」

と、云いかえした。

つぎに――。

黒田長政が、さしかかったが、彼は、黙って馬を降りると、三成のよごれた衣服の上へ、自分の羽織を脱いで、きせかけてやった。

このたびの決戦で、西軍を裏切って、家康に天下を手中せしめた金吾中納言小早川秀秋は、三成の到着をきくや、心がおちつかず、そっと、三成の様子を見に出ようとした。

「無益なことだ。やめられい」

と、細川忠興に制止せられると、秀秋は、かえって、後日になって三成に怯えたと噂されることをおそれる心が起り、座を立って本陣を出ると、ずかずかと、三成の面前に近寄った。

すると、三成は、いかにも、けがらわしい者が来たように、視線を、つまさきから、ずうっと移して行き、秀秋のこわばった形相に、ぴたりとあてるや、しずかな声音で、

「犬畜生を人間とまちがえた罰に、ごらんのていたらくでござる。お嗤い下されい」

と、云った。

秀秋は、ぐっと、咽喉がつまり、声が出なかった。

やがて、三成は、本陣へ入れられて、家康の前に据えられた。この時、いましめは、解かれていた。

家康は、平常通りの、きわめて穏かな表情で、

「治部殿。女をかしらに頂くものではないの」



と、云った。

秀吉糟糠の妻たる北政所と愛妾淀君の反目が、大阪城を二派にわかれさせて、作戦に破綻を生じせしめた、ともいえたのである。三成を裏切った小早川秀秋は、北政所の兄木下家定の第五子で、北政所に養われた人物であった。三成は、淀君側だった。

三成は、しかし、家康の言葉に、なんともこたえずに、ただ、ひとごとのように、

「これで、どうやら、天下も静かになると存ずる。内府殿ならば、百年和平の計を樹立されるであろう」

と、云った。

家康は、しばらく、無言で、じっと、三成を眺めた。

――惜しい才幹だ。詐偽奸曲の佞人と、悪まれているが、どうして、これ程の人物は、もはや、当代にほかに見当らぬ。敗れたのは、この男に運がなく、わしにあった、という偶然にすぎぬ。

その感慨が、家康の内心のものだった。

秀吉が逝った後、家康にとって、怕い人物は、ただ一人、この三成だけであった。

三成は、才幹ありあまるが故に、諸将から非常に憎まれていたが、ひとたび軍を起せば、諸将を圧する凄じい威力を発揮するに相違ないと、家康は、見ぬいていた。

秀吉から豊臣家の後事を託されていた前田利家が、慶長四年春に、世を去るや、いわゆる七将――加藤清正、黒田長政、細川忠興、脇坂安治、加藤嘉明、福島正則、浅野幸長らは、三成を討とうとした。ところが、これを慰撫して、三成の生命をまもってやったのは、家康であった。

ここで、三成をたすけておけば、三成が、自分を討とうとはかった時、諸将は、その忘恩を憤って、自分に味方してくれるであろう。もし、三成を殺させてしまえば、七将は、憎悪する敵をうしなってしまい、各個に我を立てはじめて、自分が豊臣家をほろぼす際に、こぞって味方についてはくれまい。

家康は、老獪にも、そう思案をめぐらしたのであった。

はたして——。

このたび、三成が軍を起すや、七将は、のこらず、東軍に加ってくれたのである。

家康は、ついに、三成に、勝った。

「治部殿。ひとつ、うかがっておきたいことがあるが……」

家康が、云うや、三成は、しずかに、目をかえして、

「なんなりとも——」

「おことは、金吾中納言の違反は、予感されて居ったのではあるまいかな？」

「いかにも——」

三成は、頷いてみせた。

「だからこそ、美濃路から、一万五千を潜行せしめて、東軍の背後を衝く作戦をとり申した。もし、あの奇襲が成功していたならば、秀秋は、松尾山を一歩も動かなかったと存ずる」

「訊ねたいのは、あの奇襲が瓦解したについてじゃ。日坂の伊能盛政は、おことと、長年の親交があった筈ではないか」



「あり申した」

「盛政が、よもや、裏切ろうとは、おことも、考えおよばなかったに相違ない。わしも、違反を申出られて、おどろいたものであった。……なぜ、おことは、盛政に裏切られたのであろうか？」

「…………」

三成は、ちょっと、こたえなかった。

俘囚となって、なお水のような冷静沈着の態度をみじんも崩さなかった三成が、はじめて、この時、微かな当惑を、小波のようにおもてに動かしたのであった。

「思いあたるふしがあれば、きかされい。わしは、こん後の経略にあたって、戒めといたしたい」

「左様——」

三成は、遠くへ目を置いて、

「思いあたるふし、と申せば、ただひとつしかござらぬ」

「…………」

「二十余年前の、太閤の好色が、盛政に、どれだけの打撃を与えたか——そのことでござろうか」

「ふむ——」

家康は、目を光らせた。

「盛政の妻女が、贄にされた？　そうかな？」

「太閤好みの美貌であったのが、不幸でしたな。盛政を太閤に周旋したそれがしの好意が仇となった——その怨みを二十余年間抱きつづけた盛政をして、復讐の機会到来と、北叟笑ませたので

ござろうか。……げに、人の怨みは、おそろしいものでござる」
　三成は、そう云って、微笑してみせた。
「内府殿も、女色をあさるについては、充分に心されるがよい」
「いや、痛いところを衝かれたの」
　家康は、はゝゝ、と笑った。
「ところで、治部殿。お気の毒じゃが、世人への、みせしめに、おことの成敗の場所を、三条河原ときめ申した」
「三条河原？」
　五奉行の随一、佐和山城主たる身が、下人同然にあつかわれるのである。
　流石に、三成は、面色を険しいものに変えた。
が、――すぐ、その憤りを納めて、冷やかに、
「この三成に、永劫の恥辱を与えられるのも、百年和平の計とあらば、やむを得ますまい」
と、承知していた。
　主馬之介が、日坂の荒城へ帰り着いたその日のことだったのである。



# 光ある日

## 一

　動いてやまぬ霧が、千年檜の密林をつつんでいた。
　急傾斜の杣道を下って行った主馬之介は、その白い木立の下にうごめく集団を、透し見た。
　跳ね橋を渡った時、近くの叢から、黒い影がとび出して、一散に駆け下って行ったのをみとめていた主馬之介は、自分の行手をはばむ人壁がつくられることは、覚悟していた。
　ゆっくりとした足どりで、主馬之介は、近づいて行った。
　およそ、四、五十名とかぞえられる群衆が、其処にかたまっていた。それぞれの手に、鍬や鎌が握りしめられていた。いずれの目も、険しく冷たく光っていた。
　そして、彼らの指揮をとる位置に、三、四名の若い士たちが、槍をかまえて、殺気をみなぎらせていた。これは、津汲の磧で、出会った連中にまぎれもなかった。
　――一人とびかかって来る者があれば、たちまち、全員が狂気と化して、殺到して来るに相違ない。
　主馬之介は、そう感じた。

独裁者であった父が、いかに、村人たちを虫けらのごとく扱ったか——その反動が、いま、おそろしい狂暴な憎悪となって燃えあがっているのだ。その凄じい炎をあびるのが、子たる自分の贖いなのだ。

主馬之介は、彼らを威圧する愚をさとって、霧に洗われたしずかな面持で、二間をへだてて、立ちどまった。

「伊能盛政は、すでに、遺骸となって居る」

穏かな口調で、そう云った。

わずかな沈黙ののち、ふいに、

「天罰があたったのじゃ！」

喚き声があがるや、それに和す吸号が、渦をまいた。

主馬之介は、それがしずまるまで、忍耐した。

群衆は、そのうち、主馬之介のあまりにものしずかな態度に、うす気味わるいものをおぼえて、しだいに、口をつぐんで、目だけを依然として光らせた。

主馬之介は、云った。

「死者は、埋葬せねばならぬ」

これに対して、再び、憎悪をこめた罵詈のあらしが吹きまくった。

それがおさまるまでのあいだに、主馬之介は、すこしずつ、右へ寄った。

一瞬——。



主馬之介の右腕が躍って、腰間から、白い閃光を走らせた。

右側に立っていた杉の樹が、音もなく、自分たちのほうへむかって傾いて来るのを、群衆は、見た。

虚空に唸って、横倒しになる生樹が、数十名を、蜘蛛の子のように、左右に散らした。

途は、開いた。

主馬之介は、いつの間にか、白刃をおさめて、何事もなかったかのように、かわらぬ足どりで、歓喜寺の境内に、入って行った。

本堂の回廊上に、白髯を長く垂らした老僧が、粛然として彳んで、主馬之介を迎えた。

距離を遠くに置いて立ちどまった主馬之介は、老僧からもまた、自分が歓迎されて居らぬことを直感した。

——やむを得ぬ！　おれは、やるまでだ！

あらためて、自分に厳しく誓った主馬之介は、ふと、左方の方丈の玄関に動く影に気がついて、眸子をまわした。

あわてて、その影は、内部に消えたが、主馬之介の網膜には、そのすらりとした姿が鮮かに残った。

——千草が、ここに来ている！

その兄頼之助に捕えられた自分のいましめを、切ってくれたのは、千草の愛情であった、と信じている主馬之介は、遽に、鼓動の高鳴りをおぼえた。

その動揺へ水をあびせるように、回廊上から、
「何用じゃ！」
と、威厳をもった詰問が投げつけられた。
主馬之介は、向きなおって、旧師の火のような睥睨を受けた。
「和上。冀くば、てまえを、日坂城主伊能盛政の一子信也としてではなく、焼死した父親の葬儀をいとなみたく参上いたした一牢人として遇しては下さいますまいか」
「それは、無理であろう」
老僧は、白刷毛のような眉を昂然と上げて、冷やかにはねつけた。
「過去久遠の大悲の光は何処不到の処なからん、と申すではありませぬか。仏光をもって、三悪趣を払うて下さるのが、和上のおつとめと存じます。……父父たらずと雖も、子は以て子たらざるを得ませぬ」
「いかにも左様じゃ。人として生れ来って、その終焉にあたって、真如のおんめぐみを享ける喪を欲せざる者はなかろう」
「それならば――」
「待て！　喪は死者に従い、祭は生者に従う。伊能盛政は、すでに、その最期において、城主にふさわしい哀悼を致されて喪を終えて居る」
「なんと申される？」
主馬之介は、眉をひそめた。



老僧は、衣の袖をはらって、右手にかくし持っていた位牌をしめした。
主馬之介は、その戒名を読み、そして、裏面に刻まれた文字を見た。
それには「慶長五年九月十五日寂」とあった。すなわち、関ケ原合戦の日が、盛政の命日とされていた。
主馬之介は、唇を噛んだ。
「よいか。伊能盛政という日坂城主を、わしは、この日を以って葬ってやった。この日以後、城内には、城主に似た亡霊めが棲んで居るときいたが、これを折伏する任務は、わしではない。……わかったか。わしは、亡霊めのために、経は読まぬぞ。この歓喜寺に葬ることは、断じてことわる！」
老僧の言葉に、まちがった点はなかった。まさしく、老僧は、父を葬っていてくれたのだ。卑劣な裏切り者としてではなく、日坂城主として――。
――しかし、城内に、その遺骸が在るのだ。祖廟に永遠の安息を希っているのだ。その資格があるのだ！
主馬之介は、心中で、叫んだ。
そのことを口にほとばしらせ得ない苦痛が、主馬之介の面貌を蒼褪めさせ、歪めた。
父の裏切りの真因を、いま打明けるのは、はばからねばならなかった。あくまで、自分は、日坂城主の一子として、その義務を果さなければならなかった。
主馬之介は、おのれを制して、云った。

「和上のご祈禱は、のぞみませぬ。しかし、子たる者は、父親の遺骸を、葬るべき正しい墓地に葬ってやらねばなりませぬ」
「できるかの？　そなたのうしろで睨んで居る人々を見るがよい。あの憎悪に燃え狂うた形相の群を見るがよい。そなた一人の力で、はねのけて、やりとげることができるかの？」
主馬之介は、こたえず、一揖すると、踵をまわした。
けだものの咆吼に似た喚声が、主馬之介めがけて、うしおのようにおしよせて来た。
主馬之介は、屈せず、しっかりと大地をふんで、突き進んで行った。
——貴様らが、けだものになるのなら、なってみせろ！　おれも、けだものになって、剣を抜くぞ！
主馬之介の悲愴な、殺気をはりつめた孤影は、群衆の手出しを、ゆるさなかった。

## 二

主馬之介は、跳ね橋のところまで戻って来た時、倒れかかった門扉の蔭にうずくまっている女の姿を見出した。
……瞬間、主馬之介の脳裡に、激烈な決意が思い泛んだ。
——よし！
軋る橋板をふんで、渡りついた主馬之介は、
「おい、お前は、足は早いか？」



と、訊ねた。
朝路は、まじまじと、新しい主人を見かえして、
「どれぐらいの早さをおのぞみでございますか？」
と、問いかえした。
主馬之介は、微笑した。この反問は、朝路に、人なみすぐれた健脚がそなわっていることをしめしている。
「伏見まで、明日中に到着してもらいたいのだ。伏見を知って居るか？」
すると、朝路は、にこりともせず、
「今晩のうちに行きつきます」
「今晩のうち？　そんなことができるか？」
「できると思います」
それから半刻後——。
朝路は、竹中内蔵之介に宛てた手紙を懐中にして、荒城をとび出して、風のように日坂道を駆け下って行った。
それと同じ頃合であった。
少年宗太郎は、揖斐の城下はずれの宏壮な屋敷内に、もぐり込んでいた。
少年のものとは思われぬしぶとい忍耐心をもって、一夜を、母屋の床の下にすごした宗太郎は、

捕えられている美尾姫のありかを、召使いたちの私語(しご)や行動によって、かぎつけたのであった。

実は、宗太郎は、城下に入るや、まっすぐに、日坂道(ひさかどう)をめざしたのであったが、その山麓に、新しい木戸が設けられ、十数名の具足いかめしい士たちが警戒しているのをみとめるや、ふと思いたって、美尾姫をすくい出すことにしたのであった。

多次郎という傷ついた忍者が、

「地位も身分もすてて、いのちがけで、主馬之介様をお慕いなされて居(お)る姫様を、是非とも主馬之介様にお救いして頂かねばならん！」

そう云っていたのである。

――ひとつ、おいらが、たすけ出してやろう。

宗太郎は、不敵にも、そう思いたったのである。

――あの姫さまなら、気が強そうだし、利巧そうだから、日坂へうまく登って行ける方法を考えてくれるかも知れねえや。

その美尾姫が、離れ座敷に監禁されていると知った宗太郎は、裏庭の殆ど原始のままの欝蒼(うっそう)たる檜の木立の中を、そうっと忍んで行った。

まず、要心ぶかく、小石をつかんで、たてきられた雨戸へ、抛りつけた。

内部からは、なんの反応もなかった。見はりの者のいない証拠である。

宗太郎は、だいたんに、木賊(とくさ)のしげみをかきわけて、姿をあらわすと、厠(かわや)らしい箇所の下地窓(したじまど)へ、身がるく、とびついた。



仄暗い廊下に忍び入って、跫足消すと、指につばして、障子に穴をあけた。

まさしく、美尾姫は、その座敷にいた。だが、意外にも、縛られてはいなかった。覗く宗太郎の目に、後姿を見せて、ふかく首を垂れて、動かなかった。

宗太郎は、思いきって、障子戸を、ひきあけた。

緩慢なしぐさで、美尾姫は、視線をめぐらした。

とたんに、宗太郎は、別人ではないか、とどきっとした。それくらい、美尾姫の貌(かお)は、やつれはてていた。のみならず、宗太郎にあてた眸子(ひとみ)の色は、痴呆のように、うつろだった。

宗太郎は、とまどいつつ、

「姫さま。おいら、たすけ出しに来たんだぜ」

と、云いかけた。

美尾姫は、ほんのわずかに顔色をうごかしただけで、

「ああ、そなたは……あの折の、こども――」

と、頷いてみせた。

「どうしたんだい？　おいら、姫さまが、おいらのお師匠様に会いたいために、にげ出したんだときいて……それで、たすけて、日坂へ一緒に行こうと思っているんだぜ」

「日坂へ――」

美尾姫は、よわよわしく呟いてから、目を膝へ落した。

宗太郎は、いらいらして、

「いやなのかい、日坂へ行くのは――」
「行きたい。行きたいのです。……でも、もう、わたくしは……」
美尾姫は、微かに、かぶりをふった。
宗太郎は、腹がたって来た。
「おいら、今日、この城下へ来て、調べたんだぜ。おいらのお師匠様は、徳川のさむらいたちからねらわれているんだぜ。見つけられたら、大変なことにならあ。日坂へ行く道は、木戸でふさがれてしまっているんだ。みんな姫さまのせいじゃないか。姫さまが、お師匠様のあとを追いかけたからじゃないか。……姫さまは、徳川家康のおよめになる方なんだってな。だから、大さわぎしているんじゃないか」
非難の語気をむき出したこの言葉は、美尾姫の空虚な脳裡へ、冷たい水をぶちまけるように、はっとわれにかえらせる効果があった。
「そうだ！」
美尾姫は、はじかれたように立ちあがった。
「主馬之介を殺してはならぬ！」
「あたりまえだ。お師匠様が殺されてたまるもんか！」
「わたくしが、救わねばならぬ！」
「日坂へ行くのかい？」
「いいえ、伏見へ行くのじゃ！」



おのが慕情を断つ悲痛な決意で、美尾姫の双眸は、勝気にかがやいた。

三

二日後の午すぎ、津汲の里の伊能家の旧臣たちは、突然、多勢の騎馬武者の出現におどろかされた。
先頭の武者は、紺地に白く五の字を抜いた旌旗をはためかせていた。これは、徳川家の旗本の旌旗であった。
たまたま、新城主たるべき野望を持って、ここへ登って来ていた須藤頼之助が、往還へとび出して、わが名を名乗って、その来訪の目的を尋問した。
奇怪であったのは、騎馬武者たちが、宛然耳を持たぬごとくに、頼之助たちを黙殺したことだった。
いずれの顔も、異様なまでに厳しく緊張の色を滲ませているのは、何かの重大な目的を抱いている証拠であった。
たちまちに、ひづめの音たかく、険路を駆け去るのを、茫然として見送った一同は、一人が、
「もしかすれば、若君の討手ではあるまいか？」
と叫ぶや、――あ、そうだ！　と合点した。
「つづけ！」
頼之助が、喚いて、走り出した。皆は、一斉に、地を蹴った。

道は、ものの三町も登った地点から、さらに急傾斜して、もはや、馬をあがかせることは不可能だったので、頼之助たちは、すぐに、騎馬武者の群に追いつくことが出来た。

頼之助は、殿りの者に、

「おのおの方は、伊能信也を討ちとりに参られたのでござろうか？」

と、問いかけた。

武者は、じろりと、かえり見たが、なんともこたえなかった。

「もし、左様ならば、われらにも、助勢方を命じて頂きたい」

「無用でござる」

武者は、吐きすてるようにこばんだ。

やがて——。

一隊は、惨たる廃墟の前に立った。

跳ね橋上に、主馬之介が、これを迎えていた。

主馬之介の面上には、抑えきれぬ歓喜の色が、溢れていた。

大急ぎで、渡って来るや、

「よく来てくれた！　かたじけない！　お礼の言葉もない！　おぬしたちの厚情は、終生忘れはせぬ！」

喘ぐように、息をはずませて、どんなに感謝してもしきれない真情を、どうあらわしていいのか、もどかしさに苛立つ気色だった。



しかし——。

武者たちは、唖のように返辞をしなかった。木彫の面のように、表情も動かさなかった。

彼らは、曾て、幾多の戦場において生死を俱にした主馬之介の輩下だった。

漆黒の甲冑、母衣をまとった主馬之介の颯爽たる英姿につきしたがって、彼らは、いかに勇猛な戦いぶりをみせたことだったろう。

株瀬川の戦いにおいては、石田三成勢のまっただ中へ、烈風のごとく突入して縦横むじんにかけめぐったものだし、関ケ原の決戦においては、宇喜多秀家の大軍が陣を敷いた天満山へむかって、一団の黒雲と化して殺到して行って、鬼神さながらの血闘をくりひろげたものであった。

その生死の誓いは、全軍中に誇るに足りたといえる。

にも拘らず、いまは、主将を歓喜させつつも、彼らの態度は、氷のように冷たかった。

一人が、つと、一歩出て、沈黙を破った。

「御堂主馬之介殿。われわれは、竹中内蔵之介殿のおすすめにより、貴方様のおまねきに応えて——こうして、参上つかまつりました。われわれは、あまり時刻の猶予がござらぬ。御希望の仕事に、直ちにとりかかりたく存じます」

切口上に、そう云った。

主馬之介は、戦場にあっては、終始、自分にぴったりとより添うて、敵の不意の襲撃にいつでも身代りになろうと気をくばってくれた関根多兵衛というこの男の、あまりの他人行儀なよそよそしさに、胸を衝かれた。

だが、どうして、これに腹を立てることができよう！　部下たちは、来てくれたのだ！

主馬之介は、その誠意に対して、最大の感謝をしなければならなかった。

彼らは、自分たちを見すてて黙って陣屋から消え去った主将が、実は、天下に破廉恥の汚名をさらした日坂城主の一子と知って愕然とし、その裏切り者の父親の屍の埋葬の手だすけをして欲しいとのぞまれているときかされて、おそろしい嫌悪をおぼえたに相違ないのだ。にも拘らず、彼らは、やって来たのだ。

主馬之介は、武者たちを、廃墟の中へ、みちびいた。

二の丸の渡櫓の前に来て、

「ここの上階に、伊能盛政の遺骸がある」

と、教えるや、関根多兵衛は、それにこたえるかわりに、仲間にむかって、

「おい、そこいらから手ごろの板をひろいあつめて、棺を作ってくれい」

と、申しわたした。

皆は、すぐに、四方にわかれて、物色しはじめた。

主馬之介には、何もすることがなかった。ただ、そこに佇んで、待っているよりほかはなかった。

ふと——。

背後に、荒い息づかいをきいて、振りかえった主馬之介は、地べたにべったりと坐っている朝路を見出した。



黒髪を、ぼうぼうと乱れるにまかせ、胸も膝もあらわにむき出して、犬のように口をあけて、せわしく、熱い息をはいていた。たった一人、走りづめに走って、戻りついたのである。

「よくやった！」

主馬之介は、そう云ってやりたかった。

だが、あまりにも野性のままなその姿が、主馬之介に、一種の嫌悪感をおぼえさせた。

「どうした？」

「は、はいっ！」

朝路は、手の甲で、額の汗をぬぐった。すると、かえって、泥が、べったりとくっついてしまった。

「前をかくせ。お前は、女ではないか」

「はいっ！」

朝路は、あわてて、立ちあがって、身づくろいした。

視線をそらした主馬之介は、必死の使いをはたしてくれた者に対して自分の言葉があまりに冷淡であることに忸怩たるものをおぼえた。

「本丸の地下室へ行って、別の着物にきかえて来い」

「若様——いえ、お殿様！」

「早くしろ」

「わたしは、いやしい身分でございます。そ、そんな……、あそこには、もう、新しい着物しか、

ございませんです。お姫様か奥女中どののお召しになる着物しか――」
「おれの命令通りしろ！　命令にしたがわなければ、追い出すぞ！」
主馬之介は、呶鳴りつけた。
朝路は、小鹿のように、ぴょんと跳びあがって、走り去った。
――なんというあわれな純情をもった娘なのだろう！　この飢餓と寂寥と憎悪しかのこされていない廃墟だけが、自身の生きる場所だと思い込んでいる。すでに、それをまとうべき女たちは一人もいなくなったのに、下婢である自分は、手をつけてはならないとかたく信じている。
主馬之介は、胸の底に、微かな疼きをおぼえた。
飼い主が移住して行く時、一緒について遠くに行くよりも、その屋敷の荒れた屋根の下で、飢え死をえらぶ猫の話を、主馬之介は、思い出さずにはいられなかった。

四

棺ができあがり、屍臭をはなつ遺骸は、その中に納められた。
「誰と誰が、担ぐ？」
関根多兵衛は、一同を見わたした。一人も、こたえなかった。
「よし。籤を引こう。当った者は観念せい」
それから、本丸の地下室から、伊能家の旌旗がさがし出された。
「おい、そこの娘――」



多兵衛は、渡櫓の外の片隅に蹲っている朝路をさしまねいた。
主馬之介は、多兵衛が朝路に、旌旗を手渡すのを見て、
「それは――？」
と、咎めた。
多兵衛は、冷やかに、
「葬列の先導をうけたまわるのは、この娘を措いてほかにはござらぬ。……この娘は、伏見城の大手門前に、丑の刻（午前三時）に、半死半生になって倒れて居りました。竹中内蔵之介殿は、引見されるや、日坂城にただ一人ふみとどまって、主君をまもった娘に相違ない、とおみとめでござった。……ここを、辰の刻（午前九時）に発って、徒歩で駆けぬいて、伏見に、丑の刻に着くなどとは、人間業ではござらぬ」
主馬之介は、こたえる言葉もなかった。
朝路は、自分に与えられた大きな栄誉に動転してしまい、全身をわななかせ、双眸に泪をいっぱいためて、旌旗の棹を、握りしめ乍ら、主馬之介へ、ゆるしを乞う怯ず怯ずとしたまなざしをすがらせた。
主馬之介は、頷いてやった。
葬列は、粛々として、進みはじめた。
陽はすでに、西に傾き、葬列の影は、長く地を這った。武者たちのかざした槍は、いずれも掩いをはらわれ、陽光を撥ねて、眩しく煌めいた。

跳ね橋の袂には、頼之助ら十数名の士に、村人の大半が勢揃いして、ひしめき合っていた。
「来たぞ！　来たっ！」
どっと、波のようなどよめきが、青空に噴きあがった。
意外な——全く、意外な光景が、一同を、驚愕させ、憤激させた。
頼之助たちは、武者隊を主馬之介が歓喜して迎えるのを目撃して、——もしや？　と疑い、——まさか？　とうち消し、烈しく焦躁していたのだが、その予感の方が適中したために、いずれも、蒼ざめてしまった。
葬列は、跳ね橋を渡って来た。
「朝路めが、先頭じゃ！」
「おのれが……くそっ！」
村人たちは、奇怪なものでも見るように、食い入るように、朝路を睨んだ。
葬列は、全く群衆を無視して、突き進んで来た。
一間に迫るや、前列に出ていた子供たちが、どっと後へ引退った。
葬列の前進速度は、すこしもかわらなかった。朝路は、石のように顔をこわばらせて、群衆の頭上を越えた空間へ、燃えるような眸子を放っていた。
ほんのわずかに、狭い通路が開くかとみえたが、後方につめかけた群衆は、肩と肩をくっつけ合って、死んでも通すものか、という敵意をかためていた。
と——。



突然、武者隊は、一斉に、槍を、さっと横たえて、百足の足のように、不気味な穂先を、群衆にむかって、擬した。
間髪を入れず、関根多兵衛の大音声がとどろいた。
「聞け！　われらは、本多忠勝が麾下——御堂主馬之介隊だ！　主君本多忠勝の命令によって、日坂城主を、その香華院に葬る。これをはばまんとする者は、徳川家に反抗する者と看做して、悉く誅戮するぞ！」
この威嚇は、群衆に、途を開かせる効果があった。
葬列は、憎悪の目の矢を射込まれつつ、何事もなく、通り抜けて行った。
歓喜寺の山門には、老僧が、異常な昂奮を掩いきれぬ様子で、立っていたが、つかつかと進み出た主馬之介に、
「亡霊の埋葬をつかまつるために、罷り通ります」
と、宣言されるや、白髯を顫わせただけで、一言も発し得なかった。
伊能家の墓地は、地所の半分を占めて、幾代かの城主の墓碑を整然と並べていた。
主馬之介は、盛政が眠るべき場所を、多兵衛に教えておいて、北隅の小さな墓石の前へ歩いて行った。
葎が茂って、墓石は、なかば掩われていた。
——母上！
主馬之介は、声なく呼びかけた。

感動が、渦をまいて、のどもとまでおしあがって来た。
父に斬られて、老いたる郎党佐次兵衛にかかえられている母の、無慚な姿が、まざまざと甦って来る——。
逆上して、父を追おうとした自分を、呼びとめたきびしい口調と、ふりかえった自分にあてた名状しがたい哀しい表情が、昨日の出来事であったように、鮮かに描かれる——。
母は、云ったことだった。
「信也、父上に刃を向けてはなりませぬ。……よろしいですね。母の遺言ですよ」
そうであった。母は、いかに父から憎まれ虐められても、それに堪えなければならなかったのだ。わが子は、良人の子ではなかったのだから——。
たとえそれが、おそろしい権力によって蹂躙された不可抗事であったとしても、武将の妻として、良人にゆるしを乞うことすらゆるされなかったのである。ただ、ひたすら、言語に絶した運命の残虐に堪え忍ぶよりすべはなかったのである。
左様、母は、父に斬られて果てることを、のぞんでいたのではなかろうか。そして、そうなった時、はじめて、ほっと安堵したのではなかろうか。
——母上！
主馬之介は、ささやいた。
——てまえが、今日為したことを、母上は、ほめて下さるでしょう。てまえは、伊能盛政の子として、為すべきことをいたしました。



このおり、境内の方角で、突如として、物凄い騒擾の響きが起った。絹をひき裂くような悲鳴が、吶号の中から、いちだんと、かん高く、虚空をつらぬいた。
主馬之介は、村人同士の争いが起ったのであろう、と思っただけで、その位置を動かなかった。
墓穴は、掘られ、不運な孤独な老城主は、ついに、安息の終の栖を得た。
武者たちの列は、再び黙々として、主馬之介を中央に置いて、廃墟へひきかえした。
主馬之介は、彼らが、城内に入るものとばかり思っていたので、跳ね橋の袂にのこして置いたおのおのの馬へただちに乗ろうとするさまに、愕然として、
「どうしたのだ！　わたしは、おぬしたちに、礼をしなければならぬ。幸い、本丸の地下室には、酒樽がのこって居る。ふるまいを受けてもらえぬか……。相談もある」
と、云いかけた。
すると、多兵衛が、太い眉を、びくびくと痙攣させ乍ら、
「われら、もののふの栄辱を知る者としては、伊能盛政がたくわえた酒を頂戴いたすくらいなら、舌を嚙み切って死んだ方がましでござる」
と、云いはなった。
主馬之介は、息をのんで、棒立った。
多兵衛は、瞬間、われとわが言葉に傷ついたように、目も口も肩も顫わせた。
「まことに……われらが侍大将であられた御仁にむかっての暴言、はらわたが断つ思いでござる。……しかし乍ら、このことだけは、御承知置き下されい。われわれが、伏見城へ帰ったならば、

伊能盛政の遺骸を葬った一事に対して、みなの者たちは、唾を吐きかけるでござろう。われわれは、それを覚悟して、敢えて参上いたしたのでござる」

「わかった。ゆるしてくれ。わたしは、わたしのことしか考えずに、おぬしたちを呼んだのだ。すまぬ」

主馬之介は、頭を下げた。

「貴方様は、御自身を非難なさるには及びませぬぞ。……御堂主馬之介殿に対するわれらの尊敬の念は、いまも、露いささかも減じては居り申さぬのです。ただ……」

「よい、わかった。誓って云う。このさき、わたしが、おぬしたちに助力を求めることはない。今日より、わたしとおぬしたちとは、なんの縁故もない。わたしは、わたしという人間の存在を忘れてくれるがよい。わたしに、いま、おぬしたちへ贈るはなむけがあるとするならば、この別辞だけだ」

武者たちは、これをきいて、ひとしく、うなだれた。

「さらばだ――」

主馬之介は、彼らが立ち去りやすいように、自分の方から踵をまわして、しずかに、跳ね橋を渡って、大手門内へ入った。

……遠ざかる馬蹄のひびきをきき乍ら、主馬之介は、孤独の寂寥に、全身で呻いた。

――おれが、この世で、最も信頼した部下たちも、おれから永久に離れ去った！

さびしさは、重い疲労感になって、どっと、肩にのしかかって来た。



力ない足どりになって、主馬之介は、わが身をひきずるように、暮れなずむ惨憺たる廃墟のふところふかく戻って行った。

二の丸の館の跡を過ぎようとして、主馬之介は、焼け柱のわきに倒れている人影を発見して、はっとなった。

急いで、近よって、

「こんなところで、どうした？　起きないか？」

と、声をかけてみた。

朝路は、死んだように、身動きもしなかった。

主馬之介は、跼みかかって、抱き起した。とたんに、朝路の頭は、がっくりと地へ垂れた。

ぎくっとしたことだった。背中へまわした手に、べっとりと血汐がついたのである。

咄嗟に、主馬之介の脳裡にひらめいたのは、歓喜寺境内で突発した騒擾のことだった。

――あの悲鳴は、この娘のものだったのだ！　村人たちに襲われて、抵抗するさけびだったのだ！

「おいっ！　朝路！　しっかりしろ！　死んではならぬ！」

主馬之介は、その耳もとで絶叫した。

# より添う者(もの)たち

## 一

襤褸(ぼろ)きれのように、ぐったりとなっていた朝路は、主馬之介にかかえあげられると、睫毛(まつげ)をふるわせて、うす目をひらいた。

「……す、すてて……おいて、下さいませ。……も、もったいのう、ございます。……わ、わたしは、もう、どうなっても——」

と、力なく、かぶりをふったが、また、そのまま、気を失ってしまった。

朝路が、意識をとりもどしたのは、それから、一刻(とき)ばかり後だった。

闇に滲んだ燭台の赤い炎を、痴呆のように、ぼんやりと、眸子(ひとみ)に映して、横たわっていた朝路は、ふいに、

「あっ！」

と、烈しいおどろきの叫びを発して、身をはねおこした。

窓ぎわの経几(きょうづくえ)に凭(よ)って、本丸の地下室からはこんで来た書類を調べていた主馬之介は、ふりかえって、



「どうした？」

と、問うた。

朝路は、喘ぎつつ、痛む四肢を動かして、褥(しとね)からのがれ出ると、ずるずるとあとずさった。

その視線は、なんとも形容しがたい困惑の色をあふらせていた。

「どうしたというのだ？」

主馬之介は、苛々(いらいら)して、見すえた。

「こ、ここは、主、主馬之介様の、い、いらっしゃるところで、ございます」

「それが——？」

「このお夜具は、主馬之介様のものでございます」

朝路は、おそろしいものでもしめすように、じぶんが寝かされていた褥を指さした。

「いったい、それが、なんだというのだ？」

主馬之介は、朝路の心の動転の理由がほぼ推察されはしたが、わざと荒々しく応対せずにはいられなかった。

朝路は、わが手でわがからだをさすり乍ら、

「わたしの傷には、手当がしてございます！」

と、しぼり出すように云った。

「あたりまえではないか。お前は、ひどい怪我をしているのだ。そこに、寝ているがいい」

「主馬之介様っ！」

朝路のいっぱいに瞠いた双眸から、どっと泪があふれ出た。
「わたしは、いやしい下婢でございます！」
「……………」
「そ、それなのに……貴方様は、わたしに、手当をして下さいまして、ここへ、寝かせて、下さいました！」
「……………」
「わ、わかりませぬ！　わたしには、わかりませぬ！」
まるで、信じられない奇蹟が与えられたように、朝路は、疼痛も疲労も忘れて、夢中で、かぶりをふった。
主馬之介は、自分の感動を制するために、厳粛な態度をとらねばならなかった。こちらには、べつに大したことではない親切が、こんなにも、この野性の娘を驚愕させおそれおののかせようとは、全く思いおよばなかったことである。
「莫迦っ！」
主馬之介は、叱咤した。
「この城の中には、わたしとお前と、二人きりしか住んでいないのだぞ！　死んだようになって倒れているお前を、ほかに誰がたすけるというのだ！」
そうあびせられて、瞬間、朝路は、彫像のように、目も口も肩も手も膝も、こわばらせて、大きなきらめく雫が、その頰を、いくすじもつたい落ちるにまかせていたが、不意に、ばさっと俯



っ伏すと、
――わっ！
と、慟哭した。
主馬之介は、全身を波うたせるその姿へ、遠いまなざしを置いて、この広い世界で、いま、自分の味方としてのこっているたった一人の人間が、この娘であることを、沁々と思いやらずにはいられなかった。
――この娘も、よる辺のない、天涯孤独の身なのだ。人里から除外され、嫌悪され……この荒城しか住む場所がない、と思いきめている！
主馬之介は、目がしらに熱いものをおぼえて、あわてて、背を向けた。
いくばくか過ぎて、朝路が、嗚咽を止めて起き上る気配がした。
囚徒のように、それなり、ひっそりと、うなだれて坐りつづける様子が、主馬之介の神経に映しとられた。
「朝路――」
「はい」
「お前は、人から、やさしくされたことが、あまりないようだな」
主馬之介は、月光のそそぎ入る窓を見やったままで、訊ねた。
朝路は、ちょっと、どうこたえていいかわからぬ、大きな感激の息づかいをしめしていたが、
「わたしは、貴方様におつかえしている身でございます。そ、それだのに……こ、こんなこと

を、して頂いて……もったくなくて——どうしていいのか、わ、わかりませぬ！　罰があたります！」

「わたしは、べつに、お前の主人ではない」

「いいえ！」

「まあ、きけ。わたしが、この城を継ぐべき身ではないことは、お前も知っているではないか。わたしは、ただの牢人者だ。伊能盛政の遺骸を葬る仕事を終ったからには、この城を出て行かねばならぬ。……お前ひとりだけ、ここにとどまっては居れまい」

「主馬之介様っ！」

「お前は、他処へ行けば、必ず大切にされるだろう」

「他処って、何処でございますか？」

「何処でもよいのだ。どんなところへ行こうとも、ここよりは、ましだ。お前のような、骨身をおしまぬ、すなおな、健康な働き手は、何処へ行っても、よろこばれ、可愛がられて——幸せが、おとずれるに相違ない」

すると、突然、朝路は、主馬之介の背中へむかって、烈しく叫びかえした。

「いやでございます！　わたしは、他処へ行きたくございません！　主馬之介様、貴方様が追い出しておしまいなさるのなら、わたしは、谷底へとびおりて、死んでしまいます！」

その狂おしい声は、主馬之介の肺腑に、つき刺さって、疼きを生じせしめた。



## 二

沈黙の数日が過ぎた。

この間に、主馬之介は、朝路なしでは、この荒城に住むということが、いかに困難であるか、充分に思い知らされた。

宛然、孤島に打ちあげられた破船の乗組者のように、主馬之介は、あんたんたる気持で、先祖代々の廃墟を、うろつきまわった。地雷火や罠が、歩みを脅かすことはなくなったが、焼け燻ぶって、狼藉たる全地域は、ほんのわずかなむかしのおもかげもとどめて居らず、主馬之介の追憶をさそうことを拒んだ。少年の日、その一木一草に見おぼえのあった庭苑も、完全に趣きを変えてしまっていて、主馬之介は、その中で迷わないために、新しい目標を必要としたくらいであった。

しかも、なお、しばらく、ふみとどまらなければならなかったのは、理由があった。

主馬之介は、本丸の地下室にのこされた厖大な書類の中から、父ならぬ父伊能盛政の厳秘の筆蹟を、さがし出そうとしたのである。

すなわち——。

刎頸の交を結んだ石田三成を、何故に裏切って、徳川家に、関ケ原における大捷をもたらしめたか——その遠因を明らかにする盛政の手記を、主馬之介は、もとめたのである。

これは、とりもなおさず、自分が、豊臣秀吉の子であることを教える証拠品であった。

この証拠品を携えて、徳川家康のもとへおもむけば、伊能盛政の汚名は雪げるであろう。しかし、秀吉の子たるわが身を、はたして、家康が、寛容をもって、ゆるすかどうか、それは疑問であった。

当然、家康は、生かしておいては、徳川家のために禍根をのこす存在と思いなされる秀吉の子たる者を、うちすてておく筈はないであろう。

伊能盛政の汚名を雪ぐためには、おのれの生命を危地に曝さなければならないのであった。

にも拘らず――。

主馬之介は、敢えて、これをなそうと決意したのである。

盛政の手記を、是が非でも、さがし出さないではいられなかった。必ず、それは、のこされているに相違なかった。

主馬之介は、毎朝、ひとかかえの書類を、渡櫓へ運んで来ては、綿密に調べつづけた。

もはや、朝路とは、殆ど口をきかなかった。いや、一日のうち、顔を合せることもなくなった。朝路の方で、音も立てず、姿も見せぬようにして、用事をすませる心のくばりかたをした故でもあった。

主馬之介が、朝、水浴をすませて渓谷から戻って来ると、渡櫓の上階では、褥はきちんと片づけられ、食事のしたくがととのえられていた。

すでに、城内に、食糧は尽きている筈であったが、朝昼晩の食膳には、乏しい乍らも、心をこめた料理が、工夫されて、盛られていた。



主馬之介は、どうやって、何処から、その材料を取って来るのか、訊き糺したいと思ったが、朝路が給仕にも姿をあらわさないので、そのままにうち過ぎていた。

時おり――。

主馬之介は、朝路が、壺や鍋や椀を持って、渓流の方へ降りて行く姿を、窓から眺めた。朝路は、渡櫓をはなれると、必ず、要心ぶかく、城内に、何者かが侵入していはせぬか、と目をくばって、警戒する様子をみせた。そして、なんの危険もないとたしかめると、吻として、灌木をかきわけて、渓流へ、食器を洗いに行った。

主馬之介は、朝路に、階段下の地べたに筵にくるまって寝ることを禁じていたが、どこをねぐらにしているのか知らなかった。

もう、夜半は、肌を刺す寒気が襲って来る季節を、この山中は迎えていた。

ある黄昏、主馬之介は、朝路が、渓流へ行ったのを見とどけておいて、上階から降りた。

朝路が、ねぐらにえらんだ場所は、すぐに判明した。

渡櫓の北端に、厩が一棟半焼けになって建ちのこっていた。

そこを覗いた主馬之介は、地べたに、業火の残物の、黒焦げた戸板が置かれ、その上に、一枚の筵が敷いてあるのを見出した。これが、朝路の寝床であった。

――飼犬の小屋の方が、もっとましだ。

主馬之介は、そう思った。

屋根はいたるところ破れて、大穴があいて居り、どうにも手のほどこし様がなかった。どこか

を直そうとかかれば、かえって、ぐゎらぐゎらと崩れてしまうに相違ない。焼け柱に凭りかかることすらも危険に思われた。

焦げ板片で、かこいをしているのだが、これとても、風雨をさける役目さえもおぼつかなく見えた。

この一両日の夜気のきびしい冷たさを、朝路は、ここで、よくぞ堪え得たものである。

「ばかな奴だ」

呟きすてた主馬之介は、上階へひきかえすと、二枚しかない布団のうちの一枚をかかえて、再び厩へ入って、筵の上へのせておいた。

## 三

その夜――。

主馬之介は、夥(おびただ)しい書類の堆積(やま)の中に坐って、仄暗い燭台の火のまたたきをあびつつ、古い記録をめくっているうちに、なんとも名状しがたい孤独の寂寥に、胸をしめつけられて来た。

ふしぎであった。

主馬之介は、いままで、いつも、孤独であった。そして、決して、孤独でなくなることを望んだことはなかったではないか。しかも、この世のすべての人間を敵にまわしてしまった現在、卒然として、人間にすがりつきたい衝動が、いったい、どうして、起ったのであろう？

主馬之介は、充血した双眸を、宙に据えて、長い間、身じろぎもしなかった。



やがて――。

そのくちびるのかげから、もらされたのは、

「……千草！」

その名であった。

かげ薄い、たおやかなその容子(ようす)が、ふっと、主馬之介の目のさきを掠めたのである。

――千草は、すぐそこに……歓喜寺に来ているのだ！　会おうとすれば、会うことが可能なのだ！

八年の間、胸に抱きつづけて来た清浄な俤だった。

揖斐の屋敷でめぐり会ってみれば、想い描いてはぐくんで来た艶麗は、そのまま、前にあった。とうとう会えた、と声なく叫んで、身も心も顫えたことだった。

――もう一度、会いたい！

――会ったら、こんどこそは、何も云わず、抱きしめてやりたい！

この腕の中に、あの白い細い、やわらかな肢体を――と想像して、主馬之介は、烈しい血の波立ちをおぼえた。

その時であった。

背後に、人の気配を感じて、屹(き)っとなって、振りかえった。

階段ぎわに、朝路が、蹲まっていた。

薄くらがりの中で、朝路の眸子(ひとみ)が、火のように光ってみえた。

「なんだ?」
主馬之介が、穏かに訊くと、朝路は、大きくひとつ喘いでから、
「あれは……貴方様が、あ、あそばしたのでございますか?」
「あれは、とは?」
「お夜具でございます。わ、わたしのところに、ございますです」
「ほかに、誰がするというのだ」
そうこたえ乍ら、主馬之介は、朝路の顔いっぱいに、不安と当惑の色がひろがっているのをみとめて、
――またか!
と思った。
この野性の娘は、人の親切というものを、どう受けていいのか、全く知らないのだ。そうされるたびに、おどおどと、怯えてしまうのだ。
「行って、寝るがよい」
「主馬之介様! どうして、貴方様は、あんなことをなさいました? わたしは、もう、からだは、なおって居りますのに――」
「たわけっ!」
主馬之介は、この前と同じく、叱咤しなければならなかった。
「おれが、お前を、凍え死させて置いてもいいと思うのか!」



朝路は、言葉にならぬ声を発して、みるみる顔をゆがめるや、どっと、泪をあふれさせた。
こんどは、俯っ伏して慟哭こそしなかったが、あまりの感激に、そうやって坐ったなりで、どうしていいかわからぬ身もだえをした。
主馬之介は、視線をはずして、しばらく、ぼんやりと、その歔欷の声をきいていたが、ふと、もう丑の刻すぎていることに気がついた。
「おい、お前は、いま時分まで、どこに行っていたのだ?」
「はい――」
朝路は、手の甲で、泪をぬぐうと、
「西山の里へ参って居りましたです」
「なに? 日坂峠を越えてか?」
「はい――」
主馬之介は、茫然とした。
この日坂から、平野へ降りるには、津汲から、揖斐川に沿うた道を辿るほかに、日坂峠を越える山径があったが、これは、おそろしい険路で、木樵しか往来しないのであった。
盛政の葬儀を敢行して以来、村のうちで、朝路に、食料品をわけてくれる者は一人もいなくなったのである。いや、朝路を見つけたら、生かして城内へは帰さぬ憎悪をたぎらせている有様だった。
そこで、朝路は、やむなく、日坂峠を越えて、西山(現在の春日村)まで降りて行って、わけ

てもらって来ていたのである。往復八里の山坂を、朝路は、黄昏刻に出て、夜半に戻って来ていたのである。戻りには、相当重い荷物を背負い乍らである。

左様、城内に食糧が尽きてから、朝路は、三日に一夜は、この人間業とも思われぬ往復をやってのけていたのである。しかも、昼間は、平常とすこしも変らず、くるくると立働いていたのだ。

主馬之介は、熱いものが、のどもとへこみあげるのをおぼえた。

「朝路、よくやってくれた」

むこうを向いて、主馬之介は、云った。

「お前は、この世の中で、いちばん心のきれいな娘だ。……行って、ぐっすり、やすみなさい」

主馬之介は、立ちあがって、褥に入った。

浅い睡りから目ざめた時、夜明けたばかりの空は、乳色の霧を窓から送り込んでいた。

全身が、凍ったように、冷えていた。

なぜともなく、主馬之介は、激しい刺戟を欲して、ぱっと起き上った。

渓谷の清冽な流れは、主馬之介の裸軀を、おそろしい力でしめつけた。

それに堪えて、岸に上った主馬之介は、なんともいえない爽快な気分になっていた。

上階に戻ってみると、褥はそのままになっていたし、勿論、食膳もはこばれてはいなかった。

この時刻、起き出たことは、二度ばかりあったが、朝路の方では、まるで昨夜のうちに命じられていたもののように、主馬之介が戻って来てみると、きちんと褥を片づけて、食膳をはこんで来ていたものである。



——疲れはてて、寝すごしたのであろう。

そう思いやって、主馬之介は、しばらく待つことにした。

一刻が移ったが、朝路は、登って来なかった。

主馬之介は、上階から降りて、厩へ歩いて行った。朝路が、ねむっているのなら、自分で火をつけて、朝食をつくろうと考えたのである。

朝路は、厩の蔭に、台所を設けていた。焼跡からひろい出して来た貧弱な世帯道具が、そこには、整然と並べてあった。壺も鉢も皿も椀も、きれいにみがかれて、光っていた。

主馬之介は、竈を焚きつけようとして、釜が空であるのに気がついた。朝路は、なんの準備もしていなかったのである。

主馬之介は、やむなく、昨夜、山坂をはこばれて来た食料品を取るべく、そっと厩へ入って行こうとした。

おどろいたことに、朝路は、ねむってはいなかった。

筵の上へ、端座して、虚脱のまなざしを、宙へ投げていた。布団は、たたまれて、前に置かれたままだった。

主馬之介は、その様子を一瞥して、

——気が狂ったのではないか？

と、疑った。

完全なる痴呆の表情だった。

「おい――」
呼びかけると、朝路は、ひどくかんまんな動作で、視線をまわした。
「気分がわるいのか?」
やさしく問いかけると、朝路は、わずかにかぶりをふった。
「どうして寝ないのだ?……お前は、夜中そうやって坐りつづけていたのだな?」
「はい――」
朝路は、こくりと頷いた。
「どういうわけだ?」
血の気の失せた、蒼白な顔を見戍り乍ら、主馬之介は、不審に堪えなかった。
「主馬之介様。……わたしは、考えて居りました」
朝路は、唖がはじめて口がきけるようになったら、こういう調子かと思われるような、ぎこちない云いかたをした。
「何を考えていた?」
「主馬之介様。……貴方様は、あんなことを……仰言(おっしゃ)いましたけど――あれは、本当では、ございませんです。……誰もまだ、わたしに、あんなことを、申した者は居りませぬ」
「わたしが、何を云ったというのだ?」
主馬之介は、つっけんどんに、訊きかえした。
「仰言いましたです」



「だから、何を言った?」
主馬之介は、どなった。
「わたしが……この世の中で、いちばん、心のきれいな娘だ、と――仰言いました」
「……………」
主馬之介は、ひとつの衝撃をうけて、言葉もなかった。
主馬之介は、未だ曾て、微妙な女心の動きを覗いてみたことがなかったので、自分のなにげないほめ言葉が、この野性の娘を一夜中まんじりともさせずに考え込ませる程重大な価値をもっていたと知らされて、立往生せざるを得なかった。
途方にくれるのは、こんどは、こちらの番であった。
ほんのわずかな沈黙が過ぎると、主馬之介は、やさしく微笑した。
「わたしは、自分の心をいつわることはきらいな人間だ。そう思ったから、お前に云ったまでだ。信じてくれていいことだ。お前は、まちがいなく、この世の中で、いちばん心のきれいな娘だ」
「ああ……」
朝路は、両手と膝で、筵からいざり出ると、飼犬のように、主馬之介の足もとへ寄った。
「ほ、ほんとうでございますか? 主馬之介様、わ、わたしは――」
主馬之介は、一歩さがった。
「わたしは、腹が空(す)いている。食事のしたくをしてくれ」
「は、はいっ!」

活きかえったように、朝路は、とび立ちあがると、両手で、泪をぬぐい、

「うれしゅうございます。……わたしが、お食膳を、持って参ってもよろしいのでございますね？」

「わたしに、取りに来させるつもりだったのか？」

「い、いえ——わたし、そう思いましたものでございますから……。あんなことを仰言いましたので、もう、わたしが、お世話を申上げては、いけないのではないかと」

そう云うや、朝路は、栗鼠のような素迅い身ごなしで、主馬之介のわきをすりぬけると、台所へとんで行ってしまった。

——奇妙な娘だ。

ほめられたならば、よろこぶべきなのに、叱りつけられたよりも、もっと強い打撃にして、心を傷めた——その感情の動きを、主馬之介は、この上もなく哀れなものに思わずにはいられなかった。

——あの娘は、本当に、今日まで、たった一度も、ほめられたことがなかったのだ！

## 四

さらに、数日が、流れ過ぎた。

空を吹き渡る風は、冬の音色を含んでいた。

夕陽が、美しく、雲や山や樹や谷あいを彩った頃あい、主馬之介は、渡櫓をぶらりと出て、こ



れまで近づかなかった外曲輪のわが館の址へ足をはこんでみた。

そこは、灌木がびっしりと生茂って、もはや、むかしを偲ぶ何ひとつ見当らなかった。

秋風が、するどい音をたてて、渓谷の底から、叢の中を洗うように、吹きあげて来て、主馬之介のおもてを打った。

主馬之介は、わざと、その冷たい風にさからって、灌木をわけて、険しい断崖のはしまで出てみた。

すると、はるかな下方で、せせらぎのひびきに交って、ばちゃばちゃとはねかえる水音がつたわって来た。

縁からさしのばされた樹枝をつかんで、首をのばしてみた主馬之介は、燃えるような紅の雲を映した浅瀬に、太股まで裾をたくしあげて、つかっている朝路の姿を見出した。洗濯物を滌いでいるのであった。

例の単調な木樵歌を、無心に口ずさみ乍ら、逞しい腕で、洗濯物を流れの中で大きく振っていた。

と——。

忽ち、朝路は、愕然として、岸へ飛び上った。主馬之介の足が、小石を二三箇ずり落して、そのひとつが、音たてて、流れにはまったからである。

邪推深そうに、朝路は、対岸をうかがった。何者かが、むこうの茂みの中で、自分をねらっているのではないか、と疑ったようであった。

「わたしだ、朝路」
主馬之介が、声を投げおろすと、朝路は、くびをねじって、振り仰ぎ、
「ああ、主馬之介様」
と、にっこりして、あらわな腕で、顔を拭いた。
「なぜ、そんなところで、洗濯をしている？」
「貴方様が、水浴みなさるところより、ずうっと下でございますから——」
朝路は、こたえた。
主馬之介が、水浴する場所は、小径が通じていて、便利だったのだが、朝路は、遠慮したのである。
「そんなところへ、よく降りられたものだな」
「わたしは、木攀りが上手でございます」
朝路は、目を細めて見上げ乍ら、こたえた。
——これからは、おれが水浴する場所を使うようにさせてやろう。
主馬之介は、そう思った。
朝路は、竹籠へ、洗濯物を入れると、ちょっと臆病そうな目つきで、主馬之介がまだそこに彳んでいるのをたしかめた。それから、茂みの中へ潜った。
主馬之介は、若い軀が、野猫のように敏捷に、節立った幹から枝へ、枝から幹へ、と攀じのぼって来るのを見とどけた。



断崖上へ上った朝路は、上気した顔を伏せて、そそくさと立ち去りかけた。
「おい——」
主馬之介は、呼びとめた。
「今夜から、わたしのところで、寝るがいい。あの厩では、凍えてしまう」
朝路は、それをきくと、大きく目を瞠いて、まじまじと、瞶め返した。
おどろきで、声が出ない様子だった。
「地下室から、屛風をはこんで来ておいた。お前は、むこう側に寝ればよい」
「主馬之介様——」
叫び出そうとする気色に、主馬之介は、厳然たる態度で、
「わたしの命令だ」
と、云いすてて歩き出した。
朝路は、夕餉の膳を下げて、翌朝のしたくをととのえておいて、怯ず怯ずと、上階へあらわれた。
主馬之介が、我慢しきれなくなって、こちらへ入れ、と云うまで、朝路は階段ぎわに蹲まっていた。
その両手には、大切そうに、縫物が持たれていた。
「いちいち、わたしに命令させるな」
主馬之介が、叱ると、朝路は、当惑の微笑をつくって、

「心配なものでございますから……、どんなぐあいにいたしたらよろしいのか、わかりませんものですから――」
と、詫びた。
主馬之介は、書類へ目を通しはじめ、朝路は、せっせと縫物をはじめた。それは、主馬之介にきせるための冬の小袖であった。
その晩は、それきり、二人の間には、話がなかった。
主馬之介が褥に就くまで、朝路は、そこに坐りつづけた。主馬之介が、さきにやすめ、と命じたのだが、これは、肯かなかった。
二人の間に、なごやかな会話が交されたのは、それから、四日ばかり過ぎてからであった。
「お前は、きものを縫うことを誰に習ったのだ？」
主馬之介が、なにげなく訊ねると、朝路は、急に、いきいきとした表情になって、
「奥方さまに、でございます」
「母上に――？」
「はい、奥方さまが、お縁側で、若様のお召物をお縫いあそばしているのを、わたしは、お庭のむこうで、熱心に、拝見いたして居りましたのです。そうしたら、奥方さまが、わたしにお気づきになって、習いたいか、と仰言いましたのです。わたしが、お教え下さいませ、とおねがい申上げますと、上って来るように仰言いました。……ご親切に、お教え下さいました。もったいない、夢のような、うれしさで、夜もねむれないくらいでございました」



そう云って、朝路は、得意げに、針箱をさし出した。
「これは、奥方さまから賜りましたお品でございます。わたしの宝ものでございます」
主馬之介の胸の中に、微かな痛みが湧いた。
小さな下婢に縫物を教えている淋しい母の姿が、脳裡を掠めすぎたのである。
主馬之介が、朝路に、一通の手紙を渡したのは、次の日の夜であった。
「これを、歓喜寺に身を寄せている須藤家の千草に手渡してくれぬか？」
朝路は、じっと主馬之介を見かえしていたが、目を伏せると、
「はい、主馬之介様」
と、こたえた。
主馬之介は、その手紙に、かくすところなくいっさいの告白をしていた。
この世で、自分がもとめている唯一のものが、そなたである、と告げ、自分が伊能盛政の手記を発見して徳川家康に会いに行けば多分生きて戻れまい、と思われる故、その前に、もう一度だけ会って欲しい、と申出たのである。
「村の者たちに捕えられてはならんぞ」
「ふん――あいつらに！」
朝路は、山猫のように、目を光らせて、肩をそびやかした。
「死んでも、捕りませんです！」

朝路は、出て行った。

主馬之介は、窓から、朝路の影が、闇の中へ滑り込んで行くのを見送って、手紙が千草に確実に手渡されることを、祈った。



# 永遠（とわ）の像（ぞう）

## 一

「あったぞ！　これだ！」

主馬之介が、狂的に、双眸を光らせて、その叫びをほとばしらせたのは、それから四日後の真夜中であった。

ついに――。

主馬之介は、伊能盛政が厳秘にした筆蹟――二十余年前の日誌を、その厖大な書類の中から、発見したのであった。

疑いもない事実として、その古びた日誌には、秀吉と三成に対する憎悪（ぞうお）と呪詛（じゅそ）の言葉が、たたきつけるような調子で、書きつらねてあった。

主馬之介は、動悸烈しく、むさぼるように読み了（おわ）ると、しばらく、虚脱したごとく、茫然と、暗い宙へ眸子（ひとみ）を置いていた。

――おれは、やはり、秀吉の子であった！

どろどろに濁り腐ったものを吐き出すように、深い溜息を、もらした。

盛政は、妻が、一月間、秀吉の館にとどめて置かれて、帰って来るや、夫婦の交りを永久に断ったのである。

主馬之介が、秀吉の子であることを明らかにするこれ以上の証拠がまたとあろうか。

いくばくの時刻が、移ったか――。

階段をかけのぼって来る朝路の跫音がした。

もし、盛政の日誌を発見していなければ、その勢いのいい跫音をきいただけで、

――あ！　手紙を、千草に渡すことに成功したな。

と、主馬之介の胸ははずんだに相違ない。

朝路は、前三夜とも、千草に手紙を渡すことができずに、むなしく、戻って来ていたのである。

「主馬之介様！　お渡しして参りました！」

朝路は、べったりと坐ると、肩を波うたせ乍ら、報告した。

「運がよかったのでございます。本堂に、大切らしいお客様がおいでになっていて、千草様は、その接待役をしていらっしゃいました。手燭をお持ちになって、方丈から渡廊をわたって行こうとなさっているのをお見受けして、わたしは、床下から、とび出して、お呼びとめすることができました」

「ふむ――」

「千草様は、わたしをごらんなさいますと、あっとおさけびになって、あやうく、手燭をおとり落しになるところでございました。……わたしは、必死で、お手紙をさし出しました。……千草



様は、主馬之介様からのお手紙、とおききになると、ぶるぶると顫え出されて、大層おそろしそうに、お帰りなさい、そんなものは受けとれませぬ、と申されました。わたしは、思わず、これは主馬之介様が、貴女さまに、心をこめてお書きになったものでございます、とさけんでしまいました。わたしの声があまり大きかったので、千草様は、それこそ、鉄砲に狙われた兎のようにびっくりなさいまして――お手紙をお受けとりになりました」

「…………」

主馬之介は、まっすぐに見据えている朝路の視線を、急にわずらわしいものに感じて、顔をそむけた。

自分の手紙を、千草が、受けとるのを拒もうなどとは、毛頭考えてもいなかったのである。

――おれの覚悟の程も、このように底浅いものだった。千草もまた、おれから遠く去った、ときりすてることが、なぜできなかったのだ！

「主馬之介様。千草様も、お手紙をお読みになれば、屹度、お心がかわると存じます。屹度、屹度、それは、まちがいなく、そうだと存じます」

――おれをなぐさめてくれるのは、この下婢だけだ。

主馬之介は、おのれをあざけると、

「苦労をかけて、すまぬ。ゆっくり、やすむがよい」

「いいえ、主馬之介様。わたしは、これぐらいのことは……」

まだ何か喋りたそうな朝路に、主馬之介は、手をふった。

はっ、とわれにかえった朝路は、叱られた小犬のように、こそこそとひきさがって行った。

## 二

十日あまりが、またたく間に、過ぎて行った。

朝路は、千草の返辞が、必ず来る、と信じ、断言して、大手門のところへ、それが投げ込まれていないかと、一日に三度も四度も出て行ってみていた。

――あるいは、もしや？

万が一の期待が、主馬之介にもなかったわけではなかった。

十日が過ぎて、はじめて、主馬之介は、完全に、あきらめすてた。

主馬之介は、この荒城から出て行く日を、いつにしようか――と、そのことのみを、考えはじめた。

起き出て、雪片が舞うのを見た朝、

――もう、ここには住んで居れぬ。

と、思いきめていると、朝路が、のぼって来て、

「ちょっと、西山まで行って参ります」

と、告げた。

「雪が降って来たではないか。二、三日後にしたらどうだ。まだ食糧は、すこしはのこって居ろう」



「何を仰言います。明日は、奥方さまのご命日ではございませぬか。お供えをいたさねばなりませぬ」

「そうか――」

止めても、きく朝路ではなかった。

朝路は、出て行った。

一刻後、主馬之介もまた、本丸の地下室から、鉄砲を一梃とり出して、雪の山へ出て行った。おのれ自身にもわからぬ神経の苛立ちをしずめるためであった。

しかし、主馬之介は、午後おそくまで、いたずらに、密林の中をさまよい歩いただけで、一発も撃ちはなさなかった。

――おれの前には、鳥もけものも、姿をあらわさぬのか！

孤独な絶望の呟きをもらして、帰路につこうとした時、主馬之介は、三間のむこうに、いっぴきの小兎が、じっとうずくまっているのを発見した。

怖れ怯えて、動くこともできない様子に見えた。

主馬之介は、その可憐なすがたを、じっと瞶めているうちに、突然、

――そうか！

と、思いあたった。

――揖斐の屋敷で、おれを縛った綱を切ってくれたのは、千草の意志ではなかったのだな。多次郎が、千草にそうさせたのだ！

そうとさとってみれば、あのおりの千草の態度のすべてが納得できるではないか。

――千草は、ただ、ひたすら、兄をおそれていただけなのだ。そうだ、この小兎のように……。

主馬之介は、おのれの滑稽な甘さを、声をたてて嗤いたくなった。

小兎は、ぴょんと、ひと跳ねすると、叢の中へ遁れた。

城へ戻ってみると、朝路はまだ、帰って来ていなかった。

夜は、風をともなって来て、雪片を、渡櫓の中へ、吹き込ませはじめた。

……朝路が、上階に姿をあらわしたのは、子の刻（十二時）すぎであった。

主馬之介は、山坂八里の往復が、いかに困難をきわめ、そして、一刻も早く帰りを急ぐために、どんなに朝路が、言葉につくせぬ必死の努力をしたか――死相にも似たその凍った顔から、読みとった。

どんな最大の讃辞を与えても与え足りないような気がした。

それゆえに、かえって、言葉が見つからず、深い感動の眼眸だけをあてて、頷いてやっただけであった。

朝路は、主馬之介の双眼が潤むのをみとめて、どうしていいか、わからぬ様子で、おろおろしたが、急に、陽気にはずんだ声をあげた。

「主馬之介様。煙草を召上りますか。西山の里で、わけてくれる者が居りましたです。煙管もゆずってもらって参りました」

「いや。それよりも、本丸の地下室から酒を持って来てくれ。お前がかついで来たものを肴にしよう」



『はい。今日は、ご馳走を買うて参りました。鮭も蒲鉾も豆腐も蒟蒻もございます。奥方さまのためには、梨や蜜柑をお供えできます』

うれしげに告げておいて、朝路は、大急ぎで、したくをしに降りて行った。

半刻すぎて、酒と料理が、主馬之介の前に運ばれた。

主馬之介は、箸をつけて、

「旨いぞ」

「左様でございますか」

朝路は、にこにこした。主馬之介の一言で、今日一日の苦労も、あとかたもなく消えさったようであった。

「お前も、飲まぬか」

主馬之介は、盃をさし出した。

「い、いえ、わたしなど――とんでもございませぬ」

狼狽して、朝路は、あとずさった。

「いいから、飲め。酒は、一人で飲むのはまずいものだ」

「でも……わたしは、お酒など、一滴も飲んだことがございませぬ」

「だから、今夜、はじめて、飲んでみるがいい」

朝路は、おずおずと、盃を受けとった。

主馬之介は、注いでやり乍ら、盃をささげた指が微かに顫えているのを、可憐なものに見た。
とろりと白く濁った酒は、甘かった。
「おいしゅうございます」
それが、後刻どれ程の酔いを発するかも知らず、朝路は、注がれるままに、幾杯ものみ干した。
佗しい主従の酒宴は、それから、一刻あまりつづけられたろうか。
朝路は、酔うにつれて、おしゃべりになった。ほんとに、よく、しゃべった。みんなとりとめのない、他愛のない話であった。そして、それは際限もなく、つづけられそうであった。
しかし、いまの主馬之介にとっては、そのおしゃべりが、この上もないなぐさめとなった。
やがて――。
朝路は、酔いが、からだのすみずみまでめぐったか、ともすれば、目蓋の落ちかかろうとする眸子に、とろけるような潤んだ光を宿した。無意識に、小鬢のほつれ毛をかきあげる仕草も、物倦げだった。
「朝路、疲れたか？」
そうきかれると、ふんがいするように、かぶりをふったが、もう主人の前にいる臆病さは消えてしまって、おのずからなまめかしくなった崩した肢態を、もてあます風情をみせた。
主馬之介は、はじめて、朝路に、優婉な女体を感じ、妖しい昂奮をおぼえた。
「夢のようでございます。ほんとに、夢のような……」
そう呟きつつ、ぐらっと上半身をゆらめかした。膝が乱れて、白い膝がのぞいた。



主馬之介は、あわてて、視線をそ向けた。
「あ――そうでございました。もう、お牀を、おのべしなければ……」
よろよろと立ちあがった朝路は、瞬間、あたりが、遽にゆらりと揺れ動くような目くるめきをおぼえて、火照った頬をおさえると、
「ああ……」
小さな悲鳴をあげて、倒れた。
にごり酒独特の効目が、ここで一時に出て、心のはりが、ぷつんと切れたものであろう。
若い、しなやかな肉体が描き出すなやましい曲線が、擅に、主馬之介の酔眼に映じた。
めくれた裾のかげに、ふっくらとした、絖のようなふくらはぎから太腿へかけての白い流れがあった。
主馬之介の抑制の力がすてられた。代って、酒の力が、主馬之介の四肢にめぐった。
やおら身を起した主馬之介は、そこへ寄ると、ぐったりとなったそのからだを抱きあげた。
「あっ……ああ――」
朝路は、なかばひらいた唇から、火のように熱い息を吐いた。
「……くるしいか？」
「は、はい――」
何者に抱かれているか、もとよりその意識が消えていたわけではない。彼女の瞳孔を占めた男の顔は、全能の神にもひとしい威厳と親愛をそなえていた。

この荒城をまもって、老いたる城主の最期を見とり、さらに新しい主人を迎えて、片時も神経をゆるめずにくらして来た——その緊張が、いまこそ、解きはなたれて、朝路は、すなおに、やすらかに、十九歳の乙女の弱さにおぼれて、男の腕の中で、昏々とねむろうとした……。

主馬之介は、抱きかかえた双腕に徐々に力をこめつつ、烈しい動悸の中で、

——かまわぬ！　この世で唯一の味方である女とむすびつくのだ！　女が下婢であろうと、なんであろうと、それが、どうしたというのだ！

そう自身に、たたきつけるように云いきかせていた。

翌朝——さし注ぐ赤い陽ざしに顔を射られて、朝路は、目をさまし、じぶんがどこに寝ているかに気がついて、はっとなって、はね起きた時、もはや、かたわらに、主馬之介の姿はなかった。

その時、主馬之介は、山坂を下って、二里の彼方にあった。

少年宗太郎が、はるばる、この荒城をおとずれたのは、それから三日後であった。

宗太郎は、大手門ぎわに、襤褸きれのように蹲っている朝路を見出して、目を瞠ったことだった。朝路は、三日間、飲まず食わずで、そこを動かずに、帰らぬ人を待ちつづけていたのであった。

## 三

蒼惶として、その年は、暮れた。



そして——。

春が、ふたたび、めぐって来た。

茎の短い青草の中に、小花が咲き出た。八重葎やいらくさが、ふたたび、のびはじめた。風の一息毎に、猫柳の花が、雨のように、地に散った。

畑では、鍬が春光をはねて光りつつ、休んでいた土を掘りかえしはじめたし、山からは、斧の音がひびきはじめた。

空には、雲雀の声があった。

そうしたうららかな殷春の一日——。

西方から、揖斐の城下へ通ずる街道を、騎馬の一隊が、矢のように駆けぬけて行った。およそ、三十騎あまりとかぞえられた。

遠くで、この蹄の音をきいた人々は、また合戦か、と驚いて、畑の中からのびあがったり、家からとび出したが、そのいでたちが、平和なものであるのをみとめて、ほっとしたことだった。

先頭をきって、この一隊を率いたのは、御堂主馬之介にまぎれもなかった。そのすぐあとにつづいているのは、関根多兵衛であった。

伊能盛政の汚名は、雪がれたのである。

家康の面前に出た主馬之介のいさぎよい態度は、永く、人々の口にのぼるに足りるものだった。

自らが、秀吉の子たることをかくさず、ひたすらに、義父の汚名を雪がんとして、凛乎として、家康のこたえを待つ姿に、なみいる諸侯は、いたく感動せざるを得なかった。

本多忠勝、竹中内蔵之介のとりなしもあった。それから、いまは家康の妾となった美尾姫の蔭からの悃願もなされた。

美尾姫が、主馬之介に会うことを避けて、その努力を知らさずに、慕情の苦しみをひとりわが胸に秘めておわったのは、けなげなことと云わねばならなかったろう。

結果――。

主馬之介が、家康から与えられたのは、旗本六千石の地位であった。

その時から、主馬之介が考えたのは、荒城にのこして来た忠実な下婢のことであった。

離れ去ってみて、朝路という娘が、いかに宝玉のように美しい心の持主であったかが、ひしひしと想われ、その俤は、日毎に、脳裡になつかしいものとなったのである。

――おれが妻に迎えるのは、あの娘だけだ！

その決意ができた。

朝路の前に、千草が、なんと色あせた、みすぼらしい存在となったことだろう。

――お前を妻にしてやる、と云ったら、朝路は、どんな顔をするであろう？

それを想像するたびに、主馬之介は、口もとに、微笑がのぼるのを禁じ得なかった。

今日こそ――。

朝路の、その顔が見られるのだ。

胸もはずみ、そして、駒も勇んでいた。

……一隊は、揖斐の城下に入った。



主馬之介は、松林寺門前にある代官宗屋敷に着くと、あらかじめ関根多兵衛と打合せておいた通り、ここから、単身、日坂道をのぼって行くべく、徒歩になった。

しかし――。

主馬之介が、ふと、日坂へ帰る前に、本巣郡祖父江にある母の墓へ詣でて行こうと思いついたのは、後になって考えれば、あるいは母の霊魂のみちびきによるものであったかも知れぬ。

主馬之介は、この城下に、須藤頼之助という宿敵がいたことを、忘れていた。

主馬之介が帰って来た報は、すぐさま頼之助の耳にとどいたのであった。

## 四

荒城にも、青草が萌出て、春光に匂わしい影の紗をまとうて、眺めは、やはりうららかなものになっていた。

その青草の中から、にゅっと、細い二本の腕がさしのべられて、

「あっ、あああっ――」

と、午睡からさめた大あくびの声が発せられた。

ぴょこんと、起きあがったのは、宗太郎であった。

しぱしぱ、とまばたきして、もう一度、顔中を口にして、あくびしてから、

「腹がすいたぞおっ！」

と、さけんだ。

それから、いっさんに渡櫓の方へかけ出そうとして、そちらから俯向いて歩いて来る朝路をみとめた。

「朝路さん。おいら、腹ぺこだぜ」

朝路は、にっこりして、

「我慢してね、宗太郎さん」

「もう、喰べるものがないのかい？」

「晩のぶんはあるのだけど――」

「だめだめ、宗太郎さんは、とても一日で帰れやしない」

「うん、よし。明日は、おいらが、西山の里へ行って来てやらあ」

姉と弟のように、いたわりあって、いつ帰るとも知れない人を待って、半年（はんとし）――。

長い冬にとじこめられているあいだに、ふたつの心は、あいての顔を見ただけで、なにを考えているのか、すぐあてられる程、ぴったりとより添うていた。

朝路が、歩き出すと、宗太郎は、

「大手門からもどって来たら、すぐごはんにしておくれよ」

と、たのんだ。

朝路は、厳冬のさなかにさえも、一日に三度――朝と午と夕に、半刻（はんとき）ずつ、大手門に彳（たたず）むのを欠かさないで来たのである。

「宗太郎さん、じつはね、ゆうべ、夢を見たの。……主馬之介様が、立派なお殿様のおすがたに



なって、おもどりなされるのを――」

「この前も、そう云っていたじゃないか」

「でも、あの時は、ただ、黒い影が、跳ね橋を渡って来るのを見ただけだもの。……ゆうべの夢はね、ちゃんと、主馬之介様だったんです。お笑いになったお顔も、はっきりとおぼえている。……今日は、屹度、お帰りになります。わたしの予感は、今日こそあたる！」

「あたればいいな！」

宗太郎も、顔をかがやかせた。

「あたりますとも！」

朝路は、そう断言することで、にわかに自信がついたらしく、いきいきした足どりで、歩いて行った。

大手門は、冬にいためつけられて、もうひと押しすれば、ぐゎらぐゎらと崩れ落ちてしまうひどい傾斜をしめしていた。

跳ね橋も、よほど要心して渡らなければ、人一人の重みにも堪えかねる危険な状態になっていた。

朝路は、その跳ね橋を渡って、橋袂（はしたもと）に立った。そして、そのまま、じっと動かず、その人の影がさすであろう方角へ、目をあてたとたん、

「あっ！」

と、大きな歓喜の叫びをほとばしらせた。

まさしく、斜面を一町ほど下った地点に、檜の木立の中から、一個の人影が、あらわれたではないか。
　夢中で、数間を奔った朝路は、突然、顔色を一変して、立ちどまった。
　ちがっていた。
　長槍を手にして、急ぎ足に、城へ向って来る武士の顔に見おぼえがあった。
　須藤頼之助であった。
　朝路は、くるっと踵（くびす）をまわして、小走りに、跳ね橋へもどろうとした。
「おい――待てっ！」
　頼之助が、気合のこもった声をあびせた。
　首だけまわした朝路は、
「なにかご用ですか？」
　そっけなく問いかえした。
「御堂主馬之介が、戻って来て居ろう」
　頼之助は、昨日の午後から、津汲からすこし下った山中にひそみ、弓に矢をつがえて、主馬之介ののぼって来るのを、辛抱づよく待ち伏せていたのである。
　だが、今日の午（ひる）になっても、姿をあらわさぬのに業を煮やして、弓矢を長槍に持ち換えると、こんどは正面から一戦を交えるべく、悲壮な決意をしてやって来たのであった。先廻りしたと北叟笑んでいたのだが、一昼夜を待たされて、これはおくれたに相違ない、と思いかえすと、すで



に主馬之介は城内に在ると信じられて来たのである。
　ちなみに――津汲に在った日坂城の旧家臣たちは、四散して一人ものこってはいなかった。
「かくすなっ！　須藤頼之助が、堂々と、雌雄（しゆう）を決しに来たと、取次げっ！」
　朝路は、その凄じい形相を遠いものに見やりつつ、全身の血がわきたつ歓喜で、脳裡を、ぼうっとさせた。
　――ああ！　やっぱり、主馬之介様は、お帰りになるのだ！　わたしの夢は、あたった！
「おいっ！　返答せい！」
　頼之助が、苛立って、ずかずかと迫った。
　瞬間、朝路は、撥かれたように、敏捷な身ごなしで、右方のくさむらへ跳んだ。
「おのれっ――逃げるかっ！」
　頼之助は、猛然と、追った。
　朝路のからだは、山のけものと化したごとく、灌木の中を、おそろしい迅さでくぐった。
　あっという間に、頼之助より下方へとび出すと、いっさんに、坂を駆け下って行こうとした。
　朝路がとった行動は、あやまっていた。朝路は、城内へ遁げ込めばよかったのだ。主馬之介の腕の冴えは、宗太郎から、耳にたこができる程きかされていたではないか。この須藤頼之助などに、決して負けるものではない、と信ずればよかったのだ。いずこかにひそんで待ち伏せているのならいざ知らず、決闘を望んで出現しているのだ。主馬之介に、その危険など報せに奔る必要はなかったのだ。じぶん自身の身をまもることを考えなければならなかった筈の朝路である。

わが身の危険を忘れて、駆け下って行こうとしたのは、ひとつには、一秒でも早く、主馬之介に会いたかったからでもあったろう。

「うぬっ！」

頼之助は、脚力がおよばずとさとるや、長槍を、頭上へ、水平にかざして、

「ええいっ！」

気合もろとも、びゅっ、と投げた。

毒蛇と化して、それは、朝路の背中を襲った。

悲鳴を虚空にのこして、朝路のからだは、大きくのけぞったとみるや、右へ傾き――断崖から、はるかな渓流へ、生命のない塊りとなって、落下して行った。

「ちっ、ちくしょうっ！」

いつの間にか、大手門のところへ出て来ていた宗太郎が、この無慚な光景に、逆上するや、おのれが十二歳のこどもであることを忘れて、小刀を抜きはなちざま、一気に跳ね橋をとんだ。

「おっ！」

と、叫んで、主馬之介は、地を蹴った。

## 五

運命の皮肉は、この時、主馬之介を、檜の木立の中から、現わさせたのであった。

大兵の武士にむかって行く小児の姿を目撃して、



たちまち――そこへ、飛鳥のように、走り寄って、

「宗太郎、どうした？」

と、語気つよく問うや、

「わあっ！」

宗太郎は、全身を喚かせた。

「おそかった！　お師匠さまっ！　こいつが、こいつが――朝路さんを殺したあっ！」

その絶叫に、主馬之介の面貌は、紙のように血の色を引かせた。

阿修羅――まさに、それであった。

主馬之介が、その生涯において、これほどの憤怒を爆発させたのは、空前にして絶後であったといえる。

腰から白刃を噴かせるやいなや、頼之助にむかって、無言のまま、疾風を起して、驀進した。

ただの一合さえも交わらなかった。

主馬之介が、駆けぬけたあとに、頼之助は、脳天から肋骨まで、まっ二つに断ち割られて、春光に真紅の飛沫を撒いていた。

地ひびきたてて、ぶっ倒れる敵を振り向きもせず、

「宗太郎！　朝路は、どこだ？」

と、はらわたをしぼる声で、問うた。

宗太郎は、渓谷の底を、指さした。

主馬之介は、断崖に沿うて歩いて行き、人のずり落ちた跡をみとめた。
……到底、普通の手段では降りられないような絶壁へ、主馬之介は、平然として、とりつくと、一本の小枝、指がかけられるかかけられないかくらいの石の端へ、わが身を託した。
そこに――清冽な流れに、遺骸は浮き、漂い、向きをかえられて、顔を仰のけていた。
単調なせせらぎのひびく渓谷の底は、陽の光が幾重もの葉漏れで弱められて、幽明あわせたふしぎな美しい世界をつくっていた。
そのために、澄んだ水に洗われる遺骸は、いっそ、神秘な生きものに変化したように見えた。
岸へ降り立った主馬之介が、すぐにひきあげようとせずに、ゆらゆらと揺れうごく遺骸を、しばし、うっとりと見下したのは、そのためであった。
もてあそばれるような黒髪のゆらめきや、さらさらと洗われている白い肌の丸やかな豊かさなど、この後、主馬之介が死ぬまで、この世で最も美しいものとして、印象をのこすであろう。
ようやく、われにかえった主馬之介は、剣を鞘ごと抜きとると、それをさしのべて、遺骸を、足もとへ引き寄せた。
ざくっ……ざくっ……ざくっ……と、土を掘り上げる鍬の音が、黄昏の空へひびきわたる。
曾て、朝路が、老城主を葬るべく、穴を掘っていた地点を、こんどは、主馬之介が、朝路を葬るために掘っているのであった。
そのそばに、朝路は、横たわり、宗太郎の膝に、頭をのせていた。



主馬之介も宗太郎も、ずうっとおし黙ったままだった。朝路が物云わぬ身となった以上、二人もまた、口をつぐんでいるのが礼儀ででもあるかのように――。
やがて――。
穴から上った主馬之介は、遺骸を抱きあげた。
赤い夕陽を受けた死顔は、唇の色さえ褪せていなければ、ねむっているといった方がふさわしかった。
――お前の、永遠の憩い場所は、ここしかないのだ。
主馬之介は、声なく、優しく、云った。
――棺もない方がいいだろう。お前の短い生涯にふさわしい葬りかたをしてやるのだ。お前は、綺麗な衣裳も、立派な夜具も、のぞまないだろう。……おれと宗太郎の、まごころこめた祈りだけを受けて、この土の中にやすむがよい。
主馬之介が、穴の中へ、遺骸をおろそうとすると、それまで、同じところに、腑抜けた態で坐っていた宗太郎が、
「朝路さん――」
と、悲しげに呼んで、ふらふらと立ちあがって、寄って来ると、じいっと、のぞき込んだ。
「さようなら、朝路さん」
嗚咽し乍ら、別れを告げた。
主馬之介は、遺骸を穴底へ、そっと仰臥させると、宗太郎に、

「花を――」
と、命じた。
主馬之介と宗太郎が採った山の春の花が、そこにたくさん集められていた。
花は、朝路の冷たいからだを埋めるだけ、充分あった。
主馬之介は、そうしておいて、穴から上ると、鍬をとりあげた。
――安らかに、ねむれ。お前の現身（うつしみ）は、この世から消えるが、お前の俤と愛情は、おれの心の中で、永遠に生きつづける！

陽が落ち、宵闇が荒城にひろがった頃あい、大小二個の影が、跳ね橋を渡って、出て来た。
大きな影は黙々として、歩み出したが、小さな影は、いくども、いくども、ふりかえった。
「さようなら……朝路さん、さようなら……」
そうさけんで、その人が、そこに立って見送っていてくれるかのように、手をうちふったことだった。



# 解説

柴田錬三郎の書く時代小説の主人公には、どこか近代人の憂愁につながるような一脈の虚無があって、それが現代の読者にも歓ばれるのであろう。周知のように、その極北は眠狂四郎であるが、この「美男城」の主人公御堂主馬之介にも、淡い虚無感が漂っている。
「美男城」は、「剣は知っていた」「孤剣は折れず」とともに、柴田氏の戦国時代を背景とする三部作で、これらに共通していえることは、弱肉強食をほしいままにする戦国のならわしであった、肉親の闘争が、その大きい主題になっていることである。「剣は知っていた」の眉殿喬之介には、どこかハムレットに似たような運命に奔弄される姿があるが、この御堂主馬之介の悲運は、彼が父と信じていた伊能盛政の子ではなく、実は豊臣秀吉の子であったことに始まる。いわば不義の子であるが、戦国の時代には、強権者には妻をとられても立ち向えなかった。あらゆる倫理が、権力絶対の前には失われていた。
ここから、戦国の悲劇がすべて端を発しているといってよいが、御堂主馬之介の悲劇もそうであった。しかも、彼自身はこのことを知らず、なぜ父が自分を愛してくれぬかも理解できず、また、なぜ父が突然として大阪方を裏切ったかもわからなかった。いわば、彼は自分について、なんら知らされぬままに成長してきた青年であった。
彼は、ついに父を斬ることに決める。そして自らも死のうと考える。

難されたりもした。また、たまに文芸雑誌に書いても、志賀直哉や中野重治などから貶されて、ながらく自棄的な状況にあった。

実は、私は当時、氏と親交し、しばしば逢っていたのであるが、当時の氏が、今日のような花形作家として立ち直ろうとは予想できなかった。批評家としての私の不明を恥じなければならぬところである。その氏を立ち直らせたのは、佐藤春夫であった。佐藤氏は、才能ある柴田氏が、そういう状態にあるのに同情し、激励した。その激励に「感激し、奮起して夢中」になって書いたのが、「デスマスク」という小説であった。この小説は、受賞はしなかったが、芥川賞の候補となり、文壇的に氏を再評価させるに有力な役割を果した。そして、これに力を得て書いた「イエスの裔」によって直木賞を受けたのである。

これらの作品は、実際それまでの氏の作品にはみられなかった迫力をもち、その才能のありったけを注入した切実さをもっている。

しかし、氏の才能は意外な場所からもあらわれてきた。すなわち時代小説で、「江戸群盗伝」「眠狂四郎」にはじまるブームが起ってきたが、その時代小説にダンディズムがあったことが、強みである。

それまでの氏は、六角のフチナシ眼鏡をかけ、黒いソフトに黒い背広、黒い蝶ネクタイの服装であったが、そういうダンディズムが「眠狂四郎」にもみられる。いまは氏は常に和服である。

〝剣豪作家〟としてのダンディズムが、そういう変化をとったのであろう。



柴田氏は、大正六年、岡山の生れである。和気郡鶴海という村で、向いの村が正宗白鳥の郷里であるという。氏自身語るところによれば、村のワンマン的小地主の三男坊として育ったそうである。

慶応大学で中国文学をまなんだ。それと同時に、聖書と切支丹についての知識を得た。「日本の美少年」そのほかキリシタンものがあり、また、その知識は時代小説にも適度にとりいれられてある。

戦後、日本出版協会に勤務し、日本読書新聞を再刊して、今日みられるような成果を示したのは、氏のジャーナリスティックな才能を語るもので、当時は短評や匿名批評を、ほとんど一人で書きまくっていたそうだ。戦時中、この出版統制会につとめていた時代の生活は、小説「善魔の窖（あなぐら）」にくわしいが、当時はデカダン作家の志望者らしい、かなり無頼な生活も体験したようである。

戦争中には、南方へ一兵士として転戦、あるときは南方洋上に七時間もただよったというが、これが原因で胸部疾患を病んだ。氏がデカダンスな俗悪小説の書き手となったのは、この病気と決して無関係ではなかったろうと思われる。病気からくる絶望感が、氏を暗い世界に招いたのであろう。氏の作品には、現在でも、暗い雰囲気があり、この「美男城」も、いわゆるハッピー・エンドではない。氏は最後にいたって、朝路を、幸福を寸前にみながら殺させている。

また、氏には子供向きの名作文庫や偉人伝などの読物がたくさんある。これは少年読物を三十冊書いておけば一生喰うに困らないという計算だそうであるが、今日では、もはや、そういう読

物を書くには、あまりにも流行作家となって多忙をきわめている。五味康祐、松本清張とともに、時代物も現代物も書けるところが強みで、週刊誌を中心とする中間小説時代は、氏のようなタレントを要求している。推理小説とともに、時代小説が今日のようなブームをおこしている時、氏の存在はますます華やかになってゆくであろう。現代小説では味えない魅力、それはあるときは剣の魅力であり、あるときは忍者の魅力でもある。波乱万丈の大ロマンの世界は、どうやら、現代小説では無理で、時代小説において、はじめて作家の奔放な空想力とともに展開されるであろう。柴田氏に、そういう大ロマンを希望しても無理ではないであろう。「美男城」にも、その可能性がみられよう。

なお、この作品は、中村錦之助の御堂主馬之介で、東映で映画化された。

十返　肇

- 泥にまみれて　石川達三
- 風にそよぐ葦（前・後）　石川達三
- 薔薇と荆の細道　石川達三
- 自分の穴の中で　石川達三
- 神坂四郎の犯罪　石川達三
- 青色革命　石川達三
- 四十八歳の抵抗　石川達三
- 人間の壁（上・中・下）　石川達三
- 悪女の手記　石川達三
- 傷だらけの山河　石川達三
- 愛の終りの時　石川達三
- 洒落た関係　石川達三
- 青春の蹉跌　石川達三
- 生きている兵隊　石川達三
- 僕たちの失敗　石川達三
- 開き過ぎた扉　石川達三
- 若き日の倫理　石川達三

- 金環蝕　石川達三
- 人間と愛と自由　石川達三
- 最後の共和国　石川達三
- 約束された世界　石川達三
- 青春の奇術　石川達三
- 時代の流れとともに　石川達三
- 解放された世界　石川達三
- 若い人（上・下）　石坂洋次郎
- あじさいの歌　石坂洋次郎
- 青い山脈　石坂洋次郎
- 石中先生行状記（全四冊）　石坂洋次郎
- 美しい暦　石坂洋次郎
- 何処へ　石坂洋次郎
- 暁の合唱　石坂洋次郎
- 山のかなたに　石坂洋次郎
- 丘は花ざかり　石坂洋次郎
- 山と川のある町　石坂洋次郎

- わが日わが夢　石坂洋次郎
- 霧の中の少女　石坂洋次郎
- 草を刈る娘　石坂洋次郎
- 陽のあたる坂道　石坂洋次郎
- あいつと私　石坂洋次郎
- 光る海　石坂洋次郎
- 麦死なず　石坂洋次郎
- 太陽の季節　石原慎太郎
- 亀裂　石原慎太郎
- 完全な遊戯　石原慎太郎
- 行為と死　石原慎太郎
- 星と舵　石原慎太郎
- 挑戦　石原慎太郎
- 歌行燈・高野聖　泉鏡花
- 内灘夫人　五木寛之
- 風に吹かれて　五木寛之
- ゴキブリの歌　五木寛之



- にっぽん三銃士（上・下）　五木寛之
- 変奏曲　五木寛之
- 鳩を撃つ　五木寛之
- 地図のない旅　五木寛之
- 野菊の墓　伊藤左千夫
- 伊東静雄詩集　桑原武夫・富士正晴編
- 現代詩の鑑賞（上・下）　伊藤信吉
- 詩のふるさと　伊藤信吉
- 現代名詩選（上・中・下）　伊藤信吉編
- イカルス失墜　伊藤整
- 典子の生きかた　伊藤整
- 氾濫　伊藤整
- 火の鳥　伊藤整
- 若い詩人の肖像　伊藤整
- 青春　伊藤整
- 伊藤整詩集　伊藤整

- 小説の方法　伊藤整
- 一千一秒物語　稲垣足穂
- ブンとフン　井上ひさし
- 表裏源内蛙合戦　井上ひさし
- 道元の冒険　井上ひさし
- 虚構のクレーン　井上光晴
- 地の群れ　井上光晴
- 猟銃・闘牛　井上靖
- ある偽作家の生涯　井上靖
- あした来る人　井上靖
- 敦煌（とんこう）　井上靖
- あすなろ物語　井上靖
- 黒い蝶　井上靖
- 風林火山　井上靖
- 詩集 北国　井上靖
- 射程　井上靖
- 氷壁　井上靖

- 天平の甍　井上靖
- しろばんば　井上靖
- 蒼き狼　井上靖
- 楼蘭（ろうらん）　井上靖
- 憂愁平野　井上靖
- 姨捨（おばすて）　井上靖
- 風濤（ふうとう）　井上靖
- 夏草冬濤　井上靖
- 額田女王　井上靖
- 後白河院　井上靖
- 幼き日のこと・青春放浪　井上靖
- 西域物語　井上靖
- 四角な船　井上靖
- 多甚古村　井伏鱒二
- 山椒魚　井伏鱒二
- 遙拝隊長・本日休診　井伏鱒二
- 集金旅行　井伏鱒二

駅前旅館　井伏鱒二
黒い雨　井伏鱒二
海潮音　上田敏訳詩集
小説の味わい方　臼井吉見
色ざんげ　宇野千代
おはん　宇野千代
桜島・日の果て　梅崎春生
幻化　梅崎春生
文学と私・戦後と私　江藤淳
江戸川乱歩傑作選　江戸川乱歩
妖　円地文子
女坂　円地文子
朱を奪うもの　円地文子
傷ある翼　円地文子
女面　円地文子
なまみこ物語　円地文子
白い人・黄色い人　遠藤周作

海と毒薬　遠藤周作
留学　遠藤周作
月光のドミナ　遠藤周作
大変だァ　遠藤周作
牧歌　遠藤周作
影法師　遠藤周作
母なるもの　遠藤周作
ピエロの歌　遠藤周作
彼の生きかた　遠藤周作
死者の奢り・飼育　大江健三郎
われらの時代　大江健三郎
芽むしり仔撃ち　大江健三郎
性的人間　大江健三郎
遅れてきた青年　大江健三郎
日常生活の冒険　大江健三郎
空の怪物アグイー　大江健三郎
見るまえに跳べ　大江健三郎

われらの狂気を生き延びる道を教えよ　大江健三郎
俘虜記　大岡昇平
武蔵野夫人　大岡昇平
野火　大岡昇平
花影　大岡昇平
愛について　大岡昇平
日本語の年輪　大野晋
婉という女　大原富枝
亜紀子　大原富枝
野獣死すべし　大藪春彦
血の来訪者　大藪春彦
ウィンチェスターM70　大藪春彦
絶望の挑戦者　大藪春彦
戦いの肖像　大藪春彦
観光バスの行かない……　岡部伊都子
老妓抄　岡本かの子
或る聖書　小川国夫



小川未明童話集　小川未明
奥の細道ノート　荻原井泉水
暢気眼鏡　尾崎一雄
虫のいろいろ　尾崎一雄
金色夜叉　尾崎紅葉
人生劇場　青春篇(上下)　尾崎士郎
人生劇場　愛欲篇(上下)　尾崎士郎
人生劇場　残侠篇(上下)　尾崎士郎
人生劇場　風雲篇(上下)　尾崎士郎
人生劇場　離愁篇　尾崎士郎
人生劇場　夢現篇　尾崎士郎
人生劇場　望郷篇　尾崎士郎
帰郷　大佛次郎
旅路　大佛次郎
夫婦善哉　織田作之助
平将門(上中下)　海音寺潮五郎
西郷と大久保　海音寺潮五郎

幕末動乱の男たち(上下)　海音寺潮五郎
パニック・裸の王様　開高健
日本三文オペラ　開高健
ロビンソンの末裔　開高健
フィッシュ・オン　開高健
新しい天体　開高健
フランドルの冬　加賀乙彦
檸檬(れもん)　梶井基次郎
愛の生活　金井美恵子
夢の時間　金井美恵子
大和古寺風物誌　亀井勝一郎
人生論・幸福論　亀井勝一郎
日本のアウトサイダー　河上徹太郎
雪国　川端康成
伊豆の踊子　川端康成
花のワルツ　川端康成
愛する人達　川端康成

掌の小説　川端康成
舞姫　川端康成
千羽鶴　川端康成
虹・浅草の姉妹　川端康成
山の音　川端康成
川のある下町の話　川端康成
女であること　川端康成
虹いくたび　川端康成
みずうみ　川端康成
名人　川端康成
眠れる美女　川端康成
古都　川端康成
新文章読本　川端康成
愛・自由・幸福　河盛好蔵
人とつき合う法　河盛好蔵
親とつき合う法　河盛好蔵
藤十郎の恋・恩讐の彼方に　菊池寛

- 父帰る・屋上の狂人　菊池寛
- 硫黄島・あゝ江田島　菊村到
- 暖流　岸田国士
- 夜と霧の隅で　北杜夫
- 幽霊　北杜夫
- どくとるマンボウ航海記　北杜夫
- どくとるマンボウ昆虫記　北杜夫
- 船乗りクプクプの冒険　北杜夫
- 楡家の人びと（上下）　北杜夫
- 遙かな国 遠い国　北杜夫
- 高みの見物　北杜夫
- 南太平洋ひるね旅　北杜夫
- 星のない街路　北杜夫
- 奇病連盟　北杜夫
- あくびノオト　北杜夫
- 天井裏の子供たち　北杜夫
- へそのない本　北杜夫

- マンボウおもちゃ箱　北杜夫
- 北原白秋詩集　神西清編
- 夕鶴・彦市ばなし　木下順二
- ことばの歳時記　金田一春彦
- 草野心平詩集　豊島与志雄編
- 武蔵野　国木田独歩
- 牛肉と馬鈴薯・酒中日記　国木田独歩
- 現代名歌選　久保田正文編
- 学生時代　久米正雄
- 出家とその弟子　倉田百三
- 婚約　倉橋由美子
- 暗い旅　倉橋由美子
- ヴァージニア　倉橋由美子
- 妖女のように　倉橋由美子
- 夢のなかの街　倉橋由美子
- 人間のない神　倉橋由美子
- 休日の断崖　黒岩重吾

- 真昼の罠　黒岩重吾
- 背徳のメス　黒岩重吾
- 象牙の穴　黒岩重吾
- 失われた古代大陸　黒沼健
- 七人の予言者　黒沼健
- 霊と呪い　黒沼健
- 三等重役　源氏鶏太
- 新・三等重役（上中下）　源氏鶏太
- 鬼の居ぬ間　源氏鶏太
- 鏡　源氏鶏太
- 新サラリーマン読本　源氏鶏太
- 天上大風　源氏鶏太
- 実は熟したり　源氏鶏太
- 夢を失わず　源氏鶏太
- 停年退職　源氏鶏太
- 男性無用　源氏鶏太



- 男と女の世の中　源氏鶏太
- 家庭との戦い　源氏鶏太
- 口紅と鏡　源氏鶏太
- 掌の中の卵　源氏鶏太
- 歌なきものの歌　源氏鶏太
- 女の顔　源氏鶏太
- 小泉八雲集　上田和夫訳
- 父・こんなこと　幸田文
- 流れる　幸田文
- おとうと　幸田文
- 黒い裾　幸田文
- 北愁　幸田文
- 幼児狩り・蟹　河野多恵子
- アメリカン・スクール　小島信夫
- 蟹工船・党生活者　小林多喜二
- Xへの手紙・私小説論　小林秀雄
- 作家の顔　小林秀雄

- ドストエフスキイの生活　小林秀雄
- モオツァルト・無常という事　小林秀雄
- 近代絵画　小林秀雄
- 地球になった男　小松左京
- アダムの裔　小松左京
- 戦争はなかった　小松左京
- 闇の中の子供　小松左京
- 時間エージェント　小松左京
- 夢からの脱走　小松左京
- 物体O　小松左京
- 秘剣・柳生連也斎　五味康祐
- 柳生武芸帳（上中下）　五味康祐
- 薄桜記　五味康祐
- お吟さま　今東光
- 春泥尼抄　今東光
- 悪名（あくみょう）　今東光

- 白痴　坂口安吾
- くれない　佐多稲子
- 素足の娘　佐多稲子
- 体の中を風が吹く　佐多稲子
- 田園の憂鬱　佐藤春夫
- 佐藤春夫詩集　島田謹二編
- 多情仏心　里見弴
- 重き流れの中に　椎名麟三
- 永遠なる序章　椎名麟三
- 美しい女　椎名麟三
- 自由の彼方で　椎名麟三
- 和解　志賀直哉
- 暗夜行路（前後）　志賀直哉
- 清兵衛と瓢箪・網走まで　志賀直哉
- 小僧の神様・城の崎にて　志賀直哉
- 灰色の月・万暦赤絵　志賀直哉
- 父の乳　獅子文六

美(び)男(なん)城(じょう)

定価280円

新潮文庫 草150 E

昭和三十五年七月三十日 発行
昭和五十三年十一月三十日 二十六刷

著者 柴(しば)田(た)錬(れん)三(ざぶ)郎(ろう)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四一一
振替 東京四—八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊇ 印刷・凸版印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社